

---

# 勇者 = 三毛猫？？

もんかる

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者Ⅱ三毛猫??

### 【Nコード】

N3072H

### 【作者名】

もんかる

### 【あらすじ】

勇者を召喚したはずがそこにいたのは三毛猫（雄）だった?!自分勝手にマイペースな猫視点からお送りする心のせまいファンタジー!なにこれ、ギャグじゃん。 一話がたったの1000文字!すぐに読めちゃうぜ

## 1・なにこれ、召喚されたし（前書き）

『』で表記されている言葉は、猫の言葉として読んでください。人間には通じていません。

## 1 - なにこれ、召喚されたし

現実世界から異世界へ飛ばされるのは、なにも人間だけに限ったことじゃない。

人間だけに限らせているのは、ただの先入観ってやつだ。

『意味わかんね。なにこれ』

俺は呟く。

周りには多くの人間がいて、なにやらざわついている。

「あ、あなたが勇者様でしょうか？」

意味わかんね。なにコイツ。

なんか変な色の髪をした女の人俺を見下しながら、しかもなんか動揺しながら話しかけてきた。

『うつせー。飯よこせや』

俺がそう言うと、周りがさらにざわつき始めた。

なにこれ。ってかうわつ、俺人間の言葉わかるんですけど。

「えつと……失敗？」

俺を見て失敗とは何事だ。失礼にもほどがある。周りを囲んでいた人たちも次々に帰りだした。

「ねこちゃんだー」

幼女が俺の元へ駆け寄ってきた。

「ねこちゃん、ねこちゃん」

うつとうしいな。

俺は世にも珍しい三毛猫の雄だぞ。もっと崇めろってんだ。

俺はずっとその場に座っていたが、結局その場に残ったのは一番最初に言葉を放った変な色の髪をした女だけだった。

「な、なぜ失敗なんてしてしまったのでしょうか・・・」

女は今にも泣きそうな顔をしている。泣きそうな顔で、俺の顔をのぞきこんできた。

「それとも、あなたがこのバツゼルディア王国を、いや世界を救ってくれるのでしょうか？」

マジで意味わかんねコイツ。寝言は寝て言えし。

「きつと・・・きつとそうに違いないわ」

コレどこの宗教団体？あーお腹すいたわぁ。なんか漁りに行こうかな。

「私の名前はミフリス。この王国の筆頭魔術師です。あなたは違う世界から呼ばれた勇者です・・・たぶん。どうか我々を魔王の手から御救いください」

あ、良い匂いしてきた。なにこれ、焼き魚っぽい。ちょっと行ってみよ。

俺は立ち上がり、ゆつくりと匂いの方へ歩き出した。

「あっ！そ、そっちの方角は魔王がいるとされている北のアンスピカ山脈の方角。やっぱりあなたは勇者なのですね？」

俺の後を女がついてくる。

後ろに立たれるのすっごい嫌なんですけど。

「勇者様。どうか魔王を倒してください！」

女が頭を下げてる間に、俺は匂いの家を見つけて、その庭で焼いていた焼き魚をもらいに庭の中へと侵入していた。

「き、消えた？もしかして・・・」

もしかしない。お腹すいただけだから。

庭にはおっさんが一人で三匹の魚を焼いていた。

「お、三毛猫じゃねえか。なんだ、ほしいのか？」

話のわかるおっさんじゃねえか。

俺は甘い声でみゃーっと鳴き、おっさんの足元にくつついた。

「しょうがねえなあ。今日は大漁だったからな、一匹くらい分けてやらあ」

景気の良い話だ。

俺の目の前に無造作に地面に焼き魚が置かれ、俺は焼き魚に食いついた。

まあしかし俺は猫舌なもんで、噛みついて身をほぐしたらすぐに

ペツと吐いてを繰り返して、冷ましながら食べた。

『じゅっつおっつあん』

それだけ言って、俺は庭をあとにした。

ってかここ日本じゃねえじゃん。なんか今気付いた。全然建物の種類が違う。匂いも違うし、地面が固いコンクリートじゃない。

いつも通りに塀の上を歩こうと思ってたら、歩けるような塀とかねえし。

眠い。飯食ったら眠いわ。

とりあえず、適当なところで俺は寝ることにした。

詰まるところ、ここが日本でも異世界でもなんでも良かった。飯が食えて、眠れて、退屈さえ凌げれば。

ただ、そんな甘い考えは起きた時にはすっかり忘れてしまうことを、俺はまだ知るよしもなく、深い眠りについた。

## 1 - なにこれ、召喚されたし（後書き）

コメディ小説を書くのが初めてなもので、何かアドバイスや感想など頂けたら嬉しいです。

後先考えずに書き出してる感が若干滲んですが……ががんばりますw

### 追記

この作品は猫視点、猫思考で描かれているため、極端に描写説明が不足します。

どうか、勝手にご想像して読んでいただけると助かります。



## 2 - なにこれ、捕まっとる

なにこれ。なんか知らん間にケージの中にいるんですけど。しかも揺れてるし。馬の歩く音と、車輪の音もする。

「そもそもだな、魔法つてもんは考えるもんじゃねえ。感じるもんなんだよ。んで、あとはイメージするだけ」

タバコの臭いがする。それと図太い親父の声。

「でも、どうしてもうまくできないんだけど・・・」

あと女の子の声。

「だから、お前は集中力が足りねえんだって。もっとこつ身体のか所に集中してみる。それを解き放つ瞬間に、イメージするんだよ」

なにやら魔法について女の子が親父に教わっているようだけど、俺には関係なさそうだ。

つかここせまっ！ぎりぎり反転できるくらいのスペースだし。なんで俺今まで気付かずにここにいるんだろ。

「それにしてもおとなしいなあ。死んでんじゃねえのか？」

親父が言うや否や、女の子が俺のケージを覗き込んできた。

「あ、生きてるよ」

起きてるよ、の間違いだよ。

「三毛猫の雄は高く売れるからな。ほんとにラッキーだったぜ」

ああ、俺ってば売られるわけだ。

「寝てるどころだって、猫だし捕獲は難しいんだけどな。今回は馬鹿猫でよかったぜ」

そんなに動物を並べてもいいことないよ。

「猫さん売っちゃうの？」

って俺売られるのかっ！？やべっ、起きて間もなく頭が回ってなかったわ。

「なんだよ、飼いたってのか？」

「うん」

えっと、どうしよう。

「それはやめたほうがいいと思う」

なんとなく、俺は口に出していた。

「あ？」

「え？」

ん？

「今、リュカが喋ったわけじゃないよな？」

「うん」

あれ？

「つてことはだ・・・」

なにこれ、俺人間の言葉喋ったし。きもっ！  
親父は絶句していた。

「すっごーーい！！！！！！」

一人、猛烈に感動してる子がいるし。  
俺が自分自身にめっちゃ引いてるのに、こいつだけ食いついてきやがった。

「ねえねえ、猫さん。お名前は？」

ほっといてくれ。

「ねえってば！」

「ない」

ほんとに人間の言葉だ。この世界に来てから、言葉を理解することとは出来たけど、まさか喋れるようになってとは思わなかった。

「じゃあ私が考えてあげるね」

「だいごろうで十分だろ」

親父の横やり。それは嫌だ。

「パパさあ、センスないよねえ」

娘だったんだね。ってか親父ちよつとかawaiiそうなくらい哀れな目で見られてるんですけど。

「むう……商品に名前なんていらねえんだよっ!」

「売るのが嫌だ!」

「喋る猫で三毛猫の雄。もう一気に超金持ちになれるぞ?」

「じゃあ売る」

売るのがっ?!

やっぱり商人の娘は商人なのね。お金が絡むとあっさりなのね。

「ちょうど次の町は商業都市だ。オークションにでも賭ければ儲けられそうだな」

「そうだね、パパ」

この親子嫌いだわ。ってか商人嫌いだわ。

「ご飯あげていい?」

「ああ、いいぞ」

でもちよつと好きかも。

## 2・なにこれ、捕まっとる（後書き）

肝心の三毛猫の名前がまだ決まっていないというwww  
このままだと「ミケ」になりそうで焦ってます。なんて安易な・・・  
。

### 3 - なにこれ、買われたし

馬車の上よりも、人に持って歩かれるほうが気持ち悪い。

「ちょ・・・酔った」

けど無視された。  
すっげえ腹立たしい。

「こちらの猫が商品でございますね？」

「ああ」

「ほう、三毛猫の雄でございますか」

「人間の言葉も喋れるって言ったらどうする？」

「ふむ？」

なにやらオークション会場なる場所へ連れてこられたらしい。

俺のケージの周りには金ぴかな宝石やら絵画やらが置かれている。

あ、あの絵のざらつき感は爪を磨ぐのに良さそう。

「続きまして、世にも珍しい三毛猫の雄の登場でございます」

会場がざわつく。

「しかも！この猫なんと人間の言葉を話すとか」

さらにざわつく。

「では実際に喋っていたくださましょ」

会場が一気に静まり、ケージの中にいる俺に視線が集まった。すぐえ視聴率にちよつと興奮したが、俺は何も喋らなかつた。さつき無視されたのをまだ俺が引きずっていたから。

「・・・・・・・・あれ？」

会場がまた少しずつざわつき始めた。

「で、では10ミリドルから始めましょう。喋らなくても三毛猫の雄は貴重ですよ？」

慌てた司会者だったが、なんとかオークションを再開させた。

「存外安かつたな」

「うん」

商人の親子は結局12ミリドルで売れた俺に対してひどい言いようだった。

やっぱこいつら親子嫌いだわ。

でも、確かに安いと言われるのはちよつと切ない。この値段の伸びの悪さときたら・・・・。

どうせならすつげえ饒舌に喋って、10倍くらい高く買われれば良かったかも。

まあ、そうは言っても、親父たちの話じゃあ12ミリドルあれば2年は食えるらしい。

俺ってばやっぱりすつげえ存在なんじゃね？

「君の名前は今日からミケレイド・ダルシウム・メディゲジャネスだ！」

三毛猫だるだるメスじゃねえ？

オークションで買ったのはこの近辺でも有名な貴族の子息らしい。マジで名前のセンスねえ。もう忘れたし。だいごろうの方が100倍マシだわ。

「じゃあね、猫さん」

商人の娘が俺に別れを告げた。結局お前は俺に名前を付けてくれなかったな。

ケージに入れられて数分、なんか超でかい建物の中に俺はいた。黒い首輪を付けられて、プレートにさっきのなんとかって名前が入っている。

え、これって俺の一生の名前になるの？まじで？

「ほらミケ、ねこじゃらしだよー」

やべっ、なにこれ。変な動きしてるし。超気になる！でもやっぱりそれよりも名前の方が気になるわ。

「あのお、この名前ちょっと嫌なんすけど……」

もう我慢できなくなって、俺はつい口走ってしまった。

「うわっ！ほ、ほんとに喋った！！！！ママー！！！！」

なんかどっか行っただし。

この隙に俺もどっか行こう。

あー、この首輪どうにかして外せないかなあー。



### 3 - なにこれ、買われたし（後書き）

すごいどうでもいい補足なんですが、三毛猫の雄って実際めちやくちや値が張るようです。いろんな説がありますが、億単位という噂も・・・。

#### 4 - なにこれ、魔法？

なんか窓開いてたから外に出ちゃった。  
庭広いし。迷子になりそう。

「ミケー？どこー？？？」

少年が探しに来てる。

それよりもどうにかしてこの首輪を外せないかな。  
ん？待てよ？あの商人の親父の言っていたことを思い出す。

「集中・・・・・・・・？」

自分の額に集中する。

それを開放する瞬間に首輪が外れるイメージをする。

コロンコロン……。

なにこれ、マジ簡単に取れたし。  
ってか俺魔法使ったっぽい。  
やっぱ俺天才じゃん。

「どーこー……………？？」

うん、逃げよう。

買ってくれた少年には感謝してるよ。

ただ、自分の名前を覚えきれないってのが致命的だった。  
バカでかい堀に上り、俺は屋敷の外に出た。

外で見た景色は、一番最初の町よりも日本に近い気がする。

あ、ご飯食べてからくれば良かったし。  
ってかこれからどうしよう。

ん？良い匂いする。ちょっと行ってみよう。  
とある建物に入る。そこはずいぶん活気があって、ずいぶんたく  
ましい人達が大勢いた。

「なんだあコイツ。迷い猫か？」

ハゲのおっさんが俺を睨む。

こえー。ってか筋肉どんだけついてんのこのマツチヨ。

あ、なんかあつちで女の人が飯食ってるじゃん。  
そそくさとせがみに行く。

「お、三毛猫だ。なにになに？」

ご飯をください。

「ああ、そう？そんなに私って美人？よく言われ・・・」  
「ちげーし」

思わずツツコミを入れてしまった。

「うおっ、喋るの君？」

もうどうしようもないからコクンと頷く。

「ふーん、高く売れそうね？」

みんな同じ発想にたどりつくんですね。

「ご飯ください」

「いいよ」

「売らないでください」

「………いいよ」

間があるんですねー。

とりあえず俺はなんかパンみたいなものをもらった。  
なにこれ、意外とうまいし。

「そだつ！私と組まない？」

「いやだ」

「ストレートだねえ。ちょっとへこむよ」

と言いつつも笑っている。

「じゃあさ、とりあえず私の仕事を見てみてよ。君には何かただならぬものを感じるんだよね」

なにコイツ。また勇者とか言ってきそうな流れ。

「まあまあ、とりあえずついておいでって」

退屈凌ぎになるかな？

## 5・なにこれ、兄弟ぼっこばこ

「あのさ、名乗るの忘れてたんだけど、私セリーヌね」  
「へえ」

「ほら、この見た目でしょ？名前にぴったしっていうか、やっぱり美人とし……」

「俺にも名前くれ」

もういちいち自分の世界を持つてるなあ。

「名前ないの？」

「ミケなんとかかんとかメスじゃねえ」

「それ名前？」

「いや、だいごろう」

「ほんとに？」

「だから新しくつけてくれ」

納得したらしい。

「じゃあ簡単よ。君は今日から□□」

「エ□？」

「□□」

人間の言葉で初めてボケたのにスルーされたし。ちょっとへこむ。

「なんで？」

「三毛はしろ、くろ、ちやいろつて全部『ろ』が入ってるじゃない」

「そしたら□□□じゃね？」

「それだとキモいじゃん」

うん、キモいよね。

なにこれ、すっげえ簡単にふつうの名前が決まった。  
名前の話しながら歩いてたら、いつの間にか町の外の森に来ていた。

話しながらだったからあんまり意識しなかったけど、この世界に来て一番歩いたかもしれない。

もう疲れたんですけど。

「そろそろ出てくるからね」

なにが？

「ほら、2匹」

確かに変な気配がする。

そう感じたと同時に2匹の変なのが現れた。

見たことのない・・・変なの。

「これがジャツコっていう猫科のモンスターよ」

「もしかしてさ・・・倒すの？」

「へ？もしかしなくても倒すけど」

「ああ兄弟・・・」

あつちは全く兄弟なんて思ってくれてなさそうなほど殺気にみまぎってる。

「ほらほらボーっとしてると食われるよ！」

すでに戦闘モードに入ったセリーヌは、自身の武器であるらしい

弓を構えていた。

なんかこの戦闘の雰囲気についていけないんですけど。

「てい」

しゅぱっ！

うわっ、痛そう。

矢がジャツコの腹部に刺さっている。

「あのね、本来弓はさ敵に見つかる前に先制することが一番いいんだけどさ」

なにコイツ、頼んでないのに自分の武器の利点を喋りだしたし。

「パーティー組んでたら話は別なんだよね」

パーティー？誕生日？クリスマス？いや、両方知らない行事だけどさ・・・。

「パーティーってのは一緒に組んで狩りする仲間のことね」

心を読まれてる？！

ってか、ジャツコがさ、完全に俺のこと無視してるんですけど。切ない。

「二匹いるとき、一匹相手にしてる間にもう一匹にやられちゃうんだよね」

とか言いつつやられてないじゃん。

めっちゃ身のこなし早いし。猫並じゃんお前。

「それでさ……」

「ん？」

「ロロも座って毛繕いしないで戦ってほしいんだけど……」

「ご指名いただきましたー」。

無理でしょ、ふつうに。

「私一人でもなんとか大丈夫なだけどさ。ロロってさ、魔力を感じ  
るんだよね」

「魔力って感じられるの？」

すっげ、今ジャツコに跳び付かれたのに、なんなくかわしたよ。

「そだよ。例えば火や水をイメージしてごらん。それでこのジャツ  
コを倒すイメージ」

火か水なら火の方が好きだなあ。火は暖かいし、水は濡れるし。

「ん？あ、俺が倒すの？だからずっと攻撃避けてたの？」

「………うん」

全然察してなかった。すっげえ順調に毛繕いしながら観戦してた  
し。

えっと、集中して火をイメージして、解き放つ瞬間にジャツコに  
むかって……。

「にゃ！」

ぼおおおお！！！！！！！！！！



なにこれ、すっげえの出た。

直径10cmくらいの火の球が30個くらい出たんですけど。  
ってかジャツコ燃えとる。

「うそ………」

セリーヌも予想だにしていなかったのか、めっちゃ燃えとるジャツコを見てドン引きしている。

一番引いてるのは俺自身だけど。

「キモいほど火が出たんですけど」

「ロロすっご！君やっぱりただ者じゃなかったね！」

そっか、やっぱり俺って天才だったのかあ。

## 5・なにこれ、兄弟ぼっこぼこ（後書き）

てきとーな戦闘ですみません。

これからはもうちよっと丁寧に書きます・・・たぶん。

あと、結局三毛猫の名前は安易なたちに決定してしまいました。  
ミケよりは・・・いいですね？

## 6 - なにこれ、はやっ！

「あのね、魔法って全部イメージだから、基本的になんでもアリなんだよね」

魔物を倒した帰り道、セリーヌが俺に色々と説明をしてくれていた。

「例えば、自分の足が速くなるイメージをすれば、自身のスピードを速くすることが可能」

猫なんで十分速いんで。

「あとは攻撃力というか、攻撃する自身の部位を頑丈にしたりもできる」

敵に近付くのと怖すぎて無理。

「この世界の魔法使いは、たいてい遠近両方の戦闘をこなせるのよ」

え？なに？俺になんの期待をしてるの？

「あ、でも、魔力には個人差があって、イメージが強すぎると具現化できない場合があるから気をつけてね」

そのイメージが湧かない人のために教科書とかあるんだって。ってかみんなある程度の基礎は学校で学んだって。

学校ってなんですか？

こちらら本能のみで生きてきたんで、理解するのが難しいんです

よね。

「いいですよー、人間様は」

「なんでいきなり悲観的発言なのさ？」

「いえ、一度野良の世界にいらっしやったらわかると思いますけど」  
「ふーん」

興味ないよね。うん、俺も基本的に人間に興味ないもん。

「さ、それで本題だけど」

「あ、お腹すいた」

「口口、私と組んで狩りしない？」

「ちよつとトイレ」

「つて聞いてよ！」

やっとなつこまれた。

「うん、ちよつと待つて。ほんとに漏れそうだから」

茂みに隠れて用をたして、砂で隠す。

「で？」

「組もう！」

「お腹すいたつてば」

「私と組めば、好きな時に好きなだけご飯を食べられるよ？」

「次は何を狩るのでしょうか？」

早くそれを言えし。

「現金なヤツ」

「愚問。猫だもん」  
「なるほど」

つか歩くの疲れた。  
あ、さっき教えてくれた魔法使ってみよう。  
なんだっけ。自分の足に集中するんだっけ。

「はやっ！」

なにこれ、普通の速足のはずなのに激はやっ！

「うわっキモッ！走ってないのにめっちゃ速いし。ってかなんで急に魔法使ったの？」

セリーヌを中心に、その辺を歩きまわってるが全然疲れない。

「なんとなく疲れたから」  
「うっとうしいんだけど」

自分でもそう思うんだけど・・・。  
なにこれ、だんだん快感になってきた。

「うおっ」

楽しくなってきたところで急にスピードが落ちた。

「お、ようやく切れたわね」

うわっ、急にすごい疲労感が・・・。  
足元がふらふらする。

「魔法で強化すると、肉体で感じるものは後からドックとくるから気をつけたほうがいいわよ」

なにコイツ、先に言えし。

## 6 - なにこれ、はやっ！（後書き）

ただの魔法の説明の話です。

説明は必ず必要なので、説明をうまく話に盛り込める人を尊敬します。

## 7・なにこれ、もうちょっと

どうやら、初めてセリーヌに会った場所はギルドと呼ばれている場所らしい。

「つまり、野良猫集会所みたいなものか？」

「いや、知らないけど・・・」

なにコイツ、まさか野良猫集会所を知らないヤツがいるなんて・・・。

ようは、依頼をこなせば報酬がもらえるシステムだって。

「あ、これにしょ」

セリーヌは掲示板に張り出されている紙の中から一枚取って俺に見せた。

「いや、見せられても文字わからんし」

「ですよー」

あれあれ、馬鹿にされてる？

「名付き化け猫のプリシア討伐」

「なんでまた兄弟・・・」

絶対にわざとだと思う。

「名付きってなに？」

「モンスターの中には、同じ種族でも特筆して強いものが混ざって



いることがあるの」

俺みたいなヤツね。

「一度の討伐で倒せなかった筆頭株には名前が付けられて、報酬がガクッとアップするのよ」

報酬とか俺には関係ないけどね。

俺はこのギルド内居酒屋で一番安い焼き魚定食が食べられれば満足だし。

「んじゃ、行きますか」

「遠い？」

「・・・・・・ソナコトナイヨ」

人間の何倍歩くか知ってる？遠いの嫌なんですけど。

しかも舗装されていない山道でしょ。枝とか石とか落ちてて歩きにくいし、雨とか降ったらぬかるむし、全く良いことがない。

「疲れたら美人でナイスバディーな私が抱っこしてあげるわよ」

「それはいいや」

なんかムカツクからノリで断った。

「んじゃ、てきとーに道具揃えたら出発ね」

こうして化け猫退治に出発したのだが・・・。

「疲れた」

「もうちょつとだから」

「そのもうちよつとつて14回目なんだけど」  
「もうちよつとだつてば」

なにこれ、人間の言葉つてすつごい難しんですけど。

結局、化け猫のいる西の森アドルーンへは一週間かかった。

ちなみにセリーヌの「もうちよつと」は三日目から言い出して、途中から多すぎて数えられなくなった。

信じられん。

「ほらほら、森に着いたし、そろそろ出てくるかもよ?」

おちゃらけて喋っている割に、どこか緊張感が俺にまで伝わってくる。

どうせ俺なんてどんなモンスターにも無視されるんで、緊張とか関係ないから。

だってこの一週間、何回かモンスターに出くわしたけど、一度も攻撃されなかったもん。目すら合わせてくれなかったもん。あいつら俺がただの愛玩動物だと思いきすぎだし。すっげえ腹立ったからめっちゃ燃やしたし。

「ねえ、なに拗ねてんのよ」  
「べつに」

瞬間、眼前の茂みからなにかが飛び出してきた。  
あ、猫じゃん。

## 7・なにこれ、もうちょっと（後書き）

野良猫集会とかその辺のネタを外伝っぽく書いてみたくなりました。  
きつとこの小説と同じようにグダグダになるんでしょうね。

## 8 - なにこれ、初恋？その1

「あの、今度お茶でもどうですか？」

「あら、ごめんなさい」

「がーんっ！！！！！！」

いきなりフラれた。しかも思わず口で効果音言っちゃったよ。  
目の前に飛び出してきた猫は、とんでもなく美人！あ、美猫！  
つついっし声を掛けちゃったけど、もうショックで立ち直れそうにない。

「ドンマイ」

笑いを堪えながらセリーヌが言った。  
うざい。

ん？あれ？そういえば今「ごめんなさい」って聞こえたよね。

「プリシアー！！」

咄嗟にセリーヌが矢を射る。

鋭く放たれたはずだったが、いとも簡単に避けられてしまっていた。  
た。

「え、この子が？」

「そう。上位モンスターは人間の言葉を話せるようになるらしいわ」

ああ、俺みたいだね。

「あら、狩人<sup>ハンター</sup>だったの？」

プリシアは不敵に笑い、俺も含めて強い殺気を放ってきた。それにしてもかわいい。殺気すごいけどかわいい。

無理。かわいすぎてこの子に手をあげるとか絶対に無理だわ。

「俺は君を傷つけない」

「何言ってるの色ボケ猫！」

なんか戦闘中のセリーヌさんって怖いです。

「どうやらあなたも特別みたいね」

俺？そだよ。よくわかってるじゃん。

「人間と猫、どちらがおいしいかしら？」

あ、食べちゃう系ですか。生ですよ？生なら・・・

「人間です！」

自信を持って発言できたと思う。

そんなことを言ってる中、すでにセリーヌは何本も矢を射って攻撃している。その攻撃はどれ一つとしてプリシアをかすめることはなかった。

「思った以上に強いかも」

さすがのセリーヌにも余裕がなくなってきた表情。

あ、次のボケとか考えてる空気じゃないね。

最近のモンスターとの戦闘で、俺は手加減というものを覚えてき

た。

額に集中して、イメージを膨らませる。

「にゃ！」

どうしてもこの掛声が出てしまう。

声と同時に三つの火の玉がプリシアを襲った。

「あらあら」

そう言っで、なんなく後退してかわす。その着地を狙ってセリィ  
又の矢が飛んできた。

「いたっ」

恐らく額を狙ったであろう矢は、プリシアの頬をかすめるだけに  
終わった。それでも初めてダメージを負わせたことになる。

かわいいし強いし、なんて理想的な猫なんだろう。

「もう！大事な顔に傷をつけるなんて・・・」

言葉を言い終わるか終わらないかの瞬間、プリシアの身体は普通の  
猫の10倍はあるであろう化け猫へと変身していた。

「許さない！」

なにこれ、詐欺じゃん。

かわいくて強いプリシアはどこへ行ったの？

## 8 - なにこれ、初恋？その1（後書き）

プリシア戦は二話に分けて書くことにしました。

次話では口口の本気が見られますよ。

戦闘にギャグを盛り込むのって難しいですね・・・。

## 9 - なにこれ、初恋？その2

そこにはただ強いだけの化け猫が構えていた。

「ああ、プリシア……………」

ありえない。俺の10倍の体格じゃ、さすがにお付き合いは無理だよ。

過去一番のショックを隠しきれない。さらに、化け猫と呼称される事実を理解した。

するどい爪が俺を襲う。

「うげっ」

変な声出た！

ぎりぎり後退して攻撃をかわすものの、今のスピードではつらい。

「セリーヌ！作戦会議！」

「がんばる！終わり！！」

すごいわかりやすい作戦だね。結構セリーヌって本能で戦うタイプなのかな？

とりあえず俺は自分の足に補助魔法をかけた。

思考する。たった30グラムの脳をフル回転させる。

その間にも容赦なくプリシアの攻撃がくる。

ブウン！！

風の魔法がセリーヌを襲った。



服が裂け、肌を切る。

「もう！おニューの服だったのに！」

肌を裂かれたことより服の方が大事なんだね。  
どうにかして足を止めさせたい。

「にゃ！」

火の球を一発だけ飛ばす。もちろん当たってくれるはずがない。  
プリシアは飛び退く。そこにセリーヌの矢が飛んでくる。ここまで  
はさっきと同じパターン。

「にゃ！」

今度は標的が大きくなったにも関わらず、セリーヌの矢もかわさ  
れてしまった。

実は読み通りだったりするんだよね。  
着地直後の回避行動で、プリシアのバランスは大きく崩れていた。  
そこへ俺が飛びこむ。

「これがほんとのネコパンチ！！！」

と言いつつも爪を精一杯伸ばして切り裂くだけ。パンチじゃない  
よ。

爪がプリシアの皮膚へ刺さって、俺はプリシアの背中に掴まった  
状態になる。

「にゅあー！」

必至すぎてうまく言えなかったし。

ゼロ距離で火の魔法を使い、すぐに離れた。

「あああああ！！！！」

全身から火が燃え立つプリシアの悲痛な叫びが木霊する。

「プリシア……………ごめんね」

心から思った。

「ううううう、な、なにを？」

瞬間、僅かであるが、プリシアの真上から冷水が降ってきた。

「ぱああああああん！！！！！！」

プリシアを中心に小さな爆発が起きる。

「なにが……………起きたの？」

セリーヌが啞然としている。

「小さな水蒸気爆発だよ」

「へ？」

「プリシアの皮下脂肪に火をつけて、冷たい水をかけただけ」

「なんで爆発するのよ？」

「油から出た火に水をかけると危ないって教わらなかった？」

「いや、俺自身は当然教わったことないんだけどさ。」

「つてか俺天才すぎてやばい。  
疲労感ありすぎてやばい。  
なんか色々やばい。」

「水はいつの間に？」

「最近、補助魔法の時は掛声いらないことに気付いたんだよね」  
「うん」

「結局セリーヌの矢を避けてから一步も動いてないでしょ？」

「牽制の後にプリシアの真上に水を飛ばしたの？」  
「うん」

「この世界に来て初めて本気出したし。  
野良の世界にいた時のことを思い出すわあ。  
意外と頭脳戦が得意だったのさ！」

「あれ、□□？」

「ん？あ？え？」

「うお！」

「なにこれ、俺の体が透けとる！」

## 9 - なにこれ、初恋？その2（後書き）

まず初めに、化学とかに詳しい人なら思うと思うんだけど、たぶん（実際にやってないからわからないが）あの程度の火では水蒸気爆発なんて起きません（笑）

もつと色々な条件が必要になると思います。

まあ、ほらファンタジーだから許してください。

あと、セリーヌが全然役に立てなかったのが悔しいという書いた後の愚痴です（笑）

ほんとはもつと強いんだと思うんですが・・・。

## 10 - なにこれ、話なげえ

視界がぼやけた。

そう思ったら、もうすでに目の前の景色は違っていた。

「なにこれ」

死んだ？

俺死んじやつたの？

なにこれ、ここ天国？

俺が地獄に行くはずはないから………やっぱり天国か。

「君は勇者？」

天国ってこんなに薄暗いところかなあ。

「それともただの野良猫？」

いや、地獄っぽいけど、裏について天国でしょ。

「ねえ、どっち？」

つと見せかけての地獄？

「どっちってば！？」

「にゃ？」

なんか呼ばれてた。全然気にしてなかったわ。  
絶対俺にじゃないって思ったもん。

「勇者？」

「ノー」

「野良猫？」

「ノー」

「じゃあ何？」

「にゃー」

「殺すよ？」

あ、空気が凍った。

これはこれ以上ボケたらやばい雰囲気のパターンだわ。

「通りすがりの天才です」

「僕がここに召喚したのに、通りすがりって・・・」

「いや、なんか知らないけど飛んできただけなんで」

「君、プリシアを倒したね？」

「イエス」

「僕のペットだったんだけど」

「俺の初恋だったんだけど」

「君が倒したんだよね？」

「初恋を断ち切って倒したってかつこよくねえ？」

うわっ、眩しい！

目の前にスポットライトのごとく明かりがついた。

そこには一人の童顔の男が立っていた。

っていうか子供<sup>ガキ</sup>じゃん。

「僕は魔王。魔王ベネル」

「魔物の王様？人間なの？」

「そう。僕は魔王。君は勇者。猫なのに」

「なるほど」

なんか今までで一番納得した。

「プリシアには魔法を掛けてあったんだ。倒されたら、倒したものを僕の元へ転移するように」

「透けたから焦った」

「君は僕を倒さなければいけない」

「興味ない」

「じゃあなぜプリシアを倒した？初恋だったのに」

「焼き魚定食のため」

「性欲より食欲か・・・」

「あれ、知らないの？三毛猫の雄には生殖機能なんて初<sup>はな</sup>からついてないんだぜ？」

まあ特別俺はあるけどね。

「知らないようだから教えてあげよう」

「いいです」

「・・・勇者と魔王は常に共存している」

無視して続けやがった。

「勇者誕生と同時に魔王も誕生するシステムになっているんだ」

「意味ないじゃん」

「そう。意味なんてない。元々、魔王なんてものは存在しなかった。魔王は人間が勝手に作り出した虚像でしかない。では、なぜ具現化したか？」

「その話長くなる？」

「・・・勇者という英雄を召喚するシステムを作り出した。」

だが、そのシステムは不完全だった」

「俺の話は聞いてくれないの？」

「……………そもそも、魔物という存在は人間が作りだしたんだ。人間はね、勇者を作る過程で多くの実験をしていたんだ。それが魔法科学による勇者錬成実験」

あ、やべっ、今ちよつと寝てたかも。

なにコイツ、完全に自分の世界に入っちゃったよ。

「勇者錬成実験は、生身の人間、各種動物を使つて、遺伝子コントロールなどをして勇者を誕生させようという実験だった。でもね、結果は全て失敗に終わった」

「うがつ！あ、いや寝てないっす。ちよつと頭を床に打っただけっす」

「……………その失敗作が今この世にはびこっている魔物の正体なんだよ」

「……………」

「人間はね、それでも勇者を諦めなかった。ついには異世界より別の人間を召喚する術を手に入れたんだ」

「……………」

「異世界の人間は、こちらの世界に来ると常人をはるかに凌ぐ力を手に入れるらしい。時空の波を超えてくる時の産物と推察されている。ところが、このシステムにも欠点があった。」

「……………」

「このシステムは、必ず二人の人間を召喚してしまうものだったんだ。でもね、勇者は二人も必要なかったんだよ。だからもう片方は魔王として、この北の地に召喚されるように設計されたんだ」

「……………はうっ！」

「魔王はね、勇者の副産物なんだよ。今ではもうその事実を知る人間はいないけどね」



「・・・・・・・・だよね」

「では、なぜ今でも勇者を召喚する儀式を行っているのか知ってるかい？」

「・・・・・・・・だよね」

「・・・・・・・・予言書というかね、昔の人が書いたメモがあるんだ。この魔方阵は、百年に一度使用しなければ効果を失うとね」

「・・・・・・・・だよね」

「勇者を失いたくない人間は、百年おきに勇者誕生の儀式を行っていたんだよ」

「・・・・・・・・あ、よだれ垂れちった」

「そして今、どうやら魔王が僕で勇者が君のようだ。・・・・・・・・  
本当に君が？」

結構寝ちゃってた。

なんか話終わったみたいだし、そろそろ帰ろう。

出口どこかなあ。

## 10・なにこれ、話なげえ（後書き）

割とこの世界の核心部分を出してみた話だったと思います。きっと、いずれもつと細かく説明があると思います。

今回で魔王Ⅱ話長いつて口口は思ったようです。

またどうでもいい補足ですが、世界で三毛猫の雄に生殖機能がついている例はたったの3例しかないそうです。

## 11・なにこれ、指名手配

あ、空気の流れを感じる。  
きつと出口はあっちだわ。

「もう行ってしまうのかい？」

「うん」

「名前を聞いてなかった」

「名乗るほども・・・」

魔王ベネルは俺を止める気も倒す気もないらしい。  
きつと俺がただの愛玩動物だっと思って思ったんだろ。むかつく。

「名は？」

「口口」

「覚えておくよ」

「きつと忘れるよ。俺が」

魔王ベネルとか覚えてらんないよ。

さって、外に出たらご飯を食べたいな。

空気を感じて出口を見つけた。

なにこれ、すっげえ吹雪。

ってかさむっ！

なんであの建物の中はあんなに暖かったの？暖房全開？

「なにこれ、鼻水凍ったし」

犬じゃないんだからこの寒さはNGだよ。  
どうしょ、建物に戻ろうかな。

でも魔王になんて顔して戻ればいいのかわかんね。ってか恥ずかしい。

あ、魔法。

そうじゃん。補助魔法を使えばよかったじゃん。

体を温かくして、足を速くする。

一気に駆け抜ければいいんじゃない。

なんか草とか木とか全くない雪原だから、きっと迷子になるけど、とりあえずまっすぐ走ろう。勘でなんとかなるっしょ。

もう夜で、でもまだ吹雪は止んでなかった。

「あ、あれ町っぽい」

しばらく走ると町の明かりが見えてきた。

町には人影がなく、どうやらみんな家の中にこもっているようだ。雪をどっさりかぶった掲示板がある。

「なにこれ、俺？」

そこには、俺の似顔絵が描いてある張り紙が一枚貼ってあった。ってか全然似てねえし。こんな不細工じゃねえし。

「お、野良猫か？珍しいな」

突然掲示板の横の扉が開いて、髭の濃いおっさんが出てきた。いきなりだったからめっちゃびっくりしたわ。思わずその場で跳ねたもん。

「中に入れ」

手招きをするおっさんに従い、俺は家の中に入った。

あつたけえ！！

「凍傷寸前じゃねえか。大人しくこのお湯に浸かってろ」

濡れるの嫌なんですけど。

おっさんは俺を小さな桶に張った湯の中へ放り込んだ。

「にやつつー！」

思わず声が出たが、ぎりぎり猫だったと思う。ほんとにぎりぎり。

あ、温かくて気持ちいい。

なにこれ、新発見。お湯ってこんなに気持ちいいの？

「ところでお前」

おっさんが湯船から俺を取り出し、タオルで拭いてくれている。

「掲示板の猫だよな？」

なんか意味深。

「猫を発見したものには、2ミリドルの報酬が得られるんだってよ」

あれ、一気に空気が悪くなったぞ？

「つまり、俺はこのままお前をギルドに突き出せば、報酬がもらえるわけだ」

さって、次はどこに行こうかなあ。

「いやあ、大人しくて助かったぜ」

咄嗟におっさんの手から俺は逃げ出した。

「にゃ！」

家のドアを開け、補助魔法をかけ、外へと飛び出した。  
さむっ！

吹雪は止んでいたが、地面の雪が手足を凍らせる。

とりあえず俺は、来た方向とは別の町の出口から外に出た。

辺りは暗かったが、雪をかぶっておじぎしている木々が目立つ気がする。

なんか森っぽい。

お腹すいた。疲れた。死にそう・・・。

あ、なんか目が回ってきたし。きっと今度こそ天国だなあ・・・。

12 - なにこれ、嫌われ者？

意識が朦朧とする。

気持ち悪い。けどなんか心地良い雰囲気。俺を包んでる。

「あ、起きた？」

なんて綺麗な声。なんて素敵なぬくもり。

「君、大丈夫？」

俺はすっごい美人の腕の中で眠っていたようだ。

「お腹すいてない？」

「すいた！」

あ、本能が働いた。

「あ、あら、喋れるの？」

「う、うん」

気まずいよ。

「ご飯ももらえなくなったらどうしよ……」

「とにかく、これをお食べ」

俺の口元に木の実のようなものを差し出す。

なにこれ、超うまい！

なんかチョコっぽい感じ。

「おいしい？」

コクンと頷いておく。

「私はメリル。君は？」

「ロロ」

「どうして森で倒れていたの？」

「お腹がすいて・・・」

「ここ、どこだかわかる？」

辺りを見渡す。

蝶々が飛んでる。花が咲いてる。なんか全体的に青緑っぽい雰囲気。

「わかんね」

「ここは妖精の森よ」

ようせい？ 幼生？

「妖精ってなに？」

「私たちの種族のこと。私たちは魔法を生み出しし種族と言われているわ」

「へえ」

「ただ、その、すごく言いにくいんだけど・・・」

実は男です、とかのパターン？

「この森の者たちは、すごく猫を嫌ってるの」



「え」

「だから、しばらくここに隠れていてね」

「メルルは嫌いじゃないの？」

「私は嫌いじゃないわ」

「ちよつと大妖精様のところに行かないといけないから、待っててね」

「わかった」

なんで俺って美人に素直なんだろう。

なんかこの人、人間とは違う雰囲気してる。

大妖精様ってどんなヤツかな。めっちゃでかいのかな。

あ、また蝶々だ。ひらひらしてる。

・・・・・・超気になる！

「てい！」

あれ、取れなかった。

「にやふ！」

あれ？取れないぞ。

蝶々が逃げていく。

逃がすものか。

「でやっ！」

パチン！つと蝶々をようやく捕まえた。

「なにやつ?!」

あれ、ここどこ？

「もしや……猫?!」

急に周りがざわつき始めた。

「な、なんで来ちゃったの……」

あ、メルルがいる。

っていつかなんかすっごい美人だらけだ。  
なのに陰悪な雰囲気全開。

「メルル！あなたが連れ込んだの？」

「あ……大妖精様……」

「そうなのね？」

大妖精全然でかくなかった。

普通サイズ。ちよっと胸が周りの人よりも大きいくらい。  
よく見ると、みんな耳がとがってる。

俺と一緒にゃん。

でもよく見るとつつすら羽がある気がする。  
もしかして飛べちゃうのかな。

「あ……はい、そのとおりです」

「すぐに追い出さない!」

すっごい剣幕。そんなに俺のこと嫌いなのか。

「南の森に捨ててきなさい!」

もはや物扱いか。

心臓も動いてるし、息もしてるのに切ない。

「メルルは俺を助けてくれたただだよ」

思わず言葉を発していた。

「さらに喋る化け猫とは……メルル、過去に何があったか知らないわけじゃないわね？」

「は、はい」

化け猫って……。

確かに珍しい三毛猫の雄だけどき、化け猫って傷つくし。

「でも、南の森は……」

「問答無用！」

「は、はい……」

メルルは俺の元に来て、俺を抱き上げる。

周りの視線が痛かった。「猫に触れてるわよ」とか「猫を助けるなんてバチ当たりね」とか聞こえてきた。

「ごめんね」

小さい声で、俺の耳元で囁いた。

「メルルは悪くないし」

「ごめんね……」

南の森が相当危険なところというのはもう雰囲気察した。

「大丈夫」

「森の巨人バビリーには気をつけて。私たちも困ってるほど凶暴な巨人よ」

妖精の森と南の森との境界までやってきた。

メリル、心配しなくて大丈夫だし。

俺が巨人ごとき倒してやる。

「とにかく逃げるのよ」

メリルはそれを言うなり俺を下ろした。

「巨人倒したら、また帰ってくるから。あの木の実をまたちようだいね」

「え・・・」

「ばいびー」

俺は天才だもん。

不可能という文字は俺の辞書にはない！そもそも辞書がない！

## 12・なにこれ、嫌われ者？（後書き）

妖精の森は「ゼ　ダの伝説」のイメージです。

なんか、勝手に連れてこられたのに、すぐ追い出されてってかわい  
そうなのですね。

### 13・なにこれ、でかすぎ その1

メルルがなんで心配してたのかすっごいわかった。

「魔物だらけ・・・」

さっきから次から次へと魔物が俺の匂いを嗅ぎつけて、襲ってくる。

そのたびに逃げる。

だって怖いし、俺平和主義だし。

あ、そうだ、匂いとか気配とか消せないかなあ。

「集中つと」

補助魔法をかける。

たぶんこれでしばらく見つからないと思う。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

地響きと共にすごい音が俺の耳を襲う。

「な、なに？もしかして・・・」

もしかした。

噂の森の巨人バビリーの登場。

「ちょっと待って。巨人って2メートルくらいだと思ってたし」

ここの木々は背が高い。普通の森に比べたら、三倍くらいの高さ

を誇っているだろう。

普段木登りをする俺でも登ろうと思わないくらい高いもん。

巨人はその木々の半分くらいの大きさはある。

2メートルじゃなくて20メートルの間違い。

そりゃ歩けば地鳴りがするわ。

幸いにも俺には気付いていないようで、他の魔物を狩っているみたい。

なんか鹿っぱいのを手掴みでむしゃむしゃ食ってるし。

つかあのこん棒なんだし。でかすぎでしょ。

「ねみい〜」

巨人の声。でかすぎ。

そんなん眩かなくていいから勝手に寝ろよ。

っていつかどうやってコレ倒すの？

核弾頭とか必要じゃない？

そもそも俺のこと見えるかな。

「ぐごー！ぐごー！」

寝てるのにうつさい。

寝てる時くらい静かにしろし。

ん？今チャンスなんじゃね？

特大の魔法をぶつけたら勝てちゃったり？

よし！

たまには思い切ってやってみよう！

自分の中で最大級の魔法を考える。

意識をいつもよりも集中させ、時間をかける。

「にゃあああ！！！！」

普段よりも気合いを込めた一撃。

寝てる巨人を中心に四本の火柱が立ち、そこからドーム型に火が巨人を覆っていく。

「うお、あちい！」

巨人が目を覚ます。

そりゃ熱いでしょ。あんた火の中にいるんだから。

ぶうううん！！！！！！

内側からこん棒を一振り。

火のドームはいとも簡単に消されていた。

「だれだあ！！！！！！」

なにこれ、全然効かなかったし。

あ、これは死ぬパターンのやつだわ。



### 13 - なにこれ、でかすぎ その1 (後書き)

とりあえず巨人バビリー戦一話目です。

猫対巨人。

はつきり言って無謀ですね。

ちなみに話の中での炎の魔法は上級魔法です。なかなか高度でかつ  
こいい魔法なのです。それでも火傷だけって・・・。

## 14 - なにこれ、でかすぎ その2

もう無理。

あれで無傷なら絶対に無理。

「どこにいるう！」

まだ見つかっていない。

きつと馬鹿なんだろうなあ。

でも、それも時間の問題だろう。

「ああ、短い人生だった・・・」

こん棒が風切り音と共に振り回される。

木に当たると木が簡単に倒れる。

いやいやいやいや、倒れちゃうの？50メートル以上ある木だよ？

一本の倒れた木が、俺の方向へ倒れてきた。

「ちよっ！」

木の太さ、長さ、倒れる速度、全部含めて避けきれない。

補助魔法を使う暇さえない。

とにかく走った。もう死ぬとわかっていながら走った。

「うげっ」

石につまづく。猫なのに石でコケた。

すんごい恥ずかしい。

こんなに恥ずかしい死に方をするのか・・・。

ドゴオオオンー！！

木が完全に倒れた。

「あゝ、これはさすがに死んじゃったわ」

呟いたのは俺。

ん？あれ、生きてるし。

うお、なんだこれ。

コケた際に地面のくぼみに落ちたみたいで、上を見たら木の幹が  
こんにちはしてる。

なんかラッキーすぎて笑いが出てくるわ。

なんとかくぼみから這いずり出る。

「どこにいるうー！」

さっきと全く同じことを言っている。しかもまだ見つかっていない。

でもこん棒でそこら中を叩いている。

地面が歪な形にえぐれていく。

闇雲にやってる分、当たる気はしないけど、気は抜けない。

とりあえず集中。

「にゃー！」

初めて使う土の魔法。

巨人の片足の地面を急激に盛り上げてみた。

ドゴンー！！

仰向けに巨人が豪快に倒れる。

「いてえ！」

頭を打ったようだが、特にダメージはないようだ。  
こんな小細工じゃ全然ダメか・・・。

どれだけ防御に優れてるんだし。この防御馬鹿が。

「このお！」

仰向けに横になりながらこん棒を持っていない手が空に向かって突き出された。

瞬間、巨人を中心として、巨人が寝ているところ以外の地面がうねり始めた。

ゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！

なんか気持ち悪い地震。

揺れで木は倒れ、石や岩は転がり、自然災害が俺を襲う。

足元がおぼつかず、よろけて倒れている木とかに体をぶつける。

次第に、体勢を低くしてると大丈夫なことに気付いた。

変な揺れで酔ったし。

「これ勝てねえよ」

揺れは収まったものの、もう俺の中には諦めムードが広がっていた。

だって、攻撃効かないし、あっちの攻撃怖いし・・・。  
唯一の利点は見つかっていないということ。

今のうちに逃げよっかなあ。

## 15・なにこれ、でかすぎ その3

「つめたっ！」

本気で逃げようと諦めかけた次の瞬間、雨が降り出した。  
まるで俺の心を映すような・・・。

巨人を見る。

ん？様子が変？

「うう・・・」

雨を嫌がってる。

水がダメなのかな？

いや、俺も濡れるのすっごい嫌だけどね。

「力が抜ける・・・」

なんで？濡れただけで力がなくなるの？

これはチャンス！

でも、あの防御の固い巨人になんのダメージを与えられるんだろう。

考える。考え尽くす。

「とりあえず牽制するしかないかあ」

水の魔法をイメージする。雨の中というのもあって、イメージしやすく、具現化しやすかった。

「にゃ！」

水を圧縮させた水弾をぶつける。

「うごっ！」

効いてる。けどいま一つ。

あ、目が合った。

完全に今目があったよこれ。

「猫？猫に攻撃されていたというのか？」

フハハハハと笑い出した。

あれあれ、馬鹿にされてるねえ。

所詮愛玩動物だっと思って思われたよねえ。

絶対に許せないよねえ。

「にゃ！」

逃げるという選択肢を完全に消す。

巨人は立ち上がり、俺の放った水弾を片手を振ってかき消した。

「なにこれ、やっぱり死亡フラグ？」

えっと、なんて言えば許してもらえるかな。

なんて考えていると、こん棒が落ちてくる。

ドオオオオン！！！！

地面がえぐれる。

紙一重でかわしたけど、あれくらったら紙になるわ。

「ごめんなさい」

「ダメ」

ですよー。

雨で体が重くなる。

きっと巨人もそう思ってるだろうな。

水を圧縮した水弾ではダメだった。

じゃあ何なら体を通るだろう。

こう、スクリューみたいで一点集中で・・・。

あ、ウォーターカッターっぽい感じで・・・。

よくわかんないけど、とりあえずイメージが固まった。

とにかく集中する。

魔力を溜めないとダメだ。

「であー！」

こん棒が振り回される。

なにこれ、もう森じゃねえし。

俺と巨人の周りにはもう木がないし。

すっごいこん棒を自由に使えてる。

巨人の足元を走る。

馬鹿そうだから自分を攻撃しないかと思って、巨人を登ってみる。

腕とかめっちゃ振り回してるけど、俺には当たらない。

鼻をかじってもひっつかいても、蚊に刺された程度らしい。

だいたい魔力が溜まってきた。

俺はいったん巨人から離れ、体勢を整え直す。

もうやるしかない！

「ちょこまかとっ！」



「にゃ！」

水が超高密度に凝縮して一本の筋を成す。  
ピストルの弾丸のようなスクリュー回転。  
それが龍のごとく巨人の胸へと飛んでいく。  
同時に巨人も土の魔法を使ったようだ。  
あ、すんごいのが来てる。  
地面が俺にむかって一直線に盛り上がっていく。  
たぶんコレくらったら死ぬわ。

「ふん！」

巨人はこん棒でガード。  
でもこん棒なんて軽く貫く。でかいこん棒に小さな穴が開く。  
大きな魔法の反動で俺は動けない。あとはどっちの攻撃が早く当たるかどうか。

すごい勢いで地面が俺を襲おうとしている。  
本当に微妙なタイミング。  
目の前まで来た。  
もう避けることを完全に諦め、俺は眼を閉じた。

ドスン！！

そして・・・巨人はこん棒を落とした。

「あ・・・」

巨人の胸に小さな穴が貫通していた。

「俺の・・・勝ち？」

ズシイン！！！！！！

倒れる音もまた豪快だった。

なにこれ、壁じゃん。

地面の盛り上がりは、俺の鼻先2cmのところで止まっていた。  
なんだか鼻がブレッシャーでむずがゆくなる。

運も実力のうち・・・だよな？

なんか俺強くなってる気がするわ。

## 15 - なにこれ、でかすぎ その3 (後書き)

巨人戦に決着です。

だんだん戦闘にも熱をこめてるつもりなんですけど・・・。  
運の要素が大きすぎますね。

## 16 - なにこれ、手のひら返し

打撲だけですんだのはマジで奇跡かも。  
妖精の森と南の森の境界へ戻る。

「メルル！」

「□□！」

メルルは待っていてくれた。

お別れしてから数時間しか経ってないのに、ものすごい疲労感。

「すごい地鳴りが続いてたけど・・・」

「なんとかなった」

信じられないといった表情。

まあ、俺も信じられないけど。

メルルは俺を抱いて、大妖精のところへ走った。

「大妖精様！」

「まだ捨てていなかったのか？」

「いえ、この者が巨人バビリーを討伐いたしました」

「誰がそんなウソを信じるというのだ」

確かにウソにしか聞こえないわ。

うん、こればかりはしょうがない。

「ウソではありません。今斥候を送って状況を調べさせております」

小さな光が俺の周りをまわる。

なにこれ、超常現象？！

「お姉ちゃん、ほんとにこの子が？ウソでしょ？」

「ミラ、本当よ」

小さな光はよくよく見ると妖精だった。

飛んでる！ってかちっちゃい！

金髪で着せ替え人形みたいなフワフワな服を身にまとっている。

「大妖精様、ご報告いたします」

どうやら斥候が帰ってきたようだ。

「南の森では木々が倒れ、地面はガタガタになり、そして・・・巨人が倒れていました」

「ふむ」

「大規模な戦闘があったと思われます」

「それで三毛猫」

「口口だ」

「口口、お前がやったという証拠は？」

「ない！」

自信を持ってこの言葉をお届けします。

そんな証拠とかあるわけないし。

「じゃあさ、逆に誰が倒したと思うの？」

「ふむ、勇者・・・か」

ここでも勇者の単語が出てきたし。

「よかるう、信じてやろう」

何を思ったか、大妖精は俺を許してくれた。

「過去、この妖精の森は一匹の化け猫に壊滅的ダメージを与えられたことがある」

聞いてないのに昔話が始まったし。

「その化け猫の名前はプリシア」

「え!？」

そんなに強かったっけ？

「傷ついた野良猫を拾ってきた一人の少女がいた。それがそこに飛んでいる妖精、ミラ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ミラはふわふわ飛びながら何も言わなかった。

「プリシアの目的は、最初からこの妖精の森だった。普段、結界で守られているこの森に侵入する手段は、森の妖精に触れていることだった。プリシアはミラの善意を利用して、森の家を焼き、木々を倒し、妖精たちを切り刻んだ」

大妖精の声が震えている。

「ミラはね、この森で最も優秀な魔法使いだった。自分のしたこと  
の責任を負い、ミラは禁断の封印術をプリシアにかけた」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「プリシアの力は十分の一程度まで抑え込まれ、その代償としてミラはこの姿になった」

「……」

「結局プリシアは逃げた。我々は追わなかった。いや、追えなかった。とにかく森の回復や仲間の手当を優先したのだ」

だから俺でも倒せたの？

「あたしの身体はもう二度と元には戻れない。でも、全部あたしの責任だから……」

ミラの声が切ない。

「本当は……誰も、お前のことなど責めていない」

「でもっ！」

「今回、メルルもロロを拾ってきた。やっぱりお前たちは姉妹なのだ。でも今回は違った。ロロは私たちの脅威であった巨人を倒してくれた。まさに勇者だ」

また勇者説かぁ。

「勇者……」

「ミラ、勇者について行きなさい」

「え？」

「ロロはいずれ魔王を倒すでしょう。その力になりなさい」

倒さないし。無理。

たぶんあの魔王相当強いもん。見た目子供だったけど、雰囲気異常だったし。

ってというか何その根拠のない予言。急に手のひら返して俺を褒め

だしたし。

「無理だし」

「□□」

「ん？」

「魔王を倒したら、なんでも好きなだけ褒美をとらせる」

「うわぁ、買収する気だよ。」

「普通勇者を買収しようとするかなぁ。」

「ノッた」

「と即答はしとくけどね。」

「□□、ミラを・・・私の妹をよろしくね」

「メルルの言葉に強く頷く。」

「なんかすごい真面目な話だったからボケる暇がなかったし。不覚・・・。」



## 16 - なにこれ、手のひら返し（後書き）

全然ボケを入れられなかったです・・・。

とりあえず小さな妖精のミラが仲間になりました！

ミラに関しては不明な部分かなり多いので、後々語れるところを作る予定です。

17 - なにこれ、いーい？よくない

「いーい、ロロ？東の街に行くわよ」

いきなりめっちゃ仕切られてるんだけど。

「東の闘神の都ロデリアス。名の通り武術の盛んな街で、なんとね、もうすぐなんでもありの武術大会があるのよ」

すっごいおしゃべりなんだけど。

「妖精の森からならそれほど遠くないから、ゆっくり行きましょう」

しかも頭上で、耳の側で話されるからうるさくてたまらん。

「それからね・・・」

「ちよつといい？」

「ん？なによ？」

「なんでミラはそんなに喋れるの？っていつかそついうキャラなの？」

「いーい、ロロ？あたしはあなたを本物の勇者と認めたわけじゃないのよ」

「俺も本物の勇者だなんて思ったことないけど」

「大妖精様がついていけつて言うからついてきてるだけなの」

「別についてこなくてもいいよ」

「あら、そういうこと言うんだ？大妖精様からご褒美もらえなくなっちゃうよ？」

なんだろう。足元見られてる気がするよ。

っていつかそもそも魔王は倒すつもりないからね。

「まあ、森の巨人バビリーを倒してくれたことには感謝してるのよ」  
「何回死ぬと思ったことか・・・ほんとに」

「バビリーはいつの間にか妖精の南の森に住み着いたの。南の森には木の実や薬草がたくさんあるところで、あたしたちにとっては重要な森だったの。そしたらバ力がかいのが現れて、一気に我が物顔。バビリーの防御力は妖精にとって脅威だったわ」

あー、またはじまったよ。

「妖精は支援補助魔法は得意だけど、攻撃魔法は苦手なのよねえ」  
耳元でうるさいよー。

「結界とか、封印とか・・・いいい、ロロ？ちゃんと聞いてる？」  
「キイテマス」

そんなこんなで俺の頭に乗っているミラは楽しそうだった。

ロデリアスには三日歩いて到着した。  
今回はゆっくりとマイペースに歩いたから、楽ちんだった。

「うお、すっごい建物があるー！」

ものすっごい大きい。  
歪な形をしたドーム。  
なにこれ、どら焼きみたい。

「これが闘技場よ。まあロロには関係のない場所だけどね」

「だね」

そもそも戦いとか好きじゃないからね。  
超平和主義なんで。

闘技場の入り口の方がやけに騒がしい。

「あれ、なんか人だかりがあるわよ？ 見に行こうよ」

「えー・・・ってててて！」

めっちゃ頭の毛ひっぱられてるんですけど。

そもそも人間のことをそこまで好きじゃないのに、なんであえて人がいっぱいいるところに行かなきゃいけないの・・・。

なんでかミラに逆らえない俺は、しぶしぶ人だかりの方へと歩いていった。

あー、めんどい。

## 17・なにこれ、いい？よくない（後書き）

ミラの性格を少し出してみたお話です。

図々しくておしゃべりだけど憎めないキャラを目指したいと思いますw

## 18 - なにこれ、勇者じゃん

「勇者様！サインください！」

もちろん俺にじゃないよ。

「もちろん、ほら、順番だからね」

騒ぎの中心になっていたのは勇者と呼ばれた一人の男。

イケメン。金髪。白い鎧。赤のマント。

なにより、人間。

「ん？猫さんもサインがほしいのかな？」

いらねえよボケが。

「勇者様は猫にも優しいのですね！」

周りにいる大衆はそれだけでキヤーキヤー大騒ぎ。

俺が騒ぎのネタになっているというのがなんとも心地悪い。  
どいつもこいつも愛玩動物って思いやがって。

「これが本物の勇者なのかな？」

ミラが耳元で囁く。

知らないよ。

「猫さん、僕の名前はシエルヴィ。南の王都の王より勇者の称号を  
与えられてこの地へ参った」

へえ。

「それでは、また会えるといいね。猫さんと小さな妖精さん」

いや、断る。

もう会いたくないから。

勇者は颯爽とその場をあとにした。

「なにあれ？」

「さあ？勇者様だってよ。ロロのライバルじゃない」

いや、断る。

「さつて、どつかで食糧調達しないと」

「ああ、それなら・・・」

俺は飲食店を探した。

「あら、おいしそうな香りがするわね」

そのまま店を素通り。

「入るんじゃないの？」

そして路地裏へ。

「もしかしてさ・・・」

「もしかするよ」

「ごみ箱漁りは野良猫の基本でしょ。」

「おや、こんなところで・・・」

ああ、この声は。

「奇遇じゃないか」

勇者め。

本当に奇遇なのか？

お前みたいな綺麗なやつ comes ところじゃないだろうに。  
しかもついさっき会ったばかりだろ。

「君、ギルドからお尋ね者になってるよね？」

ああ、そういえばそうだったかも。

「まあ、そのことはどうでもいいんだけどね。僕はそちらの妖精さ  
んも気になるんだよね」

「ふーん」

「ハハ、やっぱり話せるんじゃない」  
「そりゃそうよ」

「この猫さんの名前は？」

「ロロよ。私はミラ」

「ロロ・・・ちゃん？」

「男だっつの」

思わずつつこむ。こいつムカつく。

「おや、君も喋れるのか。それじゃあ今までの会話も全部わかって



るね？改めて、僕はシエルヴィ」

「興味ない」

「僕は君たちに興味ある」

「ロロ、行こう？」

初めてミラと意見が合った。

「ロロくん、もっと自分の魔力を隠した方がいいと思うよ」

「は？」

「武術大会、楽しみにしてるからね」

そう言って、去る。

もう二度と会いたくない。

「なんかさあ、あの言い方ってまるでロロが大会に出るみたいな感じじゃなかった？」

「嫌です」

人間って好きじゃない。

男って嫌い。

勇者は大っ嫌い。

## 18・なにこれ、勇者じゃん（後書き）

もう一人の勇者（人間）の登場です。

コテコテな勇者です。

モテモテな勇者です。

・・・うらやましくなんかないですから。

## 19・なにこれ、猫缶？

「もうすぐ試合が始まるね？」

だから興味ないつつうの。

「ほらあ、行こうよ？」

「一人で行ってきたらいいじゃん」

「そういうこと言うわけ？私一人じゃ色々危ないのよ」

「俺と一緒にさほど状況は変わらないでしょ？」

「だれもこんな汚い三毛猫には近づかないわ」

うわあ、すっごいひどいこと言われた！

「つてのは冗談だけど、ほら行こう？」

「やだー」

「逃げるの？」

「いや、意味わかんね」

「勇者に楽しみにしてるって言われたじゃない」

「エントリーとかしてないから」

「優勝賞品・・・」

「ん？」

「優勝賞品・・・猫缶って言ったらどうする？」

「え！？うそっ！？」

いやいやいや、絶対ウソでしょ。

武術大会の優勝賞品が猫缶っておかしいもん。

「あら、口口ったらなんにも知らないの？」

「絶対ウソじゃん」

「ウソじゃなわよ」

「ウソだ！」

「ウソじゃない！」

「ウソウソウソ！」

「そんなに言うなら確かめに行きましょうっ。」

「いいよ！行ってやんよ！」

あれ？いいのか？

まあ、いつか。

会場は異様な熱気に包まれていた。

「どこで賞品なんて確かめられるのさ？」

「きつとこつちよ」

ミラに案内されて観客席へと降りていく。

「あれえ、おつかしいわねえ」

多くの客が中央に視線を置いている。

まだ誰も登場してないのに。

最前列まで来たけどなんにもない。

あるのは闘技会場のみ。

へえ、ここで試合するのかあ。

「つついてのカードはああああ！！！！！！！！」

うるさっ！

なんか急にでっかい声が響いてきたし。

「爆力のデルジン！雷光のセガル！双魔のヘネユミア！そしてええ！」

なにこれ、人の名前言ってるだけじゃん。

「三毛猫のロロオ！！！！！」

へえ。

ん？

「一回戦第五試合はこの三人と一匹の前代未聞のカードとなりました！さあ、一体誰がこのバトルロワイヤルを勝ち上がるのでしょうか！？」

一匹？

あ、俺のこと？

「いつてらっしゃい」

あれえ、ミラがにんまり笑顔だぞお？

「いつてきまーす。なんて言うか！」

「じゃあ行つてきなさい」

命令形になったあ。

「どゆこと？」

「こゆこと」

なんにもわかんねえ。  
もう帰りたい・・・。

20 - なにこれ、ほぼ不戦勝

しぶしぶ会場へと下りる。

つてか結局ミラー一人で大丈夫なんじゃん。

あの子の狙いはなんなの？

もしかして猫缶？

「レディー！」

いかつい野郎どもが構える。

「ファイトツ！！」

とりあえずうつさい。

この声と同時に三人の戦士たちは戦い始めた。

俺を完全にシカトして。

「おらあ！」

爆力のデルジンって紹介されてたやつは、二つ名の通り筋肉馬鹿  
って感じ。でっかい斧を振り回している。巨人に比べたらかわいい  
もんだわ。

雷光のセガルは魔法剣士かな。自分に補助をかけて、魔法で牽制  
しつつ片手剣で攻撃してる。

双魔のヘネユミアは赤いローブを着てて、フードをかぶってたか  
らてつきり男だと思ってたけど、どうやら女っぽい。詠唱魔法の  
声  
が女だった。完全に距離をとって、魔法を打ちまくってる。

「三毛猫の口口を除く三選手の熱いバトルだあ！！」

実況とかいいから。

どうせ俺は愛玩動物ですよ。コンパニオンペットってやつですよ。てめーらまとめてアニマルセラピーしてやんぞ？

「ファイヤーウォール！」

肉弾戦をやってるデルジンとセガルをまとめて炎が包み込む。

ヘネユミアさん、なかなかうまい作戦じゃん。

俺も詠唱魔法使おうかなあ。

詠唱魔法ってイメージする内容が詠唱で簡略化されてるから、下級魔法の連射に向いてるんだよね。

教科書で一番オススメな魔法ってセリィヌが言ってたなあ。

「これしき！」

セガルが水の魔法で炎を消す。

その隙を見てデルジンの斧が横薙ぎにセガルの脇腹をとらえた。

おお、よく飛ぶねえ。

セガルはそのまま会場の観客席際のフェンスにぶつかって気を失った。

「おーっと、ここでセガルがダウンだあ！！！」

「あとはお譲ちゃんだけだなあ」

いやいや、俺もいるからね。

「サンダーボルト！」

ヘネユミアの魔法がデルジンの足元へ雷光一閃。



セガルが使うべきだった魔法じゃね？

ってか雷の魔法って初めて見たわ。なるほどねえ。

直線的な速度は申し分ない。使いやすそうな魔法だ。

「魔法は嫌いなんじゃない？」

そう言い放ってデルジンは懷から小型のナイフを取り出しヘネユミアに投げつけた。

「きゃっ！」

ナイフは綺麗にヘネユミアのふとももに刺さり、そのまま崩れ落ちる。

ゆっくりとデルジンは近づいていく。

「なかなかの魔法だった。だがコントロールがまだまだだな」

偉そうに言って斧を振りかぶる。

「うう・・・参った」

「ここでヘネユミアが降参を宣言したっ！！」

振りかぶるのをやめたデルジンは笑顔で観客に片手を突き上げてポーズをとった。

まだ終わってないつつうの。

俺は自分に補助魔法をかける。

「さあ、残ったのは爆力のデルジンと三毛猫の口口！」

「ぐははは！動物虐待になっちまうぞあ？」

言い終わるか終わらないかの瞬間、俺はデルジンの鼻に噛みつき、顔を引っ掻いていた。

「うぎゃああああ！」

あつけない。

巨人に比べたら本当に雑魚だわ。これだけで倒せるなんて。顔面傷だらけになり、顔を抑え込んでその場にうずくまった。

「ここで大番狂わせだああ！！！！デルジンがダウン！よって、一回戦第五試合は三毛猫の口口の勝利！！！！！」

会場がざわつく。

普通なら歓声が起きるはずなのに、全然歓迎されていない。中には野次を飛ばすやつまでいる。

俺は全てを気にせずに観客席へ戻った。

「おっつー」

なんだし、コイツ。

まったくミラはいい気なものだ。

もう成り行きだからしょうがない。

とりあえず・・・猫缶のためってことで。

## 20・なにこれ、ほぼ不戦勝（後書き）

ついに20話です。

ネタが・・・（笑）

でも、先のことは考えてあるんですよ。

ただ、どうにも笑いを盛り込むのが難しいですね。

## 21・なにこれ、ミラの狙い？

「で、どゆこと？」

人気のないところでミラを睨みつける。

「なんのこと？」

「まだすつとぼけるの？ミラがエントリーしたんでしょ？」  
「違うわよ」

即答。

「うそつき」

「ほんとに違うんだってば」

「でも何か知ってるでしょ？」

「・・・勇者よ」

「は？」

なんでここで勇者の単語？

「賞品に興味があつて、ロロが寝てる時に会場に見に行ったの。そしたらあの白い勇者に会つて、挑発されたからついカツとなつて、エントリーしてもらったの」

「俺を？」

「うん」

なんて勝手な・・・。

「じゃあなに？俺は勇者を倒せばいいってこと？」

「そういうこと」

なんてめんどくさい・・・。

まあ、まだ話は終わってないんだけど。

「あのさ」

「ん？」

「それだけじゃないでしょ？」

「え？」

「優勝賞品さ、さつき見てきたんだけど猫缶じゃなかったし」

「バレた？」

「バレた。猫缶・・・ベスト4の賞品だった」

「あらあら」

「んで、優勝賞品は南のリゾートで有名なアスバルチーム五泊六日の旅だつて」

「うんうん」

「まあ、これはフェイクでしょ？準優勝の賞品が赤い魔石だったんだ。ミラの狙いはコッチなんじゃない？」

間があく。

「口口すごいなあ。なんでわかったの？」

うわあ、あっけなく認めたよ。

「そもそもこの町に来る理由って特になかったじゃん。元々この魔石が賞品として出ることを知ってたんじゃないの？」

「あははー。とりあえずさ、もう二回戦始まるからがんばってきてよ」

「俺、ベスト4でわざと負けるかもよ？」

「まあ、バレちゃったんだからしょうがないわ。ロロの好きにしていいわよ」

あれ、意外と素直。

なんか気持ち悪いなあ。

「それではあ！二回戦第三試合の始まりです！！」

俺さあ、ほんとにこの実況嫌いだわ。  
うるさすぎ。

きつとまだミラは何かを隠してるんだろうけど、とりあえずベスト4までは頑張ろう。

猫缶のために・・・。

## 21・なにこれ、ミラの狙い？（後書き）

最も短い話です（笑）

ロロが猫缶を手に入れたところで、いったいどうやって食べるんでしょうね。

## 22・なにこれ、打たれ弱いDS

「三毛猫の口口対、魅了のウェンディ!!!」

めっちゃ美人で、胸元が広いセクシーな服を着た女の人が鞭を持つてにこにこしてる。

どうやら二回戦からはタイマン勝負になるみたい。

「あらあ仔猫ちゃんじゃない。いたぶっちゃって大丈夫かしら？」

ああ、そっちのお仕事の人？  
鞭で叩きたくしょうがないって目してるよ。

「ファイトツ!!!」

始まったと同時に鞭が空気を裂いて飛んでくる。

パチン!!!

地面には痛々しい傷が残る。

牽制のつもりだったのだろう。初撃は避けることが容易かった。  
ひっそりと補助魔法を掛ける。

「あら、すばしっこいのね仔猫ちゃん」

ヒュンヒュン音を鳴らして鞭が右往左往。

「当たってくれないと、肉の感触がわからないじゃない」



うわぁ、めっちゃ悪趣味だよこの人。

ここまでサディスティックな人も珍しいんじゃない？

だんだん軌道がわかるようになってきた。

少しずつ距離を詰める。

「このっ！」

鋭い一撃が一閃、俺の上空から落ちてきた。

それをギリギリで横にかわし、隙のできたウェンディの足元へ一気に詰め寄る。

避けられると思ってなかったのか、鞭の動きが鈍る。

「いたっ！！！」

決して戦闘向きとは思えないような高いハイヒールを履いている足首に思いつきしかぶりついた。

「いたいー」

その場に崩れ落ちる。

サディスティックなだけに、自分に対してのダメージには極端に弱いらしい。

なにこれ、弱すぎ・・・。

「もうやだぁ。帰る！」

そう言っただけ泣き叫ぶ。

うっわぁ、めんどくさい女だなぁ。

しかも会場からは男の声で大ブーイング。

なにこれ、俺超悪役じゃん。

「ここでウエンディがリタイアを宣言！ロロの勝ちだあ！！」

こんなんで勝負が決まっちゃったし。

よく一回戦勝ち上がったなあ。

ブーブー！！！

なんか、むしろ俺が帰りたいよ。

超アウェイな雰囲気ってずっと続くわけ？

ってか絶対裏でトトカルチョとかされてるよコレ。

俺の予想じゃ、ウエンディが倍率1.3くらい。俺に賭けてるやつなんて、頭のイカれたおっさんくらいなものだよきっと。

あ、もう一人いたわ。

うん、ミラ。

あいつなら絶対俺に賭けてるわ。

「あら、お帰りなさい」

ミラ、すっごいにこにこしてる。

「よくあんな鞭を避けたわね」

「うん、そうだねー。それでいくらか儲かった？」

「えっと2ミリドルと500ジャムくら・・・あ」

気まずそうな顔。

「い、いーいロロ？だって、お金って大事だと思わない？」

「うっさいわ」

「もうゴミ箱漁りとかやりたくないんだもん」

「もうミラ嫌い」

もう知らんし。

「わあわあ、ほんとにごめんってば！ねえ、口口ったら！」  
「知らないしー」

もう今日は試合がない。

ミラはそのお金でどうやってか知らないけどかわいい赤い小銭入れと首輪を買ってきた。

「ほら、これで全部口口のものだよ？」

勝手に首輪をつけて、それに小銭入れをぶら下げる。  
中には数枚のお札と小銭が入っていた。

「あのさ、首に付けてたらさ・・・」

「うん？」

「俺どうやって取り出すん？」

「ああ、無理だね」

もうどっか行けし。

「明日もよろしくね」

全然反省してないじゃん。

ああ、もうどうでもよくなってきたわ。

明日は三回戦と準決勝。

テキトーに勝ち残って、猫缶だけもらつとしよう。

## 22・なにこれ、打たれ弱いドS（後書き）

足を噛んだだけで負けるって、書いてて弱すぎてつっこみました（笑）

まあ、まだ二回戦なんでね。

ただ三回戦とかになったからってすごい戦闘が待ってるとは限りませんけどね。

あと、猫がお財布持っても本当に意味ないですね。  
これぞほんとの猫に小判って。

・・・すみませんでした。

## 23 - なにこれ、悪夢

夢を見た。

そりゃ猫だつて夢を見る。

そこには魔王がいて、そこには勇者がいた。

全然知らない魔王と、全然知らない勇者がいた。

なんでか魔王と勇者だということだけはわかった。

「助けてくれ」

「たすけてくれ」

「タスケテクレ」

二人の声が、不協和音となつて耳に響く。

なにから？

どうやって？

どうして？

「俺達を開放してくれ」

さっぱり意味がわからん。

勝手に開放される。

「この呪縛を壊してくれ」

呪縛なのに解くんじゃなくて壊すの？

「お前は特別だ」

そついうごたくはいらない。

俺が特別だなんてことは生まれた時からわかってる。

「帰りたい」

俺の言葉だから。

お前らが使うなし。

「勇気を持て」

愛と勇気で世界が救えるなら何千回って救ってやんよ。

「真実を見る。気づけ」

猫の目は全てを見つめる。

俺の目は全てを見透かす。

気付いてないんじゃない。

気付かないフリをしてるだけ。

「一本の道を歩け」

嫌だ。

俺は道でないところだって歩く。

だって猫だもん。

道しか歩かないのは人間の悪い癖だろ。

勝手に同じ生き物にしないで。

「助けてくれ」

繰り返し。

壊れたテープレコーダーのように。

ただひたすらに助けてほしいらしい。

他人に頼るな。

他人に頼ってちゃ、野良の世界じゃ簡単に死ぬよ。  
自分でなんとかする努力をしろ。

「信じてる」

勝手にしてくれ。

俺は関係ない。

なんで魔王を助ける必要があるのさ。

魔王に信じられる義理もないし。

お願いなのか指図なのかはつきりしてくれ。

どっちであつても関係なく答えは決まってるけど。

「残念、お断りー」

それだけを言つて、目が覚めた。

「なにが？」

目の前にはミラがいる。

ここは試合会場の人影少ない日陰の昼寝スポット。

ああ、そつか。寝てたんだね。

三回戦が始まるまで寝てようつて自分で決めたんだわ。  
なにこれ、肉球に汗かいてる。

「え？」

「なにがお断りなの？」

うわ、声に出てたんだあ。

なんか恥ずかしいな。

「ああ・・・なんだっけ？」

「もう。ほら、変な夢見てないでそろそろ試合だよ。勝つんでしょ？」

溜息と同時に俺を鼓舞する。

「めんどいなあ」

あんまり覚えてないけど、もう二度と見たくない夢だった気がする。

お願いだから、俺を巻き込まないでくれ・・・。



### 23・なにこれ、悪夢（後書き）

連載から初めて一日間隔を空けての投稿になってしまいました。  
これからもなるだけ間隔空けないで連載しようと思います。

今回は息抜きのなお話でした。

いや、ある意味ではすごく大事なのかな。

笑いのネタ的には皆無に等しい内容で、申し訳ないです。

## 24 - なにこれ、アフロ

「さあ！三回戦第一試合！三毛猫の口口対、サウスポーのガバルデ  
イ！！！」

色黒でアフロ。

ってか左利きってのが二つ名ってどうなの？  
いや、俺はもっと言えない立場だけどさあ。

「レディーファイトッ！」

左手に片手剣。

アフロがゆさゆさ。

見てるだけでうっとおしいな。

「ユーはストロング？」

ごめん。何を言ってるのか全然わかんないや。

「オウ、ユーはキャットじゃない」

どうやって倒そうかな。

「ミーのリズムについてこれるかな？」

相手が動いた。

不思議なステップ。

近づいたと思ったら遠くにいて、遠くにいると思ってたらいつの間にか近づいてる。

「ノツてきたよー！」

知らないよー。

ああ、なんで変な感じがしたかわかったわ。

歩幅を常に変えてるから気持ち悪かったんだ。

とりあえず、座ってる体勢から戦闘する低い姿勢に変える。

捕らえにくそうだから魔法を使っちゃうのもありかな。

「へいへいへいへい！」

ほいほいほいほい。

足に補助魔法をかけて一気に近寄る。

思ったとおり、防衛反応で剣を振ってきた。

なかなかの剣速の袈裟切りだったけど、あたらきやしょうがない。

左に避け、着地の一歩で飛びつく。

猫って本当に便利だと思う。

だって、人間よりもワテンポ早く次の動作をできるんだもん。

「シット！」

嫉妬？猫に？

顔をひつかこうとするが、剣で遮られてしまった。

「なんていう凶暴なキャットだ」

キャットって俺のこと？

俺口口だけど。

変なあだ名とか付けるなし。

「イエイ！」

変な掛け声と共に剣を大きく薙ぎ払う。

ぶううん！！

見えない刃、かまいたちが俺を襲った。

あ、正確に言えば、俺には見えてるんだけどね。だつて空気の動きなんて簡単に感じられるもん。つてわけで、たやすく避ける。

「ワット?!」

なんで避けられたのか疑問つて顔してる。

続けてかまいたちを二連撃。

なんなくかわす。

「シット！」

また嫉妬？かまいたちが見える俺に嫉妬してんの？

別に言葉で言わなくても。

初めて見たもん。嫉妬してる相手に対して嫉妬！って言う人。

かまいたちを繰り出す動作は隙が大きい。

ここを狙うしかない。

「今度こそキル！」

切られないよ。

かまいたちに向かって走り出し、体をひねって避ける。そのままの勢いで顔面をひっかく。

「ノオオオオ！！！！」

そのまま相手の頭に着地。

うお、アフロって沈むんだ。

すげー、神秘の世界だし。

アフロで思わず爪を研ごうと爪を伸ばした。

ぶちぶち！

「ああああああ！！！！」

あ、抜けた。

うん、抜けたわ。

華麗に地面に着地し、爪に引っ掛かった髪の毛を丁寧に落とした。

「勝者、三毛猫の口口！！！！」

おもしろい相手だったなあ。

結局左利きの意味ってなんだったんだろうね。

## 24 - なにこれ、アフロ（後書き）

この世界も右利きが多いみたいです。  
だから左利きの人は戦闘でも有利だったりするんです、人間相手な  
ら。

## 25・なにこれ、ミスったし

「準決勝第一試合！三毛猫の口口対、白銀のイデア！！！」

本日二試合目は女の子との対決らしい。

長くない剣を片手に、白く長い髪の毛を揺らしながら俺を睨む。  
ちよつと・・・怖いかも。

動物の本能的に、目の奥からすごい殺気を感じる。

「お前・・・何者だ？」

呟くように。

答えるべきかな？

なんか喋れるってことがバレてそうだし。

「・・・人形？誰かが操っているのか？」

あれー。意外と何もわかってないんじゃない。

さすがに人形ってのはないっしょ。

「・・・かわいい」

この風貌でかわいいもの好きかあ。

まあ、俺のことをかわいいと思うなんて最高のセンスの持ち主ってことだけは確かだな。

「レディーファイトッ！！！」

見たところ魔法剣士かな。しかも素早い攻撃を主体とする感じ。

ある意味俺と似てるかも。

アイデアが何も持っていない左手を俺にむけてのばす。  
やばっ！

思った瞬間、俺よりも大きなファイヤーボールが飛んでくる。

思いつき後ろに飛び退く。

同時に俺に詰めてくる。

本当に俺と戦い方が似てる。

「ふっ」

息を吐き出しながら剣を振り下ろす。

華奢な体からは想像もつかないほどの剣速。

たぶん補助魔法で強化してるんだろう。

つてか、この人全部無詠唱なんですけど。

左手が常に俺をむいてる。

足に補助をかけていても微妙。

「・・・・・・・・・・思ったより速い」

ボソツと一言。

君の方が思ったより速いから。

この相手に呪文なしで勝つことはたぶん不可能かも。

ああ、本当は使いたくないけど・・・。

「・・・・・・・・・・決着つけるよ」

え、もう？そんなに速攻で決めちゃうの？

つてか結構独り言多いよね？

まあ、大きいのがくるなら都合がいいかも。

左手がこっちを向いてる。



全力で俺はアイデアへ詰め寄った。

「はっ！」

うお、結構大きい声も出るのね。

なにこれ、氷の魔法？

アイデアを中心に氷がドームを生していく。

闘技場の観客席と完全に隔離される。

攻撃魔法とばかり思ってたから、狙いがなんなのかは全くわからない。

「ふふつ、二人つきりだね」

あれえ、急に饒舌になったよ？

「ほーら、ねこしゃん。こっちにおいでえ」

甘ったれた声で俺を手招く。

ってかここ寒いし。いろいろな意味で寒いし。

「そっちにいかないにゃ」

甘ったれた声でお返し、と同時に無数のかまいたちを繰り出す。

「え?!」

驚きを見せた時にはすでに体に傷ができていた。

衝撃で氷のドームにひびが入る。

「しゃ、喋れたの・・・？」

「うん」

ダメージで倒れたのか、ショックで倒れたのか、心がキュンとして倒れたのかはわからないけど、とりあえず勝った。

氷のドムが崩れる。

下敷きにならないように、破片をかわす。

「なんと現れたのは三毛猫の口口だぁ！！！！」

あ！

どうしょ！！！！

猫缶はここで負けないといけなかったんだった……。  
うわぁ、うわぁ、負けたことにできないかなぁ。

「三毛猫の口口の勝利！！！！」

うるせー。

負けさせてくれー。

決勝とかほんとに興味なかったのに……。

あのキモい勇者と戦いたくないよ。

あぁ、ミスった。

## 25・なにこれ、ミスったし（後書き）

イデアはただのかわいいものの好きな女の子です。  
っていうかただのアホです。

そもそもこのお話の登場人物の八割くらいアホだと思っています。

## 26 - なにこれ、かつこつけめ

「うふふ、結局決勝じゃない」

半ば思い通りで気分のいいミラが俺に言う。

「うつさい。だってあの女の人気持ち悪かったんだもん」

「綺麗な人だったじゃん？」

「氷のドーム中で俺とじゃれようとしたんだよ？試合を忘れて・・・」

「

「おもしろい人じゃん」

「変な人っていうんだよ」

決勝は次の日だ。

「ああ、そういえばさ」

「ん？」

「なんか勇者負けてたよ」

「うえ？」

思わず口にくわえてたパンを吐き出したし。

「うわあ、ざまーみろー」。

「常闇のゲートって人」

「ほんとに人なの？」

「知らない」

「ミラもそんなに情報持つてるわけじゃないんだね」

「だって、興味なかったんだもん」

だって勝つたら二位の賞品が取れないもんね。  
だから情報とか極力俺には伝えないよね。  
すごい近くに敵がいたわ。

「もうさ、どうせなら優勝するからね？」

「ダメ！・・・じゃなくて」

「え？」

「いや、ダメージはもう抜けてる？って聞いたの」

うわあ、無理やりごまかしてきた。

無理ありすぎてちよつとひくし。

もう狙いがバレバレなのに。

「いいい、ロロ？ちゃんと休養して、疲れをとらないと明日勝てないよ？」

「ダメージ受けてないもん」

「だから、早く寝ないとダメだよって言うてるの」

コツンコツンと足音が聞こえる。

「やあ、こんなところにいたのか」

勇者のおでましかよ。

呼んでないし。

「まさかこんな廃墟の屋敷の中で寝泊まりしてたとはね」

「野良猫なんでねー」

「私は普通に泊まりたかったけどねー」

ミラがベッドで寝たいという意見を取り入れた上での廃屋敷だか

ら。

「そついえば負けたんだって？勇者様」

「まあ・・・ね」

なにコイツ、なんで偉そうなん。

かつこよく言えばいいってもんじゃねえぞ。

「次の相手は気をつけた方がいい」

「なめこのケーキだっけ？」

「常闇のゲートだ。あれはもしかしたら人間じゃないかもしれない」

「それじゃあ魔物ってことかしら？」

「もしかしたら・・・な」

だからかつこよく言えばいいってもんじゃないから。

「つてかさ、勇者様弱いよね」

「ふっ、なんとも歯がゆいね」

もはや勇者の強さとかどうでもいいし。

魔物相手とかさ、ふつうに俺怪我したくないから。

つてことは怪我をしないようにしたら自然と勝っちゃってことだよね。

うん、それでいいや。

## 27・なにこれ、闇病み止め その1

不気味な雰囲気体がまとわりつく。

この相手と対峙した時から嫌な予感がしてならない。

「ついに決勝戦です！一体ロデリアスの武神が微笑むのはどちらの選手なのか！？」

どっちでもいいよ。

「三毛猫のロロ！そして常闇のゲート！両選手の入場です！！」

もう入場してましたけどね。

ってかいまさらじゃん。

「ねこー！！」

どんな応援じゃ。

まあ、罵声から声援に変わったのは嬉しいけど。  
よっぽどゲートって人が人気ないんだろうなあ。

そりゃ、勇者倒しちゃってるしね。

「さあ、試合開始のゴングが鳴り響きます！」

今までの試合で一度もゴングとか鳴らなかったから。  
全部あんたのうっさい声で始まってたでしょ。

「レディーファイトッ！！！！」

ほら。

ゴング鳴らないじゃん。

「クロス」

わあい、どうやら危ない人みたいですよ！

女の人なのに女の人の匂いがしない。

どこか腐臭というか、物理的に感じられない匂いがある。

ゲートは手を左右に広げた。

空でも飛ぶおつもりですか。

「雷電」

一言つぶやいた。

途端に無数の電撃が俺を襲った。

無論、足には補助がかかっていたため、なんなく避けることはできた。

それにしても強力な魔法をいとも簡単に使ってくれる。

「氷結」

地面が勢い良く凍っていく。

綺麗な円を作りだしたと思ったら、凍った地面からつららのように氷が突出してきた。

逆つらら？

俺はすでに出ているつららの先端を切って、そこに着地した。

なんか、全然闇の魔法を使ってこないんですけど。

なめられてる？

やっぱり猫だからって決勝でもなめられてるわけ？



「炎舞」

せっかく凍っていた地面は全て溶けてしまった。  
炎が俺を包む。

あちい。

火が踊るように俺にまわりついてくる。

それを丁寧にかわして、少しずつゲートに近付いていった。

「水砲」

まるで消防車のホースから出てる水。

勢いよく俺を追っかけまわすが、火も消してくれるし、俺には当たらないし。

まったくもって良いとこなしの魔法だった。

地面は水浸し。

だからといって移動力が落ちるわけでもない。  
はつきりいつて初期の状態とほぼ変わらない。

「暗灯」

ついに出了た。

これが闇の魔法。

小さな黒い球体が俺の方へゆっくりと近づいてくる。

なにこれ、おそっ！

こんな絶対当たないじゃん。

油断して球体の接近を許してしまった。

だがそれがいけなかった。

球体は急に大きくなり、俺を一飲みした。

あらあらあら、やってもうたよ！

暗闇が見える。暗闇しか見えない。

俺の毛色が一色になった。

そして五感が奪われた。

なにもない。

無気力だけが俺を襲う。

ああ、このまま闇に溶けたい・・・。

## 27 - なにこれ、闇病み止み その1（後書き）

実況の声なんです、この作品は基本的に口口の五感をたよりに書かれています。

1 回戦以外、口口は試合中に実況の声を無視していました。なので実況の声が描写として描かれないのです。

それだけ口口が集中しているのです。

ただ作者が実況の声を書くのをめんどくさがっているわけじゃありません。

決してそういうわけじゃありませんから！

ほ、本当ですから！

## 28・なにこれ、闇病み止み その2

「こんにちは」

喋ってるのに自分の耳に届かない。

ひんやりしてる気がするけど、そうでもないかもしれない。  
なにこれ、なんにもわかんねえ。

もうどうでもよくなってるよ。

「ようこそ闇の世界へ」

頭に直接響く声。

「ワタシの世界。ワタシの場所。どう？」

どう？っじゃねえし。

全然居心地悪いし、そもそもなんにもわからないから。

「君はそのままワタシの世界で永遠に生き続けるの」

断る。

なら死ぬし。

なんとなくわかってきた。

直接頭に響く声と同じことをやってみればいいだけのことだ。

「もう飽きたから出るよ？」

感覚的に、自分の頭に響かせるだけじゃなく、声の相手の心を想像する。

「な、なにを？」

ああ、どうやら声が届いたみたい。

「だから、もう飽きた」

五感はないけど、思考はできる。

光の魔法なんて使ったことも見たこともないけど、なんとなく想像してみる。

「にゃ！」

物理的な声じゃないけど、呪文発動には十分な合図。

目の前に光が現われ、闇が溶けるようになっていく。

「なんだと!？」

真っ白な視界が一瞬よぎり、そして会場の風景が戻ってきた。

「くっ」

いやあ、天才ですいませんねえ。

もうコイツには手加減しない。

魔力を貯め、集中して、相手を凝視する。

「闇円舞」

無数の漆黒の剣が俺にむかって飛んできた。

「にゃ！」

同時に魔法を使う。

無数の光の剣が漆黒の剣にむかって飛んでいく。

場内騒然。

猫が魔法を使ってるなんて誰が信じられるだろう。

全ての漆黒の剣を打ち落とし、さらに光の剣はゲートにむかって飛んでいく。

「ちっ」

舌打ちをしながら、片手を突き出す。

光の剣はあっさりと打ち消されてしまった。

ゲート本人が光に弱いというわけじゃないらしい。

結構頑張って作った魔法だったのに・・・。

「遊びは終わりにする」

精神異常者だっことはわかってたけど、この展開は予想してなかった。

服が裂けた。

巨大化した。

ってか人じゃなくなった。

目の前には、巨人くらい大きな黒いドラゴンが姿を現わした。

終わった。

こりゃ無理だ。

会場は大騒ぎ。逃げ惑う人々。

「な、なんなんだこれはああ???!!!!!!」

実況も意味不明。

もう大会とかそんなの関係なくなってる。

「□□！」

ミラが飛んできた。

「手伝おうか？」

「・・・え？やるの？！」

逃げる気満々だった俺にミラはやる気満々。

「僕も手伝うよ」

「お前はいいや」

勇者の親切を踏みにじって、俺はドラゴンと対峙した。

## 28 - なにこれ、闇病み止み その2 (後書き)

忙しくて書けない日々が続いております。  
ネタがなくて書けないわけじゃないです。  
ほ、本当ですよ？



## 29・なにこれ、闇病み止め その3

ゆっくりと息を吐く。

「どうやって勝つの？」

巨人戦は運で勝ったようなものだし・・・。

「いーい、ロロ？ブラックドラゴンの弱点は物理攻撃よ」

「ふえ？」

すつとんきような声が出た。

いやいや、絶対嘘だね。めちゃくちゃ堅そうな皮膚してるもん。

「あの外皮の下はすごく柔らかいの。外皮さえ貫けば、相当なダメージを与えられるはずよ」

ミラはふわふわ飛びながら俺にむかって両手をかざした。

「フォース！」

詠唱するやいなや、俺の髭がむずむずする。

なにこれ、髭がめっちゃ伸びたんですけど。

きもっ！アンバランスすぎでしょ。目で見える位置で髭がゆらゆらしてるもん。

「髭伸ばす魔法とか掛けられても・・・」

「大丈夫。今ロロの髭に触れたら私なんて真つ二つになっちゃうわよ」

つまり、刃の様な髭になったわけ？

なんかさ、もつと爪とか牙とかいろいろ強化できるところってあったよね？

あえて髭？ヒゲ？ひげ？

「ほら、ボーっとしてたらやられるよ！」

見上げるとゲートの口から黒い息が漏れている。

絶対、光線がくる！

「ライトシールド！」

勇者が俺の前に立つ。

「あんた、変身前のこいつにやられてるんでしょ？」

「ふっ、ま、いろいろと事情があるのさ」

かつこよくねえつつうの。

ゲートが首を上へあげ、勢いをつける。そして次の瞬間光線が・・・ではなく黒い霧が辺りを覆った。

「シールドの意味ねえじゃん」

「・・・ふっ」

小さい声で今言っただし。

霧によって全く視界がなくなってしまった。

右から気配がする。

瞬時に後ろに飛び退く。すると、今いた所から、地面が砕かれる音が耳を貫いた。

「大丈夫？」

ミラの声はすぐ左側から聞こえてきた。

「フィールドウィンド！」

一瞬で黒い霧が晴れる。勇者が風を巻き起こしたらしい。晴れ渡った瞬間、ゲートの右腕が飛んできた。風で鼻が利かなく、音も察知するのが遅れた。

「うぐっ!!！」

爪が体にかする。

それだけで血が滲んだ。

勇者のせいで、この世界に来て初めて直接ダメージ食らったし・・・

「にゃ！」

傷は浅いため気にせずに牽制魔法を撃つ。

撃つと同時に懷に飛び込んだ。

そしてそのまま左腕の横を通った。

ズシン！

ブラックドラゴンの左腕が落ちる。

うわぁ、俺の髭やべえ。

ってかミラの補助強すぎ。

だけど、動くことでずきずきと傷が痛む。

「ヒールポイント！」

ミラの魔法。俺の傷がみるみる治っていく。  
なにこれ、反則じゃん。

「ごめんね口口。それ代謝を良くして治す魔法だから、寿命縮まったかも」

半笑いで言うことじゃねえじゃん。  
反則じゃなかったし。充分リスクあったし。  
まあ、この分なら勝てそうだね。

### 30 - なにこれ、闇病み止み その4

翼が広がる。

漆黒の鱗を身にまとい、重そうなその体が地面から離れた。

「それはずるい」

思わずつぶやく。

だって、俺は飛べないもん。

絶対あの翼は飾りだと思ってたし。

「大きいのが来そうですね」

勇者の言うこととか、もはや信頼できないから。

一際大きく翼を打った。

どでかいかまいたちが会場全体を襲った。

「くっ」

かまいたちは誰も傷つけなかった。

「うわぁ、勇者さんすごいんだねえ」

ミラが感嘆をこぼす。

見事に勇者は結界を張り、かまいたちをガードした。  
いい加減、上を向くのがめんどつくさくなってきた。  
見下されてる感じもすごく嫌だ。

「にゃー！」

牽制の意味を込めて、光の矢を光速で放つ。  
しかし、ゲートには届かずに、ゲートの作り出した結界によって  
撃ち落とされた。

「あいつも結界とかずるくね？」  
「いや、戦闘にずるいとかないでしょ」  
「へえ」

ミラに教わった。

「ミラ」  
「なに？」  
「俺も飛びたい」  
「え？」  
「飛ばせてよ」  
「いい、口口？猫は空を飛ばないわ」  
「猫は言葉も喋らないぜ？」  
「大体なんで私に言うのよ」  
「だって、補助とか得意なんでしょ？さっきの髭とかすごかったじゃない」  
「・・・まあ、あんなの当然だけどね？うん、できるよ。口口を飛ばすこととか余裕」

うわあ、褒めたら堕ちた。

「でも、結構高度な魔法だから、ちょっと時間稼ぎしてよね」  
「あい」

また光の矢を放つ。

「ねえ」

「なんだい？」

「あの結界ってどうにかなんない？」

「それはなかなか難しい問題だね」

「勇者のくせにしょぼいね」

「・・・できないなんて一言も僕は言っていないよ？」

うわあ、けなしたら堕ちた。

「ただ、遠距離ではどうにもならないから、タイミングを見計らわせてくれないか？」

「あい」

もう一本光の矢を放つ。

ゲートは大きく口を開けた。

「あ」

みんなやばいって思ったと思う。

「にゃ！」

ゲートの口から高密度の魔力が溜められていた。

そして、一気に開放する。

一直線に俺にむかって光線が飛んできた。

俺も瞬時に高密度に魔力を凝縮し、上空に向けて一気に開放した。

ドゴオオオン！！！！！！！！！！

音だけは、とりあえずすごかった。

なんとか相殺できたらしい。

予想以上に魔力を消費してしまった。

きつとあんなのをいくらでも放ってくるんだろう。

「フライングウイング!!!!」

急に体が軽くなった。

なにこれ、羽が生えてる。

翼じゃなくて羽。

足が地面から離れる。

「うお」

うまくバランスが取れなかったが、なんとか尻尾を振って、バランスを保ってみる。

「これでどう?」

ミラのどや顔に対して大きく頷いた。

髭がまた伸びる。

その感覚を研ぎ澄まし、髭に魔力を集中させた。

一気にゲートとの距離を詰める。

ゲートは右手の爪に魔力を溜めている。

体が大きい分、動作が鈍いのが、唯一の突破口かもしれない。

「シールドフィールド!!!!」

勇者の声が聞こえる。

しかし、なにも起こらない。



もうゲートとの距離は間近になっていた。

このままでは相手の結界に弾き飛ばされる。

それでも行くしか道は残ってないんだから嫌になってくる。

「にゃあ！！！」

一気に加速する。

ゲートが右腕を振り上げる。

無音。

そのまま俺はゲートを通り過ぎる。

ん？通り過ぎた。

「ぐおおおお！！！！！」

断末魔。

ゲートの叫びが闘技場に響き渡った。

ん？

あれ？

勝った？

### 30・なにこれ、闇病み止み その4（後書き）

ずいぶん間が空いてしまいました・・・。  
忙しさを言い訳にはしたくないのですが・・・。

余談ですが、猫の髭は絶対に伸びたり縮んだりしちやいけないものですw

猫が自分の体の大きさを測るものなので、狭いところとかに入る時に役に立っている、いわゆる触角なのです。

一説には平衡感覚も含んでいるとかいないとか。

まあ、ファンタジーなので、なんでもありですw

### 31 - なにこれ、賞品泥棒

着地と同時に羽が消えた。

髭も元に戻った。

ものすごく息の切れたミラと、ものすごく汗の光る勇者がそこにはいた。

後者はすごくきもい。

「勝った」

一言告げる。

「ふざけるなあ！！！！」

鼓膜を破るような声。

墜落したゲートは四つん這いの状態で、俺を睨みつけてくる。殺気だけはとんでもない。空気がびりびりして、気持ち悪い。

「お前たちは……必ず後悔することに……なるだろう……」  
「……………」

「い……つか……ふくしゅ……」  
「にゃ」

言い終わる前にとどめを刺した。

脳天に一撃。

だってうつさいんだもん。

「結局闘技大会の勝者って誰なの？」

ミラの疑問に、俺は即答した。

「そりゃもちろん俺っしょ」

「いや、僕かもしれない」

お前負けたくせに何寝ぼけたことを言っ<sup>て</sup>やがる。

「意外と大穴で私かも」

参加もしとらんだろ。

とにかく静まり返った闘技場。

人は逃げても賞品は逃げなかつ<sup>た</sup>らしい。

「うん、もらっ<sup>て</sup>いこ?」

その一言を皮切りに、俺達は欲しい賞品を手<sup>に</sup>会場を後にした。

「結局ゲート<sup>つて</sup>何者<sup>だ</sup>つ<sup>た</sup>んだろ?」

「しらねー」

「恐らく、魔王の手先<sup>だ</sup>ろっ<sup>つ</sup>」

そりゃそう<sup>で</sup>しょ。

そこが疑問<sup>なん</sup>じゃなくて、何が目的<sup>だ</sup>つ<sup>た</sup>のか<sup>つて</sup>ことを聞<sup>い</sup>てる<sup>ん</sup>で<sup>し</sup>ょ。

「どう<sup>で</sup>も<sup>い</sup>い<sup>よ</sup>。次<sup>ど</sup>こ<sup>に</sup>行<sup>く</sup>?」

「南<sup>に</sup>行<sup>こ</sup>う」

あれ?

さっき<sup>か</sup>ら<sup>だ</sup>い<sup>ぶ</sup>お<sup>か</sup>しい<sup>こ</sup>と<sup>が</sup>あ<sup>る</sup>。

なんか、勇者がついてきてる。  
なにこれ、ストーリー？  
ってかお前に指図されんのっておかしくね？

「南っていいかも！」

ああ、ミラがのっちゃった。  
もうこれは決まっちゃったよ。  
そりゃね、暖かいところの方がいいし、魔王との距離も離れるし  
ね。

ちなみに賞品の分配だけど、俺は猫缶を頂きました。  
ミラは赤い魔石。

勇者は一位の旅行券。  
なんで勇者が一位の賞品もらってきてるんだし。  
ちゃっかりしすぎっしょ。

「よし、僕についておいで」  
もうコイツしらねー。

### 31 - なにこれ、賞品泥棒（後書き）

作者が諸事情により、家にいなかったため更新が大幅に遅くなってしまいました。

内容もぐだぐだでごめんなさい。

ゲートの真意とか色々謎を残してますけど、あんまり考えてないです。

・・・嘘です。たぶん。

がんばりますwww

### 32 - なにこれ、次の町

南に行くにつれて、だんだんと暖かくなってきた。  
やっぱりね、暖かいほうがいいね。

「君たち、次の町にはとても大きな湖があるんだ」

なんか勇者が独り言もらしてるし。

「へえ」

ミラも面倒くさそう。

「その湖を渡るために船に乗るのさ」

もはや相槌すら打たなくなった。

「その船ってというのがまた素晴らしい。湖の景色を堪能できることはもちろん・・・」

始まったので、ほっとくことにする。

肉眼で町を確認できるところまで来た。

道中は順調そのもの。

おもしろいこともなにもなかった。

ってか勇者がうざかった。いや、暑苦しかった。

「サンベンプル」

なにこれ、くらっ！

町中が暗い雰囲気を出している。

まあ実際問題、町の雰囲気とかどうでもいいからね。俺は南に行ければそれでいいし。

湖畔の港へ行くと、人だかりができていた。

「なんで船を出してくれねえんだよ！」

うるさく品のない怒声が響く。

「申し訳ありません。申し訳ありません！」

人だかりの中心には、冴えないおっさん。

「湖に潜む魔物が活性化いたしましたて、皆様を無事にお送り届けることができないのです」

「つく……」

別段腕に自信のない人たちのようで、みんな散々になる。

「僕たちが倒すというのはどうかな？」

「えー、めんどい」

とりあえず勇者の提案を即却下する。

「あー！猫さん！！」

突然、後ろの方から女の子の声が聞こえた。

「ひっさしぶりー」



その女の子は、俺がこの世界にきてオークションに突き出した商人の親子の娘だ。

「私リユカだよ。覚えてる？」

「まあ、そりゃ」

そりゃ覚えてますよ。名前は覚えてなかったけど。

「ねえ、湖渡りたいの？」

「やあ、レディー。ロロくんの知り合いかい？」

「お前は黙っとけ」

「わあ、かつこいいねこの人。猫さんはロロって名前になったんだ？」

「まあ」

「ねえ、商談しましょ？」

さすがは商人の娘。挨拶とお世辞の次に出てくる言葉は商いの話だ。

「私たちの船の護衛を依頼したいの」

「俺に？」

「そっちのかつこいい人が強そうなんだもの。猫さんはなにもしなくていいわよ」

そうですね。所詮猫ですもんね。

「報酬はきちんと払うわ」

「僕の力を必要としてるのなら、断る理由はないね」

はいはい、その気になっちゃったね。

「さあ、みんな！船に乗り込むんだ！」

とりあえず一泊してから行くことにしよう。

### 33 - なにこれ、空気読め

やべー。

船酔いしたわあ。

町で一泊し、夜明けと共に出港した。

船はゆらゆら揺れて、湖をゆっくりと前進していた。

「うえー」

猫って船酔いするんだね。

乗ったことないから初めて知ったし。

「ロロだいじょぶ？」

ミラが心配してくれる。

心配してくれるなら、治る魔法をかけてくれ。

向こう側では、リユカと勇者が雑談している。

「へえ、お兄さんって勇者なんだあ」

「ははっ、まあね。僕にかかれれば大抵の魔物は相手じゃないさ」

「大した魔物にや負けてたけどね」

ボソッと付け足してあげる。

「南の王都って、魔法都市ソルビートルでしょ？商売の匂いがあるのよね」

「その通りだよ。魔法の研究では大陸随一と言われているんだ」

「意外と生活必需品とかが足りてなかったりするのよね」

「高貴な魔法使いたちが優雅に暮らしているからね」

なんとなく会話が噛み合っていないし。

まあ、どうでもいいけどね。

とにかく思うことが一つある。

「全然安全じゃん」

船が出港してから数時間、何かが起こる気配が何もしない。

「そういうこと言ってるに出てくるのよ、なにかが・・・」

ミラの一言に、思わず納得してしまい、生唾をゴクリと飲んでしまっ  
た。

「またまたそういうこと言わないでよミラったら」

あははは、と笑っていると勇者が船の後ろの方を見て静かに言っ  
た。

「そうさ、そんなことを話しているから、ほら、船の後ろに巨大な  
タコがくっついてるじゃないか」

わあ、ほんとだー。大きなタコだねー。珍しいねー。おいしいの  
かなー。

って、なんでそんなに落ち着いていられんのこの勇者！  
タコにしがみつかれた船が大きく揺れた。木が軋む音がする。

「ねえ、この船がもしも壊れたらさ、もちろん湖に落とされて、も  
ちろん泳がないといけなくなるんだよね？」

「そりゃそうよ。まあ私は飛べるけどね」

「…………俺さ、泳げないんだよねー」

もう笑えません。

「ふむ、安心したまえ」

お、なんか勇者が誇らしげだぞ。

なんか泳げるようになるような魔法でもあるのかな。

「僕も泳げないのさ」

ダメだったー。

やっぱりコイツはダメだったんだね。

少しでも期待した俺がむしろ悪かったよ。

今は泳げない同盟とか組んでる場合じゃないから。

空気読めよこのタコ勇者め！

「とにかくさ、このタコをどうにかしよう！あ、勇者のことじゃないからね」

半ば涙目で俺は船のブリッジを後ろへ走った。

### 33・なにこれ、空気読め（後書き）

勇者のウザさに書いててイラだってたりwww

とにかく執筆時間がほしいです。

こんなに秋が忙しくなるとは思ってなかった作者でした。

### 34・なにこれ、タコ勇者 その1

そもそもさ、根本的なことを言っちゃっよ？

タコって海の生き物じゃね？

これって言葉にしているのかな。

これ言って、そこは言わない約束だろうがって空気になったらどうしよう。

「どうしたの口口？」

ミラが何かを察した。

そんなに考え込んだ顔してたんかなあ。

まあ、気になることだから一応言っかな。

「いや、大したことじゃないんだけど・・・」

「じゃあ今はいいよね」

切り出したのに、切り出し方をミスった。

気にしたら負けなの？ そうなの？

ぐらぐら揺れる船と俺の心が悲鳴をあげている。

「水には電気系の魔法がセオリーさ。僕の魔法で仕留めてみせるよ」

勇者がいきり始めた。

俺はね、この後、どういう結果になるのか知ってるよ。

「ライジングサン！」

魔法の名前に電気関係なかったし。

え、あ、もしかして、雷神と掛けてるの？むしろ、ある意味で高度な魔法だね。

電気を凝縮したような球状の光がタコに直撃する。  
そして、大方の予想通り、ほとんどダメージがなかった。

「ふっ、さすがだな」

もうスルーするね。

とりあえず電気系はイマイチみたいだから、別の魔法でいこう。

「にゃ！」

先の闘技大会で覚えた光の矢を雨のように降らせる。

タコの体に矢が接触した瞬間、魔法が粉々に消え去った。

魔法がきらめきながら分解されている。

厳密にいうなら、接触する直前で分解されている。

もしかしたらこのタコには魔法が効かないのかも。

「魔法が・・・」

そう言っただけでミラには伝わったようだ。

俺の方を見てコクッと頷いた。

「光もダメなら、炎で焼きタコにしてあげよう！」

タコ勇者は気付いてないらしい。

なんか必死になって火の魔法を放ちまくってる。

全部効いてないけどね。

「チャージ！」



ミラが俺に魔法を掛けてくれる。

ミラはサポート魔法の専門だけあって、俺が自分に掛ける補助よりも効果が数段高い。

これで身体能力が抜群に上がったはず。

「ファイヤーストーム!!」

うわぁ………せっかく肉弾戦しようと思ったのに、火の渦がタコを囲んで、むしろ俺が近づけない事態になってるし。

「このタコ勇者! いい加減気付け! にゃ!」

思わず叫び、湖の水を操って鎮火させた。

誰でもいいから、この味方が敵かわからんタコ勇者をどっかにやってくれ。

### 34・なにこれ、タコ勇者 その1（後書き）

時間をください。

家に帰ってパソコンを開く元気すら、最近は失せてきましたw

### 35・なにこれ、タコ勇者 その2

まずはこの船中にへばりついてる足をなんとかしないと。  
髭を伸ばす作戦もいいけど、船ごと切っちゃうとめんどくさいから・・・どうしょ。

「ロロ！前足を強化したから、手刀で切っちゃえ」

手刀ってなんですか？

この短い手足でどうやって切ればいいと？

まあ、どうせ策とかないから、やってみるしかないかも。

タコは特に動くでもなく、船をギシギシと縛りこんでいつている。  
タコ勇者は腕を組んで何かを考えているようだ。

チャンスは今しかない。

「にゃ！」

魔法じゃないけど、気合いが入って声が出ちゃった。  
なにこれ、切れたし。

タコの足の太さよりも絶対短いはずの前足で、切れちゃったし。

「そうか！みんな聞いてくれ！」

勇者が騒ぎ始めた。

タコも痛かったようで、攻撃態勢に移ろうとしている。

「このタコは魔法が効かないんだ！」

ええー！今気付いたよ、このタコ勇者。

どんなすごい策を練ってるんだろうとか思ってたら、ものすごく初歩的なところで立ち止まってたし。

「ここは僕の剣技が試されるところだね！」

誰も期待してないから。

そんな勇者にタコからの一撃。

長い足を鞭のようにしならせて、勇者を襲った。

「とう！」

あれ？予想外の展開だし。

てつきりこの一撃で勇者は天に召されるものだと思ってたけど・・・。

相手の攻撃の力を利用して、見事に足を切り落としてた。

「はははははっ」

得意げな勇者をよそに、俺は俺でタコの攻撃をかわして体勢を整えていた。

勇者って南のすっごい魔法が盛んなところ出身だったよね？

なんで剣技の方がすごいわけ。

普通に考えておかしいでしょ。

そんなことを考えているうちに、タコが動きだした。

いったん船から離れようとしているらしい。

その様子にも関わらず、吸盤が船の鉄の部分に張りついちゃって、自力で取れない様子だった。

「なんか・・・かわいい」

ミラが戦意を失った。

「でもタコだよ？」

そして、勇者が吸盤がくっついたままの足を笑いながら切り落とした。

やってることが勇者じゃなかった。

そこは離れるまで待つてあげるのが紳士でしょうに。

ただ、剣技が強いのは認めてあげようと思う。

それにしても、なにか様子がおかしいように感じる。

このタコ、もしかして・・・。

### 35・なにこれ、タコ勇者 その2（後書き）

日本には、湖にタコがいるというところがあります。  
それは浜名湖という海につながっている湖なのです。  
いやぁ、毎度のごとく勉強不足でしたw

### 36・なにこれ、タコ勇者 その3

どういうわけか、タコはタコ自身の身を守る以外で、攻撃をしてこなかった。

「ミラ、この進路の先に何かあるんじゃない？」

思ったことをミラに伝える。

「例えば？」

「なんかすっごい怪獣とか」

「タコも十分怪獣だけどね」

「獣じゃないじゃん？」

「口口も十分怪獣だと思うわよ？」

「あれえそれは力チンとくるなあ」

「んー？なにかまちがった？」

「俺からしたら妖精だって十分怪獣だよ」

「そういうこと言っちゃうんだあ」

なにこれ、ケンカになったし。

「君たち！今がチャンスだ！」

君たちって俺たちのこと？

調子に乗ってんじゃねえぞタコ勇者が。

今はそれ所じゃねえんだよ！

「にゃー！」

完全にタコを敵視し、さらに俺たちのことかなんにも見ていない勇者に、俺は電撃を食らわせた。

俺から攻撃を受けるなんて微塵も思っていなかった勇者は、あっけなく電撃で気絶してしまった。

「うるさいのが減った」

「勇者ダサイ」

勇者のおかげでなんか仲直りができた。

ありがとう、君は忘れない。名前忘れたけど。

タコは相変わらず船の進路を妨げるように、水中に君臨した。

「タコー、大丈夫だから！」

なんの根拠もない。

何があるのかだって知らない。

でもそう言ってみた。

俺たちはこんなところで足止めをくらってるわけにはいかないんだ。

なぜなら足止めくらって、せつかく戦闘に集中してて醒めてた船酔いが再発したら嫌だもん。

「たのむ！タコー！」

もはや目的は違うけどそんなの関係ねえ。

自分の身が一番可愛いよ、そりゃ。

だって猫だもん。

全然動こうとしないタコにだんだんイライラしてきた。

「ほら、もういいってばそういうの。空気読んで」



意味わかんないって顔してる。顔とかよくわかんないけど。  
しょうがないなあ。

「どけえ！」

大声で怒鳴った。特大の殺気と一緒に。  
すると、タコは心配そうな雰囲気を漂わせながら、しぶしぶ進路  
を空けてくれた。

「ありがとう」

この湖の先に一体何があるというんだろう。

とんでもないモンスターがいるのか、それともとんでもない悪党  
のアジトがあるのか。

はつきし言っただうでもいいから、早く船から降りたい。

タコ勇者もあんぐらいの電撃でいつまで寝てるんだ。早く起きろ  
し。

### 36・なにこれ、タコ勇者 その3（後書き）

タコとタコ勇者がごちゃごちゃになって読みにくいですね。ごめんなさい。

あー、この後どんな恐怖が待ってることにしようか悩みますw

### 37 - なにこれ、エンドレスバトル？ 猫編

港が見えた。

何の変哲もない港だ。

ただ、一つだけおかしいことがある。

「人がいないね」

ミラの言葉にみんな静かに頷いた。

なにこれ、すっからかん。

虚無にさらされた町は、それなのにどこか生活感が残ってる。

ゆっくりと歩く。町の中に入れば入るほど、俺はその変化に気がついた。

「この痕って・・・」

つぶやき、視線の先にあるものは、なにかの爪跡だった。

建物の外壁がえぐられてる。

「ドラゴンのようなね」

どうやら勇者も起きて追いついてきたようだ。いらないのに。

大小の傷跡が町の中心に刻まれていた。

はつきり言う、来るんじゃないかった。

なんでタコが止めてたかわかったし。

ほら、もういいしょ。タネもわかったんだし、帰ろう？

「これはどうにかして解決しないと」

勇者黙れ。

「くくくくく・・・」

建物の上に黒い影がある。薄気味悪い笑い声は確実にあいつからだ。

「また懲りもせずやってきたか。使えないタコだなあ」

タコの知り合い？

「お前の仕業か?!」

勇者が声を荒げる。

「そうだ・・・と言ったら?」

「ホーリーフィールド!」

容赦のない勇者の一撃が飛び出した。  
珍しくかつこつけている様子はない。  
しかし、先制弾は簡単にかわされてしまった。

「ねえ、もしかしてココってあんたの・・・」

ミラの言葉の先は言われなくてもわかった。  
故郷ってことでしょ、勇者の。  
もう誰もいないじゃん。

「怖いねえ、くくくくく」

まだ敵が一人とは限らない。  
盗賊の類である可能性もある。

「しょうがない、いでよ！ビッグキャット！」

何かのカードを掲げたと思ったら、俺たちの目の前に5匹のモン  
スターが降り立った。

しかも俺と同類。

身体は俺の10倍はあるかも。

「これは召喚魔法？！しかも事前の仕込みありって・・・やばくない？」

もしかして、まさかのエンドレスバトル突入ですか？

うん、無理。

ほら、まだ間に合うから帰ろうよ。

「ホーリークロス！」

地面から光の槍が飛び出し、すべてのでかい猫に突き刺さった。  
そして追い討ちで光の矢が猫に刺さった。

呪文の名前どおり、まるで十字架のような魔法。

今までの勇者とは到底思えない。容赦のなさも半端ない。

もしかして、全部勇者がやってくれるんじゃない？

### 38 - なにこれ、エンドレスバトル？ 豚編

カードに何が書かれているのかはわかんない。

ただ、頭さえも覆い隠しているフード付きのローブを着ている男はくくくと笑ってモンスターを召喚した。

「次は・・・豚の巨人？」

「オークよ」

知らないよ固有名詞とか。

なんとか隙を見つけて、召喚している男を叩けば問題ないはずなんだけど。

いくらなんでも数が多すぎ。

ぱっと見ただけで20はいるじゃん。

「ホーリースラッシュ！」

勇者は剣に光の魔法を掛けて、得意の剣技で切り裂いていく。

強い。その一言だ。今までの勇者が嘘のようだ。

でも動きが良すぎて逆にきもい。

いや、元々きもいから更に磨きがかかってる。

「何が目的なんだ？！」

男にむけて叫ぶ。

口元だけが見える男は、にやにや笑いながら何も答えなかった。

俺が思うに、実は大した目的とかないんだと思う。

見た目が下品だし、どう見ても盗賊に堕ちた魔導士でしょ。

南の国は魔法の盛んな国って言ってたし、どうせ落ちこぼれたよ。

「町の人たちはどうした?!」

「ぎゃーぎゃーうるさい男だな」

「どうしたと聞いている!」

ぶんつと振るった剣からは斬撃が光を帯びてオークを貫通する。

そして一直線に魔導士の元へ、しかし魔導士に届く直前で掻き消されてしまう。

落ちこぼれでもなかなかのものだ。

「マジックキャンセラー?」

「なにそれ?」

ミラが難しそうな単語を呟いた。

「その魔法と反対の魔法を使って相殺する技術のことよ」

「へえ」

難しそうだね。よくわかんないし。

でもこれができたら便利そうだね。

「光と闇は本来同等の力を秘めてるの。だからこそ、光が2で闇が1の魔法がぶつかった時、光が4で闇が2に膨れ上がる。つまりこの例で言う2倍のダメージになるの。逆に闇が2だったら光が4になる。そういう関係なのよ。だから特に光と闇の魔法を相殺するのはすごく繊細で難しい技術なの。ちなみに結界魔法とはまた別の技術よ」

ミラの魔法講座でしたー。

なんとなくわかったけど・・・。

どうやって同等の魔法、魔力って見極めるのさ。

俺が思案投首していると、にやにやしていた男が口を開いた。

「くくく、なかなかやる。町の人だったな・・・もちろん男は労働女、子供は・・・ひひひ」

「下衆がつ！」

盗賊なんてろくなもんじゃない。だって賊だもんね。

欲望に忠実なものいいけど、俺みたいに理性を持って行動しないとダメだよ。

猫に言われたかねえと思うけどな。

オークの力はなかなかのもので、攻撃を避けるたびに背後の壁や地面にヒビが入る。

俺に攻撃が当たったら、きつとぐちゃぐちゃにされちゃうんだろ  
うなあ。

「にゃ！」

もちろんそうならないように、先制攻撃を意識する。

以前戦った巨人の方が5倍は強かったからね。今の俺には余裕だ  
ぜ。

ミラの補助もあるしね。

「くたばれ豚野郎」

決め台詞を吐き捨てて、それと同時にオークを全滅させた。

息もつかずに男に攻撃をと思ったが、すでに次のカードを掲げて  
いた。

うざい。

このままだとこっちの体力が先に尽きちゃうよ。



さすがの勇者も息があがってきている。  
どうにか策を考えないと。

### 38 - なにこれ、エンドレスバトル？ 豚編（後書き）

やたら長い魔法の説明をしちゃいましたね。  
わかりにくかったら書き直しますw

### 39・なにこれ、エンドレスバトル？ 鳥編

空中戦は嫌いだ。

俺自身が飛べないし、魔法も当たりにくいから。つてか降りてこいし。

「君たちはどこまで保つかな」

それなりに高度な魔法使いつてのは認めるから、一発殴らせろ。不細工なトンビに似た鳥の魔物たちがギャーギャーうるさい中、俺は男に向かって魔法をぶつける。別に驚きはしなかったが、なんとも下衆な方法で男は防御をとった。

飛んでる鳥が魔法に体当たりしたのだ。

「口口君！ちよつと時間を稼いでくれないか？」

勇者が俺を呼ぶ。どうやら一際大きな魔法を使おうとしている様子だ。

なんで俺が勇者の言いなりにならなきゃいけないわけ？

「無理」

二文字で一蹴。勝手にがんばれ。

あくまでも勇者には厳しくするよ。

飛んでる鳥には追尾性のある魔法が有効だ。

あいつらは大して防御に優れていない。

「にゃ！」

ここは港。水はいくらでもある。

俺は自分の体の周りに水の矢をたくさん作って、自動追尾で鳥たちを一斉攻撃した。

ばっさばっさと落ちていく。

しかし今まで通り、男がカードを掲げるだけで鳥たちがぞわぞわ現れる。

よし、俺もちょっと難しい魔法を使ってみよう。

水を額の前に濃縮させて一点に集める。直径1センチ程度の水の玉はだんだん鋭く細く形を変えていく。前に巨人戦でやったウォーターカッターの応用だ。あの時は巨大な魔法だったから雑にコントロールしても大丈夫だったが、今回はめっちゃ小さく纏めるからものすごい精度のコントロールが必要なのだ。

「ん〜にや!!」

糸のように細く鋭いウォーターカッターが男にむかっていく。また掻き消されるだろうか。

光の速さレベルで放ったカッターに、男は瞬時に身を翻したが一瞬遅かった。

男の右手と持っていたカードを貫通したのだ。

「つく!!!」

カードが撃ち抜かれたことで、そこら中を飛び回っていた鳥たちが一瞬にして消えた。

悔しそうで悲痛の表情を浮かべた男は、左手でカードを取り出した。

しかし、次の瞬間だった。

俺がカッターを使ってから2秒程度しかたっていない。

本当に瞬間瞬間の出来事だった。

「ヘブンスレイン！！」

勇者が叫んだ。

同時に光の雨が降り始めた。

男がカードで召喚した次の魔物はワイバーンだった。しかし、その姿を現したのはコンマ3秒程度。全てが光の雨によって消されてしまった。

「うぐおお」

男にも例外なく雨が当たる。

「これは・・・天空魔方陣？」

ミラがつぶやく。

はい、できました。また難しそうな名前の魔法。

「ほら口口、空を見て！」

言われて見上げると、巨大な光の魔方陣が空を覆っていた。

これが天空魔方陣？

なにこれ、でかすぎるんですけど。

「はあはあ」

勇者の息がマックスにあがってる。しかも鳥に攻撃されて傷だらけ。

うん、ごめんな。俺のせいだよな。

「く・・・くそう！お、お、おれが負けるなんて・・・」

どうやら生きていた男が四つん這いになって、立てないでいた。

「盗賊のアジトを教えろ」

勇者が近付き、男の胸ぐらをつかんだ。

「ははは、誰が言つかよ・・・ぐふっ」

うわぁ、痛そう。今、全力で殴られたよ。

なんか、その後ボッコボコに殴られた男はようやくアジトの場所を吐いた。もはや顔の原型とか残ってなかったし。

勇者こえー。

ってかアジト行くの？

嫌とか言っても大丈夫な空気？・・・じゃないですよね。

うん、わかってるよ。ほら、お宝とかもらえるかもしれないしね。前向きにいいこうね。

「ね」

なんとなくそれだけつぶやいて歩き出した。

## 40・なにこれ、どろどろ洞窟

俺って、あんまり常識とか知らないからなんとも言えないんだけど。

アジトって大体洞窟で合ってる？

って聞けない。

なんか恥ずかしくて聞けない。

でも目の前にあるのは紛れもなく洞窟で、紛れもなく盗賊のアジトなんだって。

「ベタだよね」

その言葉を待ってました！さすがはミラ。

洞窟の中は明かりが付いてて、どこにトラップがあるかわからない奇妙な感じだ。

っていうかさ、ちょっと地面がぬちゃぬちゃしてるんですけど。

水分多すぎるよコレ。

崩れちゃったりとかしないよね。

あ、そういえば盗賊相手なんだっけ。

これはまさか……。

「お宝はさ……」

言いかけた瞬間に俺の頭上を矢が通り抜けた。

もうちょつと体が大きかったら刺さってたよね。

良かった猫で。

「今のは足を狙った矢だね。侵入者は逃がさないらしい」

勇者の解説に、俺の場合は頭に刺さるよって言いたかったけどめんどいからやめた。

今のは一体何が原因でトラップが発動されたのかわかんないし。どろどろな洞窟は、殺伐としてて先が長そう。

「ってか誰もいないじゃん」

進めども進めども人の気配がしない。

「騙されたんじゃない？」

勇者の表情は変わらない。ここだという確信があるみたいに頑なな表情。

広場に出た。

あれ、なんかこの部屋気持ち悪いんだけど。

「壁が・・・動いてない？」

ミラも気付いているようだ。  
なにこれ、酔いそう。

「これはモンスターだ！」

「土のモンスター？」

返答ないけどきつとそうなんだね。

土っていうか泥？

物理攻撃とか絶対効かなさそうで笑える。

なんか最近戦ってばかりじゃない？

俺はお前らと違って体ちっちゃいんだから、疲れるんですけど。



「勇者！がんばれ！」

それだけ言つて、俺は地面にぺとりとお尻をつけた。お尻が泥まみれになる。

剣を抜く勇者。

いや、絶対に剣は通用しないでしょ。

勇者は剣を両手で逆手に持ち、おもいつきり地面に突き刺した。そしてミラが呪文を唱える。

「エアリアル！」

泥まみれのお尻が少しだけ浮く。

「なにこれ」

「サンダーボルト！」

勇者の魔法が地面から壁へとビリビリ電撃が伝う。

土のモンスターに電気は効かないのがセオリーって以前ミラに教わったことがあるけど。

「泥だから水分をたくさん含んでるでしょ？だから電気の魔法が有効なのよ」

ということらしい。

っていうか勇者とミラが無言で分かり合ってる感じがちよつとむかつく。

「体浮かす魔法は難しいんじゃないの？」

「ちよつとだけの浮遊なら集団でも簡単なのよ。闘技場での魔法は自在に飛び回る魔法だから高難易度だったわけよ」

そういうものなのか。  
ならお尻が汚れる前にかけてもらいたかったな。

#### 40・なにこれ、どろどろ洞窟（後書き）

ずいぶんと期間があいてしまいました。

忙しいのでかんべんです。

少しずつですが、ちゃんと連載は続けるのでよろしくお願いします  
！

#### 41 - なにこれ、盗賊のお尻

こんなモンスターのいる洞窟に、人とかいるもんなのかな。  
どろどろの洞窟は続く。  
ねちよねちよと足音が気持ち悪い。  
また開けた場所に出た。

「ここは・・・」

集合住宅的な香り。  
人の気配が確実にある。

「どうやらお客人のようだな」

現れたのはボロボロの服を着た人間だった。

「お前が盗賊の頭か？」

勇者の質問にボロ人間のおっさんは頷いた。

「そう、わしがルントネ盗賊団の頭だ」

るんとね？とんねる？

「町人はどうした？」

「そうか、あの魔術師は敗れたのか。ふん、使えない下衆だったか」

今度は質問に答えない。

あ、おっさんのズボン破れてるじゃん。

「どうしたと聞いている！」

勇者の荒々しい声が洞窟内に反響した。

おっさんのズボン、後ろから見たらお尻丸出しだし。  
なにこれ、ぽろり。

「そう、うるさい声で喚くな。別に殺してはおらん。ちょっとばかり働いてもらってるだけだ」

そう言って洞窟の奥を指差した。

っていうかさつきから俺の存在が完全に無視されてるよね。  
歩き回ってるんだけど、見向きもしてもらえないもん。

「トンネルを掘らせているだけだ。逃げないように魔物で道をふさがせてもらったがな」

さつきの泥のモンスターのこもらしい。

奥に行っちゃおうかな。

「このトンネルの先には王都につながる。つまり交通の要になるんだよ」

でも奥の方なんか不気味だな。

やっぱりやめよっかな。

「そうしたら交通量をとるだけで、なにもしないで生活できるじゃねえか。これでわしも盗賊家業とおさらばってわけだ」

やっぱ行ってみよう。

頭が良いらしいおっさんの話つまんないしね。  
俺が奥に歩き出すと、ミラがついてきた。

「ちょっと、行っちゃっていいの？」

「え、いいでしょ？だって勇者がなんとかしてくれるし」

ミラを頭に乗せ、奥に突き進むと、土を掘る音や人の疲れた息遣いが聞こえてきた。

「おら！働けカスがつ！」

働いてる人と管理してる人がある。  
これが奴隷ってやつ？初めて見たわ。

「ん？なんだこの猫は」

管理をしてる人が、俺を見るなり近付いてきた。  
気持ち悪いから倒そうと思っただけ。

「いい？」

「うん」

ミラに確認をとって、管理人に飛びついた。

「にゃ」

顔面に小さな火の玉をぶつける。

「あああちちちち！！」

なんて言ってるのかもわかんない。

その声に、他の管理人たちが集まってきた。管理人っていうかただの盗賊の下っ端だよね。

「ちようどいい練習台かも」

さっき鳥相手にやってみた自動追尾の水の矢の精度をあげるチャンスだ。

ここどろどろで水分豊富だしね。

「にゃ！」

水の矢が盗賊たちを襲い、十秒もたたないうちに沈黙になった。

それを見た労働者どもがざわつきはじめる。

これって、めんどいパターンのやつ？

## 42・なにこれ、幻のお尻 その1

「おい、今あの猫・・・」

魔法を使う猫って騒がれるのか・・・。  
すごくめんどいよ。

「・・・の上にいる妖精が魔法でやっつけたな！」

はい、でしたー。

こういうパターン！

どうせ俺はただの猫ですよ。

どうせめんどいと言いつつ期待してましたよ。

「すげーぜ。妖精すげーぜ」

もう知らない。戻ろう。

ざわつく奴隷たちをシカトし、俺は来た道に戻った。  
あれ？

「くっ・・・」

あれは！なんという光景！

「ふふふ、そんなもんかな？」

勇者がどろどろの地面に膝をついている。

勇者の目の前に仁王立ちする盗賊の頭のおっさん。



「もうちょっと楽しめると思ったのじゃが・・・こっちはまだ切り札もあるっていうのに」

相変わらずお尻丸出しで言われてもなんにもかっこよくない。

っていうかお尻丸出しに負ける勇者とかある意味伝説に名を刻んだでしょ。

「あれかな。さっきの戦いで消耗してたとかかな」

ミラのフォローが優しすぎる。

消耗してようが、元気だろうが、お尻丸出しに負けちゃプライドとかスタボロでしょ。

「奥の方が騒がしいな。奴隷どもはちゃんと働いてるんじゃない？」

俺の方を向くおっさん。

「ん？猫？」

あれ？今まで俺の存在って本当に気付かれてなかったのかな？  
見てみぬフリとかじゃなくて？  
そっか。

「にゃ！」

水の矢を一閃。

「おっと」

確かにおっさんを通した。俺の肉眼で見たんだから間違いない。

しかしそこに立っているおっさんはどこにも傷がなく、不思議そうにしている。

「おいおいあぶねえな。とんだ猫がいたもんだな」

なにこれ、よゆうなのム力つく。

確かに当たった。

でも無傷。

じゃあ当たってない？

「そうか。俺がその飼い主を傷つけたことを怒ってるんだな」

ちげーし。

俺が勇者の飼い猫とか冗談はやめてください。

冗談はお尻だけにしてください。

「にゃ！」

今度はおっさんを八方から水の矢で撃つ。

避ける場所は上しかない。

しかしおっさんは避けなかった。

「だから、あぶねえだろうがよ」

なんで無傷なの？

あれ、これって結構強い人じゃん。

「この猫・・・使えるな」

だろうな。そう、俺は使えるんだよ。

ただ、今はそんなことはどうでもいい。

このおっさんがどういう魔法で攻撃を避けてるのかを考えないと。

「ミラージュ・・・かな」

ボソッと呟くミラを見る。

なにそれ？って顔をする。

「幻影っていうか、虚像っていうか・・・なんていうんだろ」

がんばって説明しようとしてくれてありがとう。

わかったよ・・・たぶん。

## 42 - なにこれ、幻のお尻 その1 (後書き)

お尻をゴリ押しでごめんなさい。

でも、よく考えてみましょう。

お尻丸出しの人とジャンケンして負けた時の悔しさを。

#### 43・なにこれ、幻のお尻 その2

ミラージュってあれだよな。

ミラのニックネームとかでしょ。ミラージュって呼ばれたいんですよ。

おっさんに聞こえないくらいの声で俺はミラに言う。

「ミラの新しいニック」

「つまり、実物はそこにいないってこと」

「ですよな」

そう！まさにそれを言いたかった。

「それが高速で動くことによる残像の可能性も・・・ん？私のニック？」

「え？ちげえし。ミラに肉球ないのがかわいそうだから新しいの買えばいいのって思ったただだよ」

もはや無反応だった。その方が俺も助かる。

それが幻なのか、実物なのかかわかれば勝てるってことだよな。

「なんか危険な猫じゃな。上にいる妖精も怪しいしな」

気付くとおっさんの気配は俺の真後ろにあった。

咄嗟に前に飛び出す。

刹那のタイミングで、剣が地面にバシャーンと振り落とされた。

「あぶなっ！」

俺は空中で姿勢を反転させ、おっさんに向き直る。  
一つだけ作戦がある。

虚像だとか残像だとかよくわかんないけど、幻かどうかを判断するのなんて簡単だ。

それは匂い！

って本当はかつこよく言いたいんだけど、泥の地面でほとんど匂いの区別ができない。

そんなことで諦める俺じゃないけど。

おっさんにくっつけばいいじゃん。飛び掛って、掴めれば実物ですよ。

「ちょこまかと動くな。しかも今あぶなって言っただじゃろ。本格的にやばい猫じゃな」

着地と同時に視覚で見えてるおっさんに思いつき飛び掛る。

おっさんは不動。

もらった！

「がはははは」

盛大に笑われてしまった。

俺はおっさんに突っ込んだつもりだったのに、それを見事にすり抜けてドロドロの地面にダイブしてしまったのだ。

もうぐちゃぐちゃ。

三毛の白い部分が茶色になって二毛になってるし。

「甘い甘い。考えが浅はかじゃ」

いよいよもってこのおっさんが憎らしくなってきた。

おっさんは相変わらず一瞬で気配が移動する。

「ミラ・・・これって」

「うん、テレポーテーションとミラーージュのユニゾンマジックかも」

ゆ、ゆに？・・・つまり合わせ技ってことでしょ。

わかんないから無駄にかっこよく言うのやめてもらいたい。

数メートルを一瞬で移動する魔法をテレポーテーションというらしい。以前ミラに教えてもらったことがある。自分のいた位置にミラーージュで幻を置き、自分は別の場所に移動するというトリックかもしれない。

「テレポの弱点って・・・」

「連続使用が難しいことかな」

数秒間隔でしか使えない魔法ってことか。

でもこのおっさん、無詠唱で二つの魔法を一瞬でやるなんて相当なつわものだわ。

さっきの感じだと、間隔は十秒以内。

つまりもつと狭い間隔で連続攻撃をしかければいいんだ！

「よし。猫の額ひたいくらい狭い間隔で攻撃するね！」

やべっ！思わず博識なところが出た！

「う、うん。ちょっと使い方間違ってるけど」

#### 43 - なにこれ、幻のお尻 その2 (後書き)

猫の額・・・場所の狭さを示す言葉ですね。時間とかに適用されるかどうかは知りませんが、一般的に言わないと思いますw  
なんか今回ボケが雑かも。  
あ、いつものことでした！



#### 44 - なにこれ、幻のお尻 その3

第一に気をつけることは間合い。

猫の俺の間合いとおっさんの間合いでは差がありすぎる。

「にゃ！」

水の矢を四方から放つ。

おっさんは躊躇わずにテレポートで移動。

ここまでは計算通り。

でも、次を予想していなかった。

・・・そりゃ、どこにテレポートするかなんて予想できないですよ。

間髪入れずに攻撃しようと思ったんだけど・・・。

俺の間合いの外、おっさんの間合いの中にテレポートとかずるくない？

咄嗟に振り下ろされる剣を避け、体勢を整える。

「どうじゃ？攻撃が当たらなくてイライラしてきたかの？」

そろそろあの口調がうざくなってきたのは俺だけか？

なんでお尻丸出しの奴に小バカにされなきゃならないの。

しかも俺の白い毛を汚しやがって・・・。

「ミラ、ひとつ提案があるんだけど」

もうこうなったらぶっ殺す。

おっさんが、なにこれ勝てない！って表情になるまで叩きのめすわ。

「え・・・それは・・・できないことはないけどさ」

ミラの困惑した表情なんかもはや目に付かない。  
俺は勇者のところに行き、顔をひっかいた。

「いたっ！！な、なにをするんだい！？」

「ミラの指示に従えタコ勇者」

怒りが頂点に達した俺は、もう腹をくくる。

「おいおいなんじゃ、逃げちまうのかい？」

おっさんはやれやれといった表情。

へっ、今に見てるよ尻出しオヤジめ。

「にゃ！」

小さな水の矢を自分の周り数百と作る。

そして十本ずつおっさんに放つ。

ことあるごとに、レポートで逃げられる。

わかつているのに、ミラージで相手がダメージを受けている錯覚に陥る。

その油断から瞬時に間合いに入られて攻撃を受けそうになる。

これがいけなかったんだよね。

当たってないと最初から思っていれば、間髪いれずに攻撃を仕掛けられる。

「にゃ！」

「くっ！」

連続攻撃を仕掛けてから、三回目のテレポートがようやく失敗に終わった。

だけど、小さく威力の弱い水の矢では大したダメージは負わせることができない。

「やるなあ。じゃがこんな子供騙し程度の威力じゃワシには勝てないぞ」

知つとるわ。

もちろんこれは時間稼ぎ。さすがの天才な俺だって、通常以上の威力を維持した状態の矢なんて、大量に作れないもん。

「おっさん！お尻出てますよ！」

「ファッションじゃボケ猫！」

ファッションって言わねえよ！

そついうの変態っていうんだよ！

「にゃ！！」

赤い光が洞窟の空間を包む。

「な、なんじゃ！？」

同時に爆発する。

洞窟の中で爆発とか自殺行為だよね。

まあ、もちろん俺は死ぬつもりなんてさらさらないんだけど。

「ぐっ・・・！」

大量の煙と共にバサツと人が倒れる音がする。

「どういう神経してんじゃ……。洞窟内で爆発じゃと……。？奴隷共も巻き込む気が……。」

っていかおっさんのお尻の方がどういう神経してんだよって言いたい。

「残念でしたー。ミラは結界魔法に関してはプロフェッショナルだからね。生憎だけど爆発したのはこの空間だけだよおっさん」

つまり、この洞窟内の開けた空間にだけ結界を張り、結界内でのみ爆発が起こったということ。結界の外には振動を含めてなんの影響もないわけだ。

作戦通り！

さすが俺だよ。

「どうやって……。爆発を起こした……。？」

平伏すおっさんのお尻は相変わらず丸出しだった。

「え、別に超高温の小さな火を泥に落としただけだよ」

はい、得意の水蒸気爆発でしたー。

死なない程度には手加減してるんだけどね。

「おっさん、俺に主人なんていないんだぜ。そこを見誤ったことがおっさんの敗因だ」

やべえ！今のセリフ超かつこよかった！

ちなみに、ミラたちには避難してもらったから大丈夫。  
ちよつと無理やりな勝利だけど・・・まあ、いいよね。

#### 44 - なにこれ、幻のお尻 その3 (後書き)

力技の勝利。空間を爆発しちゃったらテレポートやらミラーージュや  
ら関係ないんで。

・・・え？もつとスマートな作戦が他にもあるって？

・・・お、大雑把な性格な猫だし、いいですね？

#### 45 - なにこれ、竜笛

力技すぎて美しさに欠ける・・・。

そんなことにこだわるのは勇者だけで十分だ。

俺は勝てればいいし。

「こ・・・こうなったら・・・」

お尻がなにか言ってる。

「これが何か・・・わかるな？」

ボロボロのズボンのポケットから出てきたのは・・・笛？

「知らね」

「・・・ドラゴンホーンじゃ」

「ほう・・・それがドラゴンホーンか」

ど、ドラゴンホーンってなんだ？

ちよつと見え張って知ってる風な感じにしちゃったし。

最初の返答通り知らないことにしておけば良かった。

「これを吹けば・・・ドラゴンが来るってわけだな」

「あ、ああ。そうだろうな」

「ふふ・・・焦っているようじゃな。ドラゴンといえばこの世界そのものと言われる。猫ごときが敵う相手じゃない」

・・・バレてないよね？

俺が無知なことがバレるかどうかが一番焦ったよ。

で、ドラゴン？あの黒いやつ？

あ、ミラたちはもう外に出てるかな。

俺も行かないと置いてけぼりになっちゃう。

「じゃあな。おっさん、元気だな」

「なんだと？・・・ドラゴンを呼ぶと威しているのにその反応とは・・・」

そう言って、おっさんはうつ伏せのままで笛を吹いた。

ピーーーーーーーーー！！！！！！

高音が耳障りな音だ。

ドラゴンとか呼ばれてもいいし。

勇者があの状態の今、もはやここに用はないもん。

さっさとどっか行こう。

洞窟を出ると、ミラと死にぞこないの勇者が座り込んでいた。

「あ、ロロ！やったねっ！」

ミラの言葉にVサインを作ろうとするが失敗した。

俺の手ってそんなに器用じゃなかったのか・・・。

「なんかさ、ドラゴンが来るらしいから逃げよう？」

「なんだって！？くっ、この町を守らないと・・・！」

うそっ！勇者が出しゃばっただと！？

これだけボロボロなら出しゃばる元気もないと思ってたのに。

「ドラゴンだよ？ブラックドラゴンの時忘れたわけじゃないでしょ。」



俺ら危なかったじゃん」

「そんなことは・・・関係ない！僕は守りたいものを守るんだ！」

え？なに今のセリフ。ツッコミ待ちなの？なんなの？

なにこれ、この展開。

逃げるっていう選択肢が消えるパターンのやつじゃん！

「□□、守ろう？」

ああ、ミラ。まさかお前が勇者側につくとは思わなかったよ。

まあ、そっか。ミラは自分の森も侵略された経験を持つてるからね・・・。

「じゃあ・・・戦うよ」

渋々と言う俺に笑顔を向けるミラと勇者。

むかつく・・・勇者の笑顔。

なんだかんだ言っつていつも君は正義を貫くね・・・って言わんばかりの顔。

「なんだかん」

「言っつなしっ！」

本当に言いそうになったから思わずつつこんじゃったし。

そつえば街中にドラゴンの爪痕があったつけ。

ああ、どんなでっかいドラゴンが来るんだろう。

・・・やだなあ。

#### 45・なにこれ、竜笛（後書き）

戦闘続きですね。

戦闘書くの・・・苦手なんですけどね。

#### 46 - なにこれ、小さくて大きな戦い その1

翼のしなる音がする。

大して時間も経たず、ドラゴンはやってきたらしい。

・・・ん？

飛ぶ音は確かにするのに、姿が見えない。

あのおっさんと一緒に幻覚とかの魔法が得意なのかな。

「ほう、久しぶりにワシが呼ばれたと思って来てみたら、ボロボロの男に小さな妖精、ちんけな三毛猫だけか」

なにこれ、俺が一番バカにされてる気がするんだけど。  
っていうかどこから声がしてるのかわかんないし。

「まあよい。早速食事とするか」

食事？俺たちを食べるのか？

どんだけでかいドラゴンなんだよ。

早く姿を現せし。

「口口！あれ見て！」

ミラが指差す方を見ると・・・あれ？

小さな黄色いドラゴンがこっちを見てふんぞり返ってる。

ちっちゃ！

俺よりも少し小さいくらいで、同じ目線だった。

あくまで大きなドラゴンを想像してて、上ばかり見てたわ。

「ちんけなドラゴン」

ぼそっと思つたことが口から出た。

「なん・・・だと？」

怒りましたよねー。怒らせましたよねー。

「猫！お前から食してやろうー！」

黄色いドラゴンは自身の右手を上から下にひっかくように振つた。

ズドン！！！！

一瞬のできごと。

俺の体がふわっと浮き上がるほどの風圧がきて、後ろの方で音がした。

恐る恐る後ろを見ると、巨人の一振りのごとく岩に巨大な爪痕がしつかりと残っている。

なにこれ、死ぬじゃん。

「な、なんで？あんな小さなからどうやってたらあんな大きな斬撃が出るわけ・・・」

「ふふふ、今のは軽い挨拶だ。次は当たると思っていた方がよいぞ」

あんなの喰らったら瞬殺だ。

しかも標的が小さいから、戦いにくい。

思つたけど、俺って自分サイズの敵と戦つたことないじゃん。

いつも自分よりも大きな敵が相手だったし。

「・・・ミラあ、助けて」

ミラを見るも、恐怖に青ざめた顔を見て勝機が薄いことを悟った。  
とりあえず、身体能力を最大限まで高める。

次に牽制程度に光の矢を放つ。

それに対してドラゴンはゆっくりと右手を上げ、矢をいとも簡単に打ち消した。

つ、強すぎ。

「猫！ワシは遊びが嫌いだ。さっさと終わらせよう」

これは文字通り終わるパターン？

くそっ！

集中しろ！

相手には必ず弱点があるはず。

とにかく見極めて戦うしかない。

あの見えない巨大な斬撃も冷静になればかまいたちだってわかる。  
かまいたちなら空気の流れを肌で感じれば避けれるはず。

本当の戦いはこれからだ！

## 47 - なにこれ、小さくて大きな戦い その2

俺は天才だ。

猫なのに言葉を喋れる。理解できる。

魔法が使える。

身体能力が高い。

頭が切れる。

かつこいい。

そうだ、ドラゴンに負ける要素なんてひとつもないじゃん。

異常なまでのプレッシャーを与えてくるけど、威圧感で勝負がつくわけじゃない。

「にゃ！」

今まで、俺は世界を象ってる力『エレメント』と呼ばれる6つの力を使ってきた。

火、水、風、土、光、闇。

ミラに教わったこれって、応用できるんじゃないの？

なんとなくそう思っ、深く思考する。

だって、世界はそれだけでできてるわけじゃない。

身体能力を上げる魔法とかもあるわけだし、テレポートみたいな意味わかんないものもある。

もっと細かく分類されてるはずなんだ。

ドラゴンの攻撃はかまいたち。

これは風を操る魔法。

風の流れは肌で感じれば避けられる。

「にゃ！にゃ！にゃ！...！」

頭のいい人は頭の中で数式を作るんだって。  
でも元々魔法は人間の想像から創造されるもの。  
まあ、猫なんだけどさ。

「にゃー！ー！ー！ー！ー！」

「うるさいぞ、猫」

ドラゴンにつっこまれた。  
力が入って毛が逆立つ。  
まっすぐにドラゴンを見つめ、俺はもう一声あげた。

「にゃー！ー！ー！ー！」

瞬間、俺を襲うかまいたちを切り裂き、ひとつの弾丸がドラゴン  
目掛けて飛んでいく。  
そして、俺の頭にちよつとした振動が走る。  
弾丸として飛んだのは俺。  
レポートとか空を飛ぶ魔法とか色々と混ぜてみた。  
体を硬くして相手に捨て身タックル。

「ぐふっ！」

ドラゴンは確かに苦悶の表情を浮かべた。  
ってことは効いた？

「ふんっ、猫ごときの一撃・・・」

言葉が続かない。  
効いてんじゃない。我慢すんなし。  
着地と同時に俺は距離を取った。

自分と同じくらいの大きさのモノを正面から受けたらそりや痛い  
でしょ。」

「はぁ・・・はぁ・・・」

今の集中しすぎて息あがったし。  
やべっ、技名忘れてた！  
あとで今の技名考えとこう。

「おのれ！」

ドラゴンが右腕を振り下ろす。  
同時に出たのはかまいたちではなく、巨大なドラゴンの右手だっ  
た。

やばっ、潰される！！

どごぉおおおん！！！！

真っ暗。

寸でのところで地面のくぼみに身を隠せた。  
マジであぶねーし。

「ワシの右手の味はどうじゃ？」

食らってねーよ。  
なに得意げになってんだ。

「なぁ、ちっこいドラゴン。知ってるか？」

ドラゴンの右手を魔法で打ち消し、低い体勢から相手の目を見る。



「ほお・・・運のいいやつめ」

「俺は運がいい」

「なにが言いたい・・・？」

「運がいいからさ・・・俺は絶対に負けねえんだよ！」

言つと同時に走り出し、浮遊してるドラゴンとの距離を詰める。

「ミラ！髭！！」

今までドラゴンのプレッシャーで青ざめていたミラは俺の声を聞いてハッと俺と目を合わせた。

同時に軽く頷き、すぐに魔法をかける。

うつすらと光を帯びて、髭に力が宿る。

ドラゴンは左腕を横薙ぎに振るう。

今度は巨大な左手が俺を襲った。

これは避ける場所がない・・・！

ドン！！！！

衝撃は俺まで伝わらなかった。

「ロロ君、いきたまえ！」

勇者に助けられたとか一生の恥だわ。  
ボロボロのくせに。

「くっ、止まるのじゃ！！！！」

ドラゴンは俺に向かって咆哮をあげる。

ものすごい圧力が俺を押し返すが、足を止めるわけにはいかない。

「くらえっ！ー！！」

そのままドラゴンに飛びつき、横をすり抜けていく。

「なっ・・・」

静かにドラゴンの首が飛んだ。

「勝った・・・よね？」

そして、ドラゴンのちんけな体は手のひらから砂が零れていくようにして跡形もなく消え去っていった。

まるでそれが幻であつたかのように・・・。

#### 48 - なにこれ、黄色の竜

やり尽くした。

これ以上のことを今できる気がしない。  
それくらいやり尽くした。

「やりおるわ」

現実には甘くないらしい。

俺が無敵でも、俺がかつこよくても、俺を上回る存在はいるらしい。

「ワシに本当の力を出させるとはな」

瞬間、現れたのは巨人並みに大きな黄色いドラゴンだった。  
なにこれ、ゲームオーバー？

「認めよう」

もう、ミラも勇者も戦意を完全に喪失している。

「猫よ、お主こそ世界を変える力を持っている」

急に何言ってたんだ、このドラゴン。  
殺すなら早く殺してくれよ。

「お主にワシの力を授けよう」

言うなりドラゴンの体が金色に光だした。

まぶしっ!?

「魔王を倒せ。そして世界を変革せよ」

言い残してドラゴンの姿はなくなった。

なんだよ、全然意味わかんねーし。

あっさり消えるなし。

「ミラ、ついでに勇者、だいじょーぶか？」

動けないほど魔力を使ってくれたこいつらにちよつと感謝してたりする。

「うん、なんかあの光を浴びたら力が出てきた感じがする」

ミラは大丈夫そうだ。

ならよしっ。

「僕は・・・」

「じゃあ行くか」

勇者の言葉は途中で遮り、俺は港の方へと歩いた。

港には商人の娘・・・名前なんだっけ？

「リュカだつてば」

ああ、そうだ、リュカが待っていた。

どうやら奴隷たち、つまりここの町の人たちも解放されたみたいで、来た時とは全然違う町になっていた。

「これからどうするの?」

リュカの問いかけに勇者が答えた。

「僕たちは予定通り王都へむかう」

らしいですよ。

あのドラゴンの光を浴びて何が変わったのかとかよくわかんないけど、まあ生きてたからいいや。

ある意味奇跡だよな。

「それじゃあ私はこの町の普及に手を貸すのでここでお別れです」

大して関わらなかったけど、なんとなくまた関わってきそうな予感がするわ。

「またね、猫ちゃん。あ、ロロか。元気だね」

わざと言い直したんだったら今ここでぶつとばす。

「ほら、行くわよロロ」

ぶつとばす準備万端だったのにミラに耳を引っ張られて町を離れた。

王都とか絶対俺にとってアウエーじゃなか。

「あれ、勇者の故郷だったんじゃないの?こんなあっさり出てきちゃってよかったの?」

俺も優しいからいちおう心配してやる。

「みんな無事そうだったからね。僕は僕の使命を果たすだけさ」

かっこつけてんじゃねえよ。

結局この町を守ったのも悪者退治したのも俺だろうが。

「王都で王が勇者を待っている」

勇者・・・ねえ。

どっちのこと言ってるのか知らないけど、特に興味ないことに変わりはないかな。

っていうかこっからまた歩きか・・・。

俺にとってそれが一番苦痛だぜ。

#### 49 - なにこれ、門前払い

王都へは意外とすんなり到着した。  
もつと、なんかあれよとも思うし、なんにもなくてよかったとも  
思う。

「ここが、魔法都市ソルビートルさ」

勝手に説明しだす勇者にはもう慣れた。  
っていつか王都なの？魔法都市なの？なんなの？

「南の王都と呼ばれているけどね、なんでだと思う？」

王様がいるからだろ常識的に考えて。  
なんか聞き方がうざいな。

「現国王がいるのは聖都シフォニアだ。この意味がわかるかい？」

「おい勇者」

「なんだい？」

「うざい」

「つまりここは昔の王都なのさ。もちろんここにも王がいる。ここ  
の王は国王の弟で、南の地を任されているのさ」

なんだと！？こいつ、スルースキルを身に付けやがった。

「っというわけで、さっそく城に行ってみよう」

都市というだけあって、ものすごい建物の数だ。  
なんか、魔方陣のような町並みで、その中央に城がある。

「ミラ・・・あいつの話うざい」

「え？なんか言ってた？」

もはやミラの耳には勇者フィルターが内蔵されているのか！？  
スルースキルを超えてる・・・。

「とまれ！」

城の前で門番をしている兵士に止められた。

「なんだい？僕を忘れちゃったのかい？」

「いえ、勇者シエルヴィ様のご帰還はよろしいのですが、お連れに猫が混じっているのは少々問題が・・・」

「彼は口口君だ。彼も勇者なんだよ」

俺も勇者？勇者のくせに変な説明すんなし。

っていうか入れないならこっちから入らんわ。

「俺はいーよ」

「そもいかないだろう。王に事情を説明しなければならぬ」

「ミラがしてくれる」

「えー！？嫌だよ私」

なんかめんどいことになった。

「とにかく、腹話術か何かは知りませんが、妖精ならまだしも、猫を城に入れることはできません！」

なにこれ、マジ差別。うざいから俺もう行くよ。



「あつ、口口君待ちたまえ！」

勇者に止められたけど気にせずに俺は歩き出した。

ミラは空気読んで勇者の方に残るみたいだ。

さて、どこかでヒマでもつぶそう。

大体王様に会うとかめんどすぎるし。

勇者なんて一人で十分だろ。

「あ、あなた様はっ!？」

ん?なんか聞いたことのあるようなないような声……。

「勇者様!!!!」

変な色の髪をした神官っぽい女が俺を指差す。

指差すとかほんとに失礼なやつだなあ。

っていうか誰だし。

「勇者様で間違いないですね!？」

俺に走り寄ってくる。

こんな変人に捕まりたくないから逃げよう。

俺は女とは逆方向へ駆け出した。

足に補助魔法をかけて一気に逃げ切る……はずだった。

「ホルドム！」

なんか魔法唱えやがったぞあいつ。

瞬間、俺の体が全く動かなくなる。

あれ？

なんか手足に光の手錠がついてて動けないし。  
勢い余って顔面から地面に「こんにちは」したじゃねえか。

「勇者様ですよ？絶対そうですね？ただの三毛猫とかじゃないです  
ね？」

こわっ。

「ずっとお探ししておりました」

なにこいつ。

人を縛っておいてなんで勇者扱いしてるの？  
言動とやってることと全然違うし。

もろ猫扱いしてるじゃん。

「私はバツゼルディア王国筆頭魔術師のミフリス。あなたを召喚し  
たものです」

こいつ！？

俺を召喚・・・した？  
した？

こいつだっけ？

やべっ、覚えてねーや。

#### 49 - なにこれ、門前払い（後書き）

第一話に登場したミフリスさんがここにきてようやく登場！  
って作者自身も名前忘れてましたwww

筆頭魔術師は王国が有する魔術師のトップのことです。

きつとすごいんです。

きつと・・・。

## 50・なにこれ、ボケ殺し

あのー、いい加減に体を自由にしてほしいんですけど。  
手足には手錠のように光の輪が絡み付いている。

「勇者様！さあ、魔王を倒しに行きましょう！」

「は？」

「さあ！さあ！さあ！！！」

なにこいつ、強引すぎ。

「行かねーよ！」

「えっ！？」

思わず声を出してしまう。

そういえばこいつと初めて会った時には喋れなかったんだよな。

「しゃ、しゃべった！？喋る猫・・・やっぱりあなたは本物の勇者  
！」

すごい思考回路ですね、尊敬します。

「そういうわけで西から回って北のアンスピカ山脈にむかいましたよ  
う」

どういうわけだし。

っていうかあの寒い雪山になんか行きたくねえよ。

そもそも魔王とか桁違いの強さだから。

絶対に勝てるわけない。

「行きません。ミルミルさん」

敬語で反論。

なんとなく……。

「いいえ、行きます。あと私はミフリスです」

なにそれ。

勇者の意思をもつと尊重するべきじゃないの？

「俺は魔王にもう会ったんだよ、ミスリルさん」

「ミフリスです」

「それで勝てないことを悟って逃げてきた、ミニマムさん」

「興味がなかったただけでは？ミフリスです」

あれー、心の中を読まれてる？

しかもなかなか挫けないなこいつ。

「でも、魔王は強すぎるよ、ムツシュシュシュさん」

「勇者が魔王に負けることはありません、ミフリスです」

「どういうことだよ、ムラムラさん」

「運命だからです。全ては決まっています、ミフリスです」

意味深な言い方だな。

猫に宗教的なことを押し付けるなよ。

運命なんて俺には関係ない。

あと、さすがの俺でも名前覚えたわ。ボケ殺しのミフリス。

「俺の道は俺が決める」

「どうしても行かれないと？」

「当たり前だろ！にや！！！」

威嚇の意味も含めて、光の矢をミフリスに放った。

街中ということもあって、あつちは派手なことができないだろう。

「それならば仕方ありませんね」

ミフリスは杖を取り出し、俺にむけて構えた。

あつという間に光の矢を相殺し、さらに魔力が杖に集中する。

え？

殺される？

「よき安らぎをつ」

言うや否や俺の意識がずーんと重くなる。

あつさりすぎるけど、言い訳としては体が動かないから避けられないし、対抗魔法とか教わってないから無理だし。

「運命は覆りません・・・」

意識を失う直前、確かにミフリスはそう呟いた。

ああ、もうめんどくさい。

ものすごい睡魔に、俺は抵抗することもなく闇に吸い込まれていった。

## 50・なにこれ、ポケ殺し（後書き）

記念すべき50話達成です！

読んでくださった読者の方々に心から感謝の気持ちを申し上げます。  
不定期連載で読みづらいかもしれませんが、これからもよろしくお  
願いします！

## 51・なにこれ、召喚のなぞ

重たい瞳を無理やり開ける。

なんだっけ？

記憶が曖昧だ。

若干暖かくて、震動を感じる。

「気がつきましたか？」

ミフ……あ、ミフリスに抱き上げられていた。  
それでもってどっかにむかって歩いている。

「……どこ？」

「さあ？どこでしょうね」

なんでここでいじわるすんだし。

「魔王のとこ行こうとしてんでしょ？」

「はい」

「俺じゃああんなバケモノは倒せないよ？」

「そんなことはありませんよ」

「みんなは？」

「さあ？どなたでしょう？」

「ここどこ？」

「西の峡谷レイン・エイノンです」

今度はすんなり答えた。

切り立った岩場で、人間の歩く道なんてどこにもない。  
登山というか、俺みたいに身軽ならアスレチック感覚で楽だけど



ね。

「どうしてこんな無理やりなことすんの？」

「私の使命だからです」

「あんたの使命なんて知らないし」

「では、こう言いましょう。勇者様の運命だからです」

「・・・運命？」

「そう、あなたは私に召喚されました。その時点から運命は決まっています」

「くだらない」

「あなたは勇者。魔王を滅ぼす存在です」

「無理。あと興味ない。あとあと知ったことか」

「あなたの意思なんてハッキリ言いますと、どうでもいいのです」

なにこいつ。なんかコワイ。

「勇者様はなすべきことを成せば良いのです」

俺の意思が関係ないなんてふざけんな。

「どうして魔王を倒さなきゃいけないんだ？」

「魔王がいると、魔物が活発化するからです」

「あんた、魔物の正体って知ってんの？」

「魔物の・・・正体？」

魔王ベネルの話していたことを思い出す。

「魔物は勇者の副産物。魔王もそう」

「どういうことでしょう？」

「さあね？昔の人は勇者という絶対的な存在がほしかったんだって。

その勇者を作り上げるためにいっぱい実験して、その失敗作が魔物の正体だって魔王は言ってたよ」

「魔王の戯言ですか・・・」

戯言・・・ねえ。

俺にはどうでもいい話なんだけどね。なんで覚えてたんだろう。

「魔王も副産物と言っていました、ということですか?」

「勇者召喚と一緒に召喚されるのが魔王なんだってよ」

「つまり・・・私が魔王を召喚したということ・・・ですか?」

「ああ、そういえばそうなるよね」

「そんなの・・・ウソです」

「そうそう、ひとつ聞きたかったんだよね」

「・・・」

「どうして俺を召喚したの?」

「・・・言い伝えです」

また妙な単語が出てきたな。

「100年に一度、魔王が誕生し世界は混沌に陥るだろう」

なんだそれ。

「魔王誕生と共に勇者が誕生し、世界を救うであろう」

「なんか、おかしくね?」

「おかしくなんか・・・ありません!」

ミフリスが声を荒げる。

「そんな・・・私が魔王を召喚してしまったただなんて・・・そんな・

・  
」

絶望って顔をして、ミフリスは立ち止まった。

「まあ、魔王の言うことだしねー」

いまさらフォローしたところで遅かった。

立ち止まり、俺のことを降ろし、ただ俯いて立ち尽くしてしまった。

え、こういう時どうしたらいいの？

## 51・なにこれ、召喚のなぞ（後書き）

もうすぐ連載一年ですねー

いやあ、遅筆でごめんなさい。。。。

ついに勇者誕生の秘密についてに触れてしまいました！

仲間とはぐれちゃったし、どうやって合流させたらいいんだ・・・

w

## 52・なにこれ、勘っきゃない

殺風景。

切り立った岩が顔を覗かせているが、それ以外には草木もないし、街とかも見えない。

なにここ、超ブキミなんですけど。

目の前に立ち尽くしてる女の方が遥かにブキミだってことは言うまでもないけどね。

「ねえ、ここいてもしょうがないからどっかいこー？」

「・・・・・・・・・・」

「シカトすんなやつ！」

「・・・・・・・・・・はい」

俺はどっちから来たのか、これからどっちに行きたいのかもわからないままにただ歩き出した。

それにミフリスもついてくる。

こういう時に役に立つのが猫の嗅覚でしょ。

人間の数倍の嗅覚をなめんなよ。

「・・・・・・・・埃っぽい」

荒れ果てた峡谷はなんの臭いもしなかった。

まあ、あれだな。犬には負けるかね嗅覚も。

嗅覚がダメでも聴覚があるから問題ないし。

「・・・・・・・・風の音しかきこえねえ」

他の生物の気配すら感じない。

いや、でも、ほら、あと最後にはアレが残ってるしね。

「猫といえば勘っしょ」

さつきから俺、独り言喋ってるかわいそうな猫になってない？  
そもそもミフリスは道わかってるはずなんだし、むやみに動くのは得策じゃなかったかな。

「・・・・・・・・」

思いつめた表情で、ミフリスは無言のまま俺についてくる。  
そんなにシヨックだったのかな。言わない方が良かったのかも。  
自分は勇者を召喚したと思ってたら魔王も召喚してて、拳句にふつーの勇者を召喚したと思ったら猫の勇者だもんなあ。

まあ俺は超特別な猫だから召喚されても全くおかしくないし、むしろふつーの人間よりも優れてるけどね。

ん？

なんかイイ匂いしてきたっ！

「肉だっ！」

遙か前方から確かに肉の焼ける匂いがする。

俺は歩度を上げてミフリスとの距離を保ちつつ一直線にその場所へとむかった。

ザクツ！！！！

唐突に、次に俺が足を出そうと思っていたポイントに矢がささった。

あぶなっ！

ほとんど気配もしないまま放たれたソレを見る。

硬い地面にざっくりと矢は刺さっていた。

なにこれ、威力やばっ。

ああ、簡単にお肉は食えないんだろうなあ。

「誰っ!？」

あれ?この声・・・?

「この美人な私のお肉を狙ってやってきのはっ?」

あれ?この口調・・・?

切り立った岩の上からこちらを見下ろしてくる傲慢な態度。

逆光を浴びたその姿は影そのもので、目が慣れるまで全く誰だかわからなかった。

あっ・・・!

「セリーヌ!？」

「□□!？」

## 52・なにこれ、勘っきゃない（後書き）

セリーヌも登場！

セリーヌと別れたのが西の森で、そのさらに西に進むとこの峡谷に出るようです。

なにげに口口の名付け親だということを忘れないであげてください  
w



### 53・なにこれ、変わんねえ

「ひさしぶりー。大丈夫だったの？こんなところでクールビューティな私を追いかけてきてくれたわけ！？」

セリー又は俺の近くまで来て、肉を分けてくれながらそう言った。なにこの人、相変わらずすごいナルシストなんですけど。

「いや、ごめん」

「ふふっ、照れ隠ししちゃってー」

あー、うざい。

「それで、そっちなかなり暗い顔のお姉さんはどちら様？」

文字通り暗い顔をしてるミフリスを指差す。

「・・・魔王を召喚してしまった王国の恥です」

超ネガティブっ！？

「この人は王国のすごい魔道士さんでミフリスっていうらしいよ」「ふーん、口口って女だったらしだね」

別に俺は女たらしじゃないと思う！

っていうか人間が相手じゃどうしようもないじゃん・・・。  
それとも新しいジャンルを切り開くべきなの？

「どうでもいいけど、セリー又はなにしてんの？」

「私？私は私の美貌を探求しつつ、心配だったからロクを探したりしてたのよ」

なんかウソくさいなあ。

「それでいくら入るの？」

「三毛猫発見者には5ミリドル！！！！」

「・・・正直だよね」

「てへっ」

俺って指名手配されてたもんね。あれなんでだったんだろ・・・。

「あの手配書は私が発行したものです」

ミフリスが静かに呟いた。

・・・すごい近くにいましたよ。

「王国からお金が出るなんてどういうことかなって思ったんだけど、ロクってなにかやらかしたの？」

「この猫様、ロク様というのですね。ロク様は勇者様なのです」

「ロクが勇者？それ新しいね！今度私も使ってみよう」

「いえ、新作のギャグとかじゃないです」

なにこのやりとり。漫才？っていうかちょっとイラっとくるし。

「ロク様は私が召喚した勇者様なのです」

「ああ、そういえば今年はヤスオイヤーだね」

「オヤスミヤー？」

「ほな、今日はこれでおやすみや・・・って違うわっ！」

おお、ノリツツコミ！？さすがセリーヌだ。  
なにヤスオイヤーって。

「初代勇者であるヤスオを記念とした100年に1回ある年のことをヤスオイヤーっていうのよ」

勇者ヤスオってめっちゃ日本人じゃん！

俺も日本から来たし、友達にヤスオって猫いたからすごい親近感  
だわー。

ちなみにヤスオはアメリカンショートヘアだったけどね。

「へえ、ヤスオさんねえ」

「そうなのです。それで、筆頭魔術師である私が召喚したというわけです」

「ロロがマジで勇者とか・・・ぶぶっ」

こいつ吹き出しやがった。

「んで、セリーヌは俺を賞金と換金するために探してたってこと？」

「まあ、そんなとこかな」

本人目の前にしてんだから、もうちょっと包み隠せよ。

「でもね、こっちの方に来たのはギルドの仕事も含めてなのよね」「ギルドの？」

「いつも通り魔物退治よ」

「あなたはギルドの方だったのですね」

「まあ、ふつーに綺麗なハンターよ」

魔物・・・退治？

若干イヤな予感がした。

「んで、もう魔物退治は終わってるんだよね？」  
「いんや？」

即答なんですね。その方がスッキリしますね。

「めんど・・・」

「まあまあそう言わないでよ。相棒なんだし、一緒に狩ろうよう」  
「ロク様はこれから魔王を退治しに行くので無理ですよ」

「えー、いいじゃん！勇者なら身近な敵だって倒すべきだよっ！」

うわぁ、また本人の意思と関係ないところで色々言ってるよ・・・。

ポツッ

額に水滴が当たる感触がした。

「あつ、雨だ」

### 53・なにこれ、変わんねえ（後書き）

連載開始からちょうど一年が経過しました！

こんな薄っぺらい内容なのになかなか更新せず、ほんとに申し訳ないです。

補足で、指名手配の額が上がってるのは、ミフリスの焦りからです。特に強い相手を倒したからとかそういうのじゃないです。あと、手配書は国全土に出回っているわけではありません。

## 54・なにこれ、ハゲる前に その1

雨は次第に強くなった。

「ほんつとにこの峡谷はイヤになるわー」

セリーヌが傘をひとりで差しながら言う。

・・・いや、ひとりでするくね？

「この峡谷は、この酸性の強い雨が頻繁に降ることのできあがったとも言われています」

疑問の答えはミフリスが応えてくれた。

酸性つてなに？

「ほらほら、おふたりさんとも雨にあたっているとハゲちゃうよ？」

「なんで？」

「酸だもん」

ちよつと意味がわかんない。

けど、この雨に当たっているとどうやらハゲるらしい。

ドゴオオオオオン！！！！

「え？ちよつとなに！？」

少し離れたところで岩の崩れる強烈な音がした。

酸で溶けて崩れたのっ！？

つてことは俺もドロドロになっちゃうのか！？

めっちゃ怖いじゃん！

なにこれ、避けらんねえし。

「水の魔物、レベル力ですね」

「そうみたいね」

なんで2人だけで納得してんだし。

レベル力？水の魔物？

「プリシア級の上位の魔物だよ。言葉も喋る上に弱点らしい弱点がないのよね。この強くて綺麗な私でさえどうやって倒すか検討するとこだったしね」

弱点なんて電気に決まってるでしょ。

「ちなみにレベル力は雨の降る時にしか出現しません」

「つまり電気系の術は自分たちも焦がすかもしれないってことね」

あれ、なんかこの2人の息が合ってるすごい疎外感があるよ。  
もうお前からやつつけろし。

「あらあら、おいしそうなお肉がふたつもあるじゃない？」

レベル力は静かに姿を現した。

外見は人間の女性で、長い銀髪に尻尾が二本生えてる。  
すげーな。銀髪って初めて見たわ。

なんだろう、狐っぽいかな。

っていつかお肉の中に俺が含まれてない気がするのはいつものことなのか？

「女狐レベツカってほんとだったんだね？よかったー、私の方が美人だわ」

なにも良くねえし。むしろ、なんの安心感？

とりあえず挨拶代わりに水の矢を放ってみる。

雨を切り裂いて、一直線にレベツカへと放たれた。

「ふふっ」

消えた？

矢が消えた。一直線にむかっていったはずの矢が消失したぞ。

「この私に水の魔法で挑むなんて、どこのおバカさんかしら？」

「魔法のコントロールを奪われたのですね・・・！」

え？ミフリスの言葉がよくわかんなかった。

「レベツカは水の魔法を得意としています。彼女よりも水の魔法に對して優れていなければ、魔法が彼女に当たる前に掻き消されてしまうでしょう」

説明おつかれ。

相殺ともちよつと違うつてことか。

これだけ雨が降ってるのに水の魔法がダメ。電気の魔法もダメってなると残るのは・・・？

「ごめん、任せた」

残ってないぜ！



#### 54 - なにこれ、ハゲる前に その1 (後書き)

次回はセリーヌとミフリスの戦闘が見られます！たぶん・・・  
筆頭魔術師の実力とはどれほどのものなのか・・・乞うご期待！！！！

って今回は予告風にしてみました。

弱点なんてないとか書きちゃって、自分の首絞めた代償は重すぎだ  
ったかもです……。どうやってレベツカ倒そう……。

## 55・なにこれ、ハゲる前に その2

「デーモンズペル!!」

ミフリスの周りに黒い大きな魔方陣が現れた。  
気持ち悪い。

ってというか闇の魔法とか使えるわけこの人。

「ずいぶん物騒な魔法ね」

「私はどの属性の魔法もトップクラスに扱えますので」

なにそれ、自慢？

黒い魔方陣がミフリスの体内に吸収されていく。

うわぁ、絶対俺はイヤだなこれ。

「ダークファンシー!」

うわっ、レベッカの周りに闇がでてきた。

「闇は全てを食らい尽くします。覚悟してください」

一気にレベッカは闇に包まれ、そこには黒い球体がひとつ出来上がっていた。

あ、これ、俺が前に食らった魔法と一緒にじゃん？似てるだけ？

「もー、私の出番がなかった!!華麗で華やかで美しい閃光のような私の戦いざまを見せてあげたかったよう」

でたよ、セリーヌの戯言。

なんか言葉の意味的にかぶってる表現あるし・・・。  
って言ってるそばから、球体にヒビが入った。  
そこから水が漏れ出してくる。

「あらあら、やっぱりあの空間は無限ではなかったのね、ふふ」

余裕の笑みでレベルカ登場。そんな簡単に抜け出せたっけアレ・・・。

「ど、どうやって!？」

「簡単なことよ。闇の空間を水で満たしてあげただけなのだから」

俺がそれやったら溺死するから無理だわ。

「私の出番ってことね!」

颯爽と矢を放つセリヌ。

いとも簡単にレベルカの体を突き抜けていく。

「私の体は水なのよ。物質が効くわけじゃないじゃない」

「あらら、そっかそっか」

レベルカは空中に水を集め、八方に水の矢を飛ばす。  
雨なんていうカワイイものじゃない。

これこそ空から槍が降ってきたって感じだね。  
それがふつーの雨と混じって、ものすごい見づらい。

「酸濃度を上げたステキな雨よ。溶けちゃいなさい」  
「わお」

その攻撃を3人とも各自のやり方でかわす。

セリー又は身軽な身のこなしで全てを避けていた。ものすごい運動神経と動体視力だね、猫顔負けかも。

ミフリスは魔法の盾を出し、全てを防ぐ。

俺はレベツカの足元で雨宿り。

「さっきからなんなのだこの猫は・・・」

超自然な動作でレベツカの近くに避難したもんだから、なんか呆れられた。

だって、ものすごい数の水の矢を放ったって、自分に食らわせるほどランダムには放たないっしょ。一番の安全地帯じゃん。

っていつかハゲるところか溶けちゃうわけ？すげーな。溶けるって感覚が全く想像できないし。

瞬間、ふつーの矢がレベツカの腹部に刺さった。

こんな間近で矢が刺さるとこ見るの初体験！

うわぁ、痛そう。

「ま、物質が効かない敵はあんただけじゃないってことよ」

相変わらず降り注ぐ水の矢を避けつつ、弓を構えているセリーヌがいた。

ちよつと待って、セリーヌつええ！

「な、なにを・・・？」

「指定したどんなものにも触れることができる魔法、リアルナイトメア」

「秘術だと・・・？」

なんかレベツカがすごいビビってるんだけど・・・。

秘術ってなに？

「秘術とは、魔法を生み出したと言われる六大賢者の遺産と言われるものです」

あ、聞いてもないのに毎度説明どうもミフリスさん。  
また意味わかんない単語出てきたし。  
もうめんどいからなんでもいいや。

「だがっ、私はまだ負けていない！」

レベツカは次から次へと降ってくる雨を凝縮し、1つの槍を形成し始めた。

それをさせまいとセリーヌが矢を放つものの、水の壁を作られて遮られてしまう。

ミフリスの闇魔法も同様に防がれる。

こいつ強い。

2人相手に互角以上に戦ってるし。

「もっとがんばらないと負けちゃうよ！」

俺も2人の奮闘に感化されて、必死に応援した。

「じゃあ、あんたも戦いなさい！！」

「ならば、あなたも戦ってください！！」

うわー、すげえ見事にハモったよ2人とも。  
えっと、うん。

「ごめんなさい」

55・なにこれ、ハゲる前に　その2（後書き）

三毛猫の全剃り（全ハゲ）ってなに猫？って考えてるうちに55話を投稿。

## 56・なにこれ、ハゲる前に その3

「なんかヤバそうな一撃がきそうだよ？」

と、助言してみる。

「全てを貫く槍を味わいなさい！ウンディニール！！！」

極限まで水を凝縮させた槍はどう見たって危険。

やばい、これは食らったら死ぬわ。ご愁傷様だねセリーヌ&am  
p・ミフリス。

「だ・か・ら、あんたも戦いなさいっての！」

セリーヌが素早い身のこなしで俺の背後に回った。

ふっーにお座りしてるだけの俺の背中をつかむ。

あれー、なんかイヤな予感しかないよ。

思った瞬間、背中をぐいっと引っ張られ、俺は宙を舞っていた。

なんか投げられたし。

「ごめんね口口！盾になって！」

「ふざけんなー！！」

宙を舞いながら体勢を取る。

ったく、ミラじゃないんだから結界とかムリだし。

うわっ、考えてる暇なさそう。

「ハア！！！」

レベッカが振りかぶって槍を思いっきり俺にむかって投げた。  
いや、俺に投げるのおかしいでしょ！まだ一撃しかあんたに攻撃  
してないし！

「にゃー！！」

見よう見真似！ミラの結界だ！！

一点を集中した結界を瞬時に展開させる。

これをなんとか切り抜けたら、とりあえずレベッカよりも先にセ  
リーヌを殺す。

結界と槍がぶつかる。

とんでもない重圧がかかってきた。

なにこれ、魔力で結界を維持しないと押されて終わるし。

ミラってこんなキツイ魔法使ってたのか・・・。

離れて初めてわかるお互いの事情ってやつだね。

結界を維持しつつ、水の槍に意識を向ける。

水が広がるイメージ。

「にゃあー！！」

シュパンー！！

「なんてことっ！？」

鋭い音とレベッカの叫びと同時に水の槍が消滅した。

「さっすが口口！この私が見込んだ猫なだけあるね！」

調子に乗るなよセリーヌ。



「今のは魔法のコントロールを奪ったのですね？」

「ふっふっふー」

さつきミフリスが言っただことを意識してみました。  
やっぱり俺って天才だね。

「わ、私の水魔法が奪われるなんて・・・」

ここぞと言わんばかりに隙ができる。

すかさずセリーヌの矢とミフリスの魔法がレベル力を襲った。  
うわっ、容赦ないねえ。

「ぐあああ！！！」

矢と魔法に打ち抜かれたレベル力が倒れた。  
同時に、雨がやんだ。

なんとなく、魔力の流れやコントロールについてわかった気がする。

自分自身の魔力の流れも感じれるようになった。  
これってものすごい進歩だね？

「セリーヌさん、ちょっとお話があるんですけどー」

極力優しい口調で俺はセリーヌに話しかけた。

「うん、私はないから帰るね」

「ふざけんなー！！！」

そっいえば俺、ハゲてないよね？

56・なにこれ、ハゲる前に その3（後書き）

次回は番外編（ミラ編）をお送りしたいと思います。

## 57・もう！ロロのバカ！ その1

偉そうな王様が玉座に座ってる光景って人間も一緒なんだね。妖精族だけなのかと思ってた。

「つまり、その三毛猫のロロというのが勇者だと言うのだな？」

「はい、その通りでございます」

堅苦しい空気を体中から発してる王様。

「して、その妖精。名は？」

偉そうでほんつとウザい。実際偉いのかもしれないけど、上から目線な人って嫌い。

私だって、いたくてココにいるわけじゃないんだから。早く外に出たいよう。

「ミラ」

「ふむ、大妖精の使いで参ったのか？」

「いいえ、私は大妖精の命でロロを守っているだけです。決して王様に会いにきたわけではありません」

「その守る相手から離れてたら意味もないがな」

このジジイほんとに嫌い！

大体、ここの門番がロロを入れないとか言うからいけないんじゃない！ロロの頼みじゃなかったらこんなとこ来なかったわよ！

「ロロ・・・という猫はどこにいるんだ？」

「門前払いを受け、外で待っております」

それにしても淡々とよく口が回るわねアホ勇者。

「連れて参れ」

「はっ」

やっと外に出れる！

今度は口口だけ中に入れて、私が外で待ってよつと。

「口口ーお待たせ！出番が来たよー」

「口口君はいるかな？」

あれ、いない・・・？

どっか散歩してんのかなあ。

「いないねえ」

「困ったな。人に尋ねてみよう」

バカ勇者がひとりで聞き込みを始めた。

私は魔力探知魔法で周囲をさがそつと。

「サーチフォース！」

この街全体をに魔力探知を張り巡らせる。

知らない魔力が数多く感じられた。

さすが魔法都市って感じね。上位の魔道士もたくさんいるし、魔力を意図的に隠してる人もいる。私にはバレバレだけどね。

「あれ・・・」

「ふむ・・・」

「……いない」

うわーコイツとハモったー！

最悪だぁ……。

っていうか口口いないし！

「どこ行っちゃったんだろう。あのキモいくらい独特で滲み出てるほど大量の魔力が全然感じられなかったよ……」

「街の人の話によれば、なにやら女の人と猫がじゃれ合っていたという話だ」

「女の人にホイホイついていっちゃうような性格だっけ？」

「……」

「……ご飯か」

またハモったぁああ！！！！

最悪の上位語ってあるっけ？なんて表現したらいいのこの感じ！  
もう！

口口のバカ！

「と、とにかく、いないなら探さない」と

「その前に王様に話さなければ……」

「いつてらっしやい」

笑顔でバイバイしてやる。

街の外ってなるとどこに行ったのか探すのが大変じゃん……。

そっいえば、ご飯に釣られて外に出るっておかしいかも。

ご飯を食べるなら街中の方が充実してるわけだし、もしかして……  
攫さらわれた？

でもロロほどの猫を攫うって相当強い人だよね。しかも女の人・・。

肉弾戦でロロに勝てるわけじゃないから、ロロ以上に魔法が使えるって考えるとその辺の魔道士じゃなさそう。

ってことは、この街の魔道師団の上位の人とかな。

いや、そもそもロロが勇者で普通の三毛猫じゃないって知ってる人なんているの？

風が吹きぬけて、一枚の紙がヒラヒラと私の前に落ちた。

「あつ・・・」

手配書・・・。

三毛猫の雄を見かけた人はギルドか王国軍に報告を・・・ってギルドと軍と両方！？

ギルドと軍ってそんなに仲のいい関係じゃないし、両方に精通してる人ってことは・・・どういうこと？

「ミラ君。つい先日、三毛猫の雄を南の街道で目撃したという通報があつたそうだ」

ダメ勇者がいつの間にか戻ってきてて、なんか言ってる。

「・・・可能であれば捕獲し、ギルドもしくは王国軍へ引き渡すこと。捕獲者には報奨金5ミリドルを配当するって」

手配書の一番下に書いてある。

つまりロロは今捕まって、王国がギルドに引き渡されてるってことかな。でも、王国軍の方には来てないみたいだから、ギルドに行ってみるしかないわね。

もう！

口口のバカ！

57・もう！ロロのバカ！ その1（後書き）

初めてロロ以外の視点からお送りしました。次回もミラ編です。

ギャグ少なめですみません！

一生懸命で健気にロロを探す、そんなミラをお楽しみください。



## 58・もう！口ロのバカ！ その2

「そもそも魔力を探索したんじゃないのかい？」

まさか勇者からこうも的確な指摘を受けるとは思わなかったわ。

「捕獲魔法の中には相手の魔力を無効化するものがあるの。そういうもので捉えられてた場合、索敵にひつかからない場合があるのよ。この都出身のクセにそんなことも知らないわけ？」

「まあね」

なんで偉そうなのよっ！

私たちは街で一番大きなギルドを訪ねた。

「これはこれは勇者殿」

「うそっ！？シエルヴィ様が帰ってきてるの！？」

「わあ、シエルヴィ様っ！！」

「あはは、元気にしてたかい？」

えっ、なにこの人気。

そっいえば初めて会った時も女の子たちに囲まれてたっけ。

私にはわかんないなあ、この男の良さが・・・。

「ねえ、君たち。三毛猫を連れた人が訪ねてこなかったかい？」

「んー、見てないよー？」

「ふむ、どうもありがとう」

意外とヘボ勇者も役に立つものね。

でも、結局情報はゼロに戻っちゃったけど・・・。

もう！

口口のバカ！

本当にどこに行ったの・・・私を置いて・・・。

「おやおや、寂しいのかいミラ君？僕の肩で良かったら貸すけど？」

え、こんな気遣いを勇者がかけてくれるなんて・・・。

そんな優しい言葉かけられたら私・・・ってなるかボケ！

あー、私表情に出てたのかな。こんな、たらし勇者にまで心配されるなんて。

「ほら、さつさと次行くわよ」

「色々な意味で素直じゃないねえ君も」

「知ったような口で言うなっ！」

もうこうなったら街から離れたと考えるしかないわね。

もしかして、私たちを置いて本当にひとりでどっか行っちゃったのかしら。

魔王退治なんて絶対イヤだって言ってたけど、どうせ口口のいつもの天邪鬼だと思ってたからなあ。  
あまのじやく

でもでも、いくら魔王退治がイヤでも、急にいなくなるほど薄情な奴じゃないもん。

門前払い受けたから拗ねてどっか行っただとか？

・・・ないわね。

絶対誰かに捕まったんだわ。

「この手配書って誰が手配したんだろうねえ」

「知らないわよ」

「ギルドにも軍にも通じてる人なんてそうそういないもんだよ？」

「なによ、口口を見つける前にそっちから当たろうってわけ？」

「急がば回れってね」

かっこつけながら言われても……。

でも、珍しくコイツの言ってることも理にかなってるし、私も思ってたところだったし。

ギルドの人が言うには、聖都の方から回ってきたって話みたいね。

「聖都……」

「シフォニシアには久しく行ってないな」

「ここからどれくらいかかるの？」

「ソルビートルから真北のマルチートル川を越えたところがシフォニシアだね」

「言葉にしたら近そうだけど、それって結構あるでしょ……」

「今までの旅路を考えればそんな距離じゃないさ」

「ロ口が聖都へ行ったって可能性もあるし、行ってみる価値はあるかも。」

「ちなみに、この街から東に出れば僕の故郷方面。西に出れば峡谷レイン・エイノン方面。こっちは人が歩くような道じゃないからね」

「その峡谷方面にはなにがあるのよ」

「んー、アンスピカ山脈へは近いかもね」

「真北に行くよりも？」

「そうだね。聖都から北に行っても死の樹海があって、下手をすれば山脈のふもとにすらたどり着けないで死んでしまうからね」

「ふーん。ま、どうでもいいわ。とりあえず聖都に行きましょう」

「よし、じゃあ王様に話を通してくるとしよう」

はっ！

なんで私は今このウザ勇者と一緒に旅しようと思ってるんだろ！

ふたりつきりとか超ウザイに決まってるじゃん。

ロロがいたらロロに矛先が向くのにな！

「ちょ、ちょっと待っ……」

「さあ行こう」

「「じゃないわよ……」

もう！

ロロのバカ……！

## 59 - なにこれ、ギルドのボス

溪谷を抜けた俺たちは、とりあえず近くの村のギルドに立ち寄っていた。

ちやっかり報奨金を受け取るためだつて。

「いやあ、儲けた儲けた」

上機嫌なセリーヌの横で、いまだにテンションの上がりきらないミフリス。

「あんた、ミフリスさんだよな？」

ギルドのおっさんがミフリスに話しかける。

「ええ、そうですが」

「やつぱりそうか。いやあ、ギルドの大ボスがこんなところで何してんだい？」

ギルドの大ボスってなに？

あれ？今すつこいこと言つたよねこのおっさん。

「それは内密にお願いします」

「おっと、こいつあすまねえな」

「えー！うっそー！！ミフリスってそんなすごい人だったのー！？」

セリーヌ空気読めよ。

俺はこの世界のことはよく知らないけど、どうやら王国軍とギルドは別々の組織らしい。

規律のある王国軍では対処できないことをギルドがこなすということでバランスを保ってるってミフリスが言ってた。

はつきり言ってよくわかんなかったし、どうでもいい。

「私は王国軍筆頭魔術師のミフリスです。それ以上でもそれ以下でもありません」

「この国の影の支配者的存在ねあなた」

「私は勇者様を用いて魔王を倒したいだけです」

「ふーん。っていうか魔王になんかうらみでもあるの？」

「それは・・・」

意味深な間。

魔王って俺と同時に召喚されたわけだよね。

っていうことは、俺ってなんで召喚されたわけ？

前回は深く追求せずに話をやめちゃったけどさ、いくら言い伝えだからって魔王はその時いなかったわけでしょ？

「わかつちゃったかも美しい私が。あれでしょ、魔物！」

びくつとミフリスが微細に動く。ほんつとにちょびつとだけ動揺してみた。

「魔物・・・そうですね」

「ほら、当たったー！さすが私ね！脳みそまで美しいの！」

いや、セリー又空気読めってば。

とりあえずギルドから外に出た。

まあ、公共の場で話すことでもないっばいしね。

「魔物に両親を倒されたーとか？」

俺が試しに言ってみる。

なんかミラも似たような境遇だったしね。

「ええ、まさにその通りです」

当たったし。セリーヌより俺の脳みそのが絶対すげーよ。大きさの比率的に。

「まあ、魔王が誕生する前も魔物はいたし、人間を襲ってたのは事実だからね」

「そうなの？」

「そうよ、ギルドって前々からあったんだけど、やっぱり魔物退治がメインの仕事だったみたいだしね」

「っていつか大ボスってなに？」

話を戻してみる。

「いえ、ただの運営資金提供者です・・・」

「そっか、ただのウンエイシキンテイキョウシャかー」

ごめん、ちょっと難しい単語でよくわかんない。

「あのさ、この国にあるギルドの施設の数・・・尋常じゃないわよ？いくらなんでも個人で払える額じゃないと思うんだけど・・・」

「いえ、現在のオーナー（ボス）は私ひとりです」

どうやら、セリーヌのお金は元々ミフリスのお金だったことまで俺は理解した。

ま、お金っていう概念がよくわかんないからどうでもいいや。

## 59 - なにこれ、ギルドのボス（後書き）

ロロは他人の前ではあんまり喋りません。

だって、めんどろ事になるかもしれないでしょう？

だからギルドの中などでは大人しく心の声でツッコミをいれます

w



## 60・なにこれ、猫の三欲

「ミフリスがギルドのオーナーっていうのはわかったんだけどさ、ギルドって他にお金稼ぐシステムみたいなのってないの？」

「セリー又ってギルド所属なのになんにもギルドについて知らないわけ？」

ま、俺にいたってはいまだにどういう組織なのかすらわかってないけどな。

「現在のギルドは、私からの資金提供と依頼者からの報酬で成り立っています。魔物退治は主に私から報酬を出すようにしているので」

「へえ、ミフリスって貴族の娘かなにかなの？」

「はい」

「あっさり認めたわね」

「事実ですから」

「私に足りないあとひとつの要素をあなたは持つてるってことね」

お金か。

っていうかセリー又はあとひとつだけじゃ完璧にはならないっしょ。

「親の遺産ですから。私がすごいわけではありません」

「いや、あんた王国の筆頭魔術師じゃん。十分すごいってば」

なんでこの女はこいつも謙虚なの？

なんで普段謙虚なのに俺を拉致したりするの？

あ、そっいえば・・・

「話戻すけどさ、つまりミフリスは復讐のために魔王を倒したいってことだよな？」

「……………はい」

「へえ」

そうなんだって。

食べ物以外で復讐とか考えたことないな！

あ、つい最近俺を盾にした奴がすぐ横にいるけどな。  
きつといつか制裁を加えてやる。

「でも、もちろんそれだけではありませんよ。私は王国の筆頭魔術師。民を守る立場にある王の意図を汲むものです。それは私の正義なのです」

「あつそ」

「私はお金があればなんでもいいけどねー」

セリー又って守銭奴だよな。

ミフリスは民を守ることが正義って言ってたけど、正義ってなに？英雄〓正義みたいな感じで喋ってるけどさ、猫の俺からしてみれば理念だけの正義なんてなんの意味もないと思うんだよね。ま、英雄〓勝者だから一致してるって言えばしてるのかな？

猫なら勝者〓正義でわかりやすいからね。

「それでは、アンスピカ山脈へ行きましょう！」

「おー！……って言うんでも思ったかっ！」

「今言っただじゃん」

セリー又空気読めし！

「俺は嫌だつて言つてんだろ！なんで勝てるかどうかもわかんないような、あんなコワイ奴んどこ行かないといけないんだよ！」

「運め」

「運命なんかしらねー！俺は食事と睡眠と雌猫があれば生きていけるんだ！魔物なんてほんとはどうでもいいの！」

「それでは困ります」

「コラっロロ！ワガママ言ったらダメ！」

セリーヌの対応はなんか違うと思う。

「魔王を倒してくだされば・・・そうですね」

「ん？」

「一生困らないほどの食事と雌猫を用意いたしますよ」

え？

今なんて言った？

「うわあ、ミフリスえげつないねえ。ロロを買収すんの？」

「はい、お金には余裕がありますので」

うふふと笑顔で言う。

あ、笑ったとこ初めて見たけど・・・こわっ！  
なんか怖い雰囲気出てるよ。

「しかもロロのやつ揺れてるよー」

ゆ、揺れるものか！

こんなもので揺れる俺じゃないやい！

「寝心地のいい寝床も用意しましょう」

「いこうか！……！」

「□□……あんたやすっ！」

なんかこの感じ前にもあったようななかったような……。  
まあいいや。一生の幸せを手に入れるために魔王なんてぶつとばすぞー。

あれ？逆にぶつとばされたら一生の幸せとか意味なくね？

「あ、ちょっと待って！今のなしっ……！」

なしにはなりませんでした。

## 60・なにこれ、猫の三欲（後書き）

次回はまたミラ視点に移ります！

それにしても口口って単純ですよね・・・猫ですしね・・・。

61・もう！ロロのバカ！ その3（前書き）

ミラ視点ですよ！

## 61・もう！口ロのバカ！ その3

えー、なにこの川！

すっごい荒れてるし橋ないじゃん！

「これがマルチトール川？」

「そうさ」

「どうやって渡るのよ・・・」

「・・・船さ」

「ムリでしょ」

この荒れた川を船で渡るとか、酔うとかそういう問題じゃないよ。  
しかも結構幅もあるし。

雨降ったわけじゃないのになんでこんな急流なわけ？

「まあ、マルチトール川は渡るものじゃないんだよ」

「どゆことよ？」

「ここから東に歩くとサンベンプル行きの船が出るのさ」

「サンベンプル・・・？」

なんかどっかで聞いたことある地名。

「って、元々口ロと来た道じゃないっ！湖まで歩くってこと！？」

「湖じゃないと渡れないんだからしょうがないんだ」

「じゃあなんでソルビトールから北に歩いてきたのよ！」

「来た道に戻るより楽しいと思ってね」

おもしろくない！

ほんつとにゴミ勇者ね。

「ロロに乗れずずっと飛んで来たから疲れてるのに・・・」

もう！

ロロのバカ！

ん？あれ・・・。

「つて、私飛んで渡れるし！」

わお、なんで気付かなかったんだろう！

「おやおや、僕を置いてけぼりにするつもりなのかい？」

う、正直なところ、こんなダメ勇者でもいてくれると安全なのよね・・・。

私はこの姿ゆえに戦闘には不向きだし、ちょっとした魔物にすら食べられそうになるし・・・。

「・・・うー、わかったわよ！飛ばせばいいんでしょう？飛ばせば」

「あつはつは。さすがミラ君だね。人ひとり飛ばす魔力のある人なんてそうそういないよ」

「褒められても嬉しくないし。私妖精だし」

「素直じゃないねえ」

「川の途中で落とすプランBでいいわね？」

「あつはつは。困ったなあ。どうせならプランYで頼むよ」

え？Yって勇者のY？

どうしようもなくつまんないよこの人・・・。

「Yは勇者のYだよ」



自分で説明しだしたー！？

「え、う、うん。プランAのままでいくね」

「そうかい？残念だなあ」

なんかこいつ殺したい。

まあ、いいわ。

とりあえずまずは勇者を向こう岸まで飛ばそう。

「フライングウィング！」

んで、私は自前の羽で渡れば万事解決！

ものすごいショートカットでシフォニシアに着いちゃうわね。

今頃口はどうしてるのかしら・・・？

まあ、どうせいろんなことに巻き込まれてるんだろうけどね。  
別に心配なわけじゃないのよ。

ただ、ちょっとだけ私がついてないと危なっかしいしね。

シフォニシアにいるといいな・・・。

61 - もう！ロロのバカ！ その3（後書き）

気付いたら夏が終わってました。

アルファポリスのファンタジー小説大賞にこの作品をエントリーしました。

ですので、9月中旬に完結させるようにがんばります！

62・もう！ロロのバカ！ その4（前書き）

ミラ視点です！

## 62・もう！口ロのバカ！ その4

「うわっ、すごい・・・」

聖都シフォニア。

街全体が巨大な魔方阵となつて、結界を作つてる。  
妖精の森ほど強力じゃないけど、人間の力でこれだけの結界を張れるなんてすごいわ。

「美しい街だろう？」

「あんたの街じゃないけどね」

「国王に会いに行くかい？」

「うーん、王国軍に聞きたいことはあるけど・・・。それよりもまずはギルドに行きましょう」

ギルドも大きいね。

しかも人がいっぱいいてすごいなあ。

「あら、シエルヴィ様じゃない」

うそ、ここでもこいつ人気モノだったりするの？

「やあ、元気かい？」

「どうしたのこんなところで」。魔王退治はいいのかしら？

「今は仲間が必要だからね。焦らずに行くさ」

「かつこいいわー！私も行くわよっ！」

「君みたいなカワイイ子を危険なところへ連れて行くわけにはいかないさ」

「まあ・・・」

「ごちそうさまー。」

くだらない茶番は置いておいて、口口のことを聞かないと。

「あー、三毛猫のウォンテッドについて聞きたいんだけど・・・」  
「こりゃまたカワイイ妖精さんだねえ。三毛猫かい？あー、ああ、アレか」

ギルドのおじさんが紙を持ってくる。

「このことだろう？」

「うん、これ」

「これね、もう依頼主から手配の解除が申請されてね」

「えっ！？どゆこと！？」

「さあてね、見つかったのか、あきらめたのか・・・」

見つかったの方が可能性としては高そうね。

「依頼主って軍の人よね？」

「おや、知っているのかい？」

これはカマかけたら教えてくれそうな予感。

「うん、友達なのよ。今はどこにいるかわかるかしら？」

「軍の魔道師団の筆頭だからなあ。本部を訪ねてみたらいいんじゃないかい？彼女は色々なところを歩き回ってるって話だからいるかどうかわからないけどねえ」

「そうね、そうしてみるわ。どうもありがとう」

魔道師団の筆頭？

筆頭魔術師のことよね・・・。

どうしてロロを探してるのかしら。

しかも見つかったようだし。

絶対になにか繋がりがあるわ！

「おや、ミラ君。なにかいい情報でも入ったのかい？」

「・・・なんでよ」

「嬉しそうな顔をしてるからさ」

「し、してないわよ！」

「それじゃあ会いに行ってみるかい？筆頭魔術師のミフリスさんに」  
「なっ・・・」

なんでコイツってたまに鋭いんだろう・・・。

いつものおちゃらけた感じは作ってるのかしら？

「シエルヴィ様ばいばい」

意外とすごい情報網なのかもしれないわね。

ようやくロロに繋がる情報が手に入った！

ロロ！待ってなさいよ！

62・もう！ロロのバカ！ その4（後書き）

1日2本投下！

それくらいのペースじゃないと終わらない予感なので・・・w

続けられるかな・・・。

63・もう！ロロのバカ！ その5（前書き）

ミラ視点！！



## 63・もう！ロロのバカ！ その5

軍ってどうしてこうも重たい空気なのかしら？

「南の王より勇者の名を授かったシエルヴィ・ファンタスティックだ。筆頭魔術師ミフリス・レインボウはいるか？」

へボ勇者はずいぶんファンタスティックな苗字を持つてるのね。

「残念ながら、筆頭は現在魔王討伐のためにアンスピカ山脈に向かっている」と報告を受けています」

「討伐？魔法師団は見たところ駐留しているようだが？」

「勇者の補佐として、筆頭が勇者に付いていつているのです」

「勇者というのは・・・三毛猫か？」

「は？いや、私は勇者の詳細までは知らされていないのでなんとも言えません・・・人間なのでは？」

「そうか、すまなかったね。親切にどうもありがとう」

紳士モードな勇者は的確に情報を集めてくれた。

つまり、筆頭魔術師であるミフリスって女がロロを拉致って魔王を倒しに行ったってことね。

ロロが素直に言うことを聞くとと思えないし・・・。

「「エサか」」

だからなんでコイツとハモるわけ！？

前振りもなしにハモるとかおかしいでしょ！

「つまり、ロロ君は拉致られた拳句、エサに釣られて魔王退治に行

「つたと考えるのが妥当だな」

「うう、私を置いて魔王退治に行くんじゃ意味ないじゃん・・・」

「そんな顔は似合わないよミラ君」

「うるさい」

「なら、僕たちもアンスピカ山脈へ向かおう」

「今から行つて間に合うかなあ」

「ふっふっふ。僕を見くびらないでくれよ」

安心して。存分に見くびつてゐるから！

「死の樹海を越えよう」

「え？」

「このまま北に進み、樹海を抜けるのさ」

「だって、樹海は危険だって言つてたでしょ？」

「僕がついてるよ」

だから不安だつてことを理解してください。

「でも、それしかないのよね・・・」

追いつかないと。

「ロロが魔王と戦つて時に私がいらないんじゃ大妖精様に顔向けできないし、なによりも・・・。」

「私がいないと・・・！」

「そうさ、ミラ君がいてくれたら僕も安心だよ」

いや、違う違う。

あんたはむしろ関係ないから。

「死の樹海を抜けるには、ある道具が必要なのさ」

「道具？」

「そう、たいまつが必要さ」

「・・・冒険の必需品的なもんじゃん」

「樹海の魔物は狂暴だが、火の属性に弱くてね。たいまつがあれば問題なしだよ」

「結構簡単に抜けられそうね」

「・・・だといいね」

なんか意味深な濁し方じゃない？

すっごい嫌な予感してきたし・・・。

こんな時に口口がいてくれたらなあ。

もう！

口口のバカ！

63・もう！ロロのバカ！ その5（後書き）

がんばって毎日更新！！！！

64・もう！ロロのバカ！ その6（前書き）

ミラ視点です！！！

## 64 - もう！口口のパカ！ その6

「・・・暗いわね」

「木々が太陽を遮っているからね」

「妖精の森はもつと明るいのになあ」

「この暗さこそが死の樹海と言われるゆえんかもしれないね」

「樹海・・・ってことは迷子になりやすいつてことよね？」

「あつはつは。僕が迷子になるわけじゃないじゃないか」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・まあ、人間はたまにはミスをするものさ」

正直者でよろしい。

ただひたすらに暗い樹海を、たいまつの火を頼りに進んでいく。

ここ、魔力の流れがおかしいわ。

ぐちゃぐちゃっていうか、ランダムに流れてて本当に自分の位置や敵の位置が掴みにくい。

ガサガサガサ

「え、な、なに？」

「噂の主ってやつかな・・・」

「ちよつとまって！そんな噂は私聞いてないわよ！」

「あつはつは。言うのを忘れていたみたいだね。すまないすまない」

もつとすまなそうにしてほしい。

「樹海の主ってなによ？」

言った瞬間にわかってしまった。

本当はわかりたくなかったのに・・・。

「がっはっはっは。樹海に人間とは珍しいのう」

木が喋った。

違う。木の姿をしたモンスターが喋った。

「だが、ここを通すことは許さん」

「ほら、勇者の出番よ」

「そ、そうだね。ミラ君も手伝ってくれと嬉しいんだが・・・」

弱腰なのかいっ！

「魔王への道はワシを、樹木王ファールを倒してから進んでもらおう」

妖精の森の樹木モンスターはこんなに狂暴じゃないのに・・・。

木の枝が細いツルとなつて襲い掛かってくる。

これくらいは避けられるわ！

「ミラ君。火の魔法を使えるかい？」

「え・・・えつと・・・」

「あっはっは、想定外だったよその返答は・・・ミラ君ならどんな魔法も使えるものだと思ってたよ・・・」

火は森を燃やす。

火は森の敵だ。

だから妖精族は本来火の魔法を使えない。

火が怖いわけじゃない。

火の魔法が怖いわけじゃない。

「ファイヤーボール！」

勇者が小さな火の玉を撃ち出す。

でも明らかに苦手そうな魔法を放つ。

ファールは、枝を振るうだけでいとも簡単に火の玉をかき消してしまった。

「に、逃げる？」

勇者の火の魔法を見て、私の脳裏にはひとつのトラウマがよみがえっていた。

怖い……。

逃げたいよ……。

「敵に背をむけることはできない！」

「かつこつけて死んだらかつこわるいわよ！」

「大丈夫さ！僕だって近くでロロ君の戦いを見てきたんだ」

ロロの戦い……。

なんだかんだ、ロロって逃げないのよね。

……うん。

わかった。

私も逃げないよ。

「ファイヤーアクセサリー！」

私は、私自身が火の魔法を使えることが……怖い。



でも・・・逃げない・・・！

私が妖精族で唯一火の魔法を扱える者として、この現実から逃げるわけにはいかない！

そうだよね、□□？

## 64・もう！ロロのバカ！ その6（後書き）

ミラのトラウマについては外伝でも書くかどうかと思ってます。

65・もう！ロロのバカ！ その7（前書き）

ミラ回ラスト！！！！

## 65・もう！ロロのバカ！ その7

「僕の剣に火が纏った？」

「私・・・火の魔法を使うことが怖いけど・・・がんばる！いつまでもロロに頼ってちゃダメだよね！」

本来、勇者は剣術に長けてるみたいだし、敵に対抗できるように勇者をサポートするわ。

「ファイヤーウォール！」

複数襲ってくる枝を燃やし、勇者の道を作った。

「本当は！めっちゃくちゃ怖くて怖くて！火の魔法なんて使いたくないんだからね！」

なかば半ギレで勇者にむかって叫ぶ。

勇者は小さく頷いて、一気にファールとの距離を縮めた。

「その程度の火をワシが怖がると思ったかあ！」

ファールの懐に入ったところで、ファールが自身をゆすった。上から葉が落ちてくる。

これって、毒の舞いじゃない！？

「ポ、ポイズリム！！！」

とっさに、勇者の頭上に結界を展開させる。

「助かるよ」

「助けてない」

「素直じゃないところがミラ君だね」

「うるさい」

早く倒しなさいよへボ勇者。

「天空へ舞い上がれ、翔天斬しょうてんざん!!」

いや、ただの切り上げでしょ。

なんでかつこつけたがるのかなあ。

でも、確かに剣はファールルの幹を真っ二つに切り裂いた。

「やるな・・・だが・・・!」

瞬間、ファールルの身体が黒く光った。

なんか言葉が見つからないような、音を消し去っていくような変な光り方をしたの。

嫌な予感がよぎる。

「あ・・・」

ボガーーーン!!!!!!!!!!

爆発。

自爆。

熱い。

熱い・・・よう。

「・・・なんでさ」

身体が・・・動かない・・・？

「なんで僕に結界を張っておいて、君は・・・」

私の身体は爆発の衝撃をもろに受け、羽はぼろぼろにちぎれて飛ぶことができない。

身体の間るところから血が出ているような感覚だった。確認する元気すらないが、痛みは感じない。

「シフォニシアへ戻ろう」

「・・・ダメ」

「戻らないとミラ君が死んでしまうだろう！」

めずらしく勇者が声を荒げる。  
らしくないじゃないの。

「・・・ダメなの」

「なにが?!」

□□・・・。

「・・・□□のもとに連れて行って」

「□□君のもとへ?」

「あんたを・・・守ったのは・・・そのためなんだから」

「□□君がミラ君を助けられるのかい?」

「・・・うん・・・もう頃合だから・・・」

「頃合・・・?」

「はや・・・く」

「・・・わかった」

私は勇者の手のひらの上でぐったりとする。

勇者はもう何も言わずに山脈へと足を進め始めた。

早く、私を口口のところへ連れて行きなさいダメ勇者……。

ああ、眠いよ……。

口口……。

……バカ。

## 65・もう！ロロのバカ！ その7（後書き）

ミラ視点はこれで終わりです！

もっと濃い内容（わかりやすく説明の多いもの、白熱の戦闘シーン）にしてもよかったです、みんなロロのこと忘れちゃうと思って・

・・w

作者の文章力が足りないだけだろうって？

・・・・・え、ちよつと聞こえなかったっすw



## 66・なにこれ、魔王の城（前書き）

口口視点に戻ります！

## 66 - なにこれ、魔王の城

先生！寒いので反則だと思います！

先生！寒さ対策に猫にも服を要求します！

先生！もう帰りたいです！

「やばっ、今一瞬寒すぎて変な風に考えてた」

先生って誰だよ・・・。

「なによ口口、寒さで頭飛んじやった？」

「セリー又はいつも飛んでるもんね」

「美しさが飛びぬけてるのはしょうがないことね」

はいはい。

アンスピカ山脈は相変わらず寒い。

感覚器官を麻痺させることはできるんだけど、寒いっていうのは危険信号だからねえ。

「見えました」

「おおダンジョンの香り！」

「懐かしいなあ」

ものすごいお城！って感じのお城が目の中にある。  
えっと、いつ来たんだっけ？

っていうか外から入るのは初めてだよね。

「セリー又ってさ」

「ん？」

「なんでついてきたの？」

「もちろんお金になるからよ」

「ああ、ミフリスに雇われてるのね」

「私の美しさで敵もメロメロだからね」

「そんな敵は見たことないけどね」

「ああ、ロ口は運が悪いのね」

「そんな思考回路になっちゃってセリー又は運が悪いね」

ダンジョン……っていうかダンジョンだし！

入り口を入ると入り組んだようなダンジョンになってる。

ここって一本道だったじゃん？

「生きる城ってところですか」

「なにそれ」

「この魔王の城は思考し、道を自在に変化させているのだと思います」

「へえ」

「私の魔法があれば迷うことはないのですが」

ミフリスって万能だねえ。

開けたところに出た。

「待っていたよ」

誰？

人っぽいけど人っぽくない感じの優男が部屋の真ん中からこちらを見ていた。

「魔王直属の四天魔<sup>してんま</sup>って言ったらわかるかな？」

「いや、知らないし」

「これから僕たちと一対一で戦ってもらう」

「はあ？」

「君たちは見たところ3人、だが問題はない」

「なにが？」

「さあ始めよう」

ああ、ごめん。

全く意味がわかんなかったわ。

なんでそんなに自分勝手な感じで話進めるの？

おかげでついていけないんですけど。

とりあえずサシで勝負して、勝ったら次に進めるーって感じのやつかな。

じゃあこいつを袋叩きにしたらいいんだね。

「勇者口口、日本生まれの君は武士道の心を忘れちゃいけないよ？」

「ぶ、ぶし・・・？」

かつおぶし？

なんかよくわかんないけど見抜かれたっぽい。

「む・・・そちらのお嬢さん」

「あら、私かしら？」

「ええ、とても美しい」

「ほらね」

セリーヌにめっちゃどや顔された。すっげえむかつく。

「あなたもなかなかイカしてるわよ？」

「それは光栄だなあ。ならば、僕とダンスでもいかがかな？」

「ご指名いただいちゃったので、いってきまーす」

えー、すごい軽いノリで一番手が決まっちゃったし。

なにこれ、仕組まれてない？

まあ、仕組まれていようがそうでなかるうが、全部倒す相手に変わりはないんだけどさ。

っていうかこの敵、すごいあのくそつたれ勇者に似てるから戦いたくないし。

こっちまでバカになりそう。

「セリーヌさん、気をつけてください」

「わかってるわよー」

「セリーヌ、きもいくらい機嫌いいね」

「あらー？そんなことないわよう。ちょちょちよっとひねって、私の男にしてあげるわ」

相手・・・一応魔物だよ。

## 66・なにこれ、魔王の城（後書き）

四天王的ななにかとの戦いっす。

ありきたりとか言っちゃダメですよっ！

だって、今まで口ロばっかり良い格好してきたし、仲間にもスポットを当ててあげたいじゃないですか！w

でも、いよいよラストダンジョンって感じがしてきましたねー。

## 67・なにこれ、さわれるの？

実際問題セリー又って強いわけ？

まともに戦ってるところってそんなに見たことないなあ。

とにかく動きが速くて、身のこなしが猫並みで秘術っぽい使えるってことは覚えてるんだけどね。

「僕は四天魔のヒューゴ、お見知りおきを」

「あら、ご丁寧にどうも。私はセリーヌ」

「本当に綺麗な人ですね。きっと戦い方も美しいのでしょう」

「もう本当のことだからって・・・もつと言っていいわよっ」

なにこれ、会話がきもい。

セリーヌが弓を構えた。

ヒューゴは小型の投剣を複数構えた。

お互い遠距離タイプらしい。

「はやくやれー」

「ロロ様、野次を飛ばしてはいけませんよ」

あ、ミフリスに怒られた。

なんかすみません・・・。

「いきますよ」

「いくよん」

お互いがお互いの攻撃を避け、勝負は始まった。  
なんか、すげーくしゃみでそう。

どうやらヒューゴの方が攻撃速度が速いみたい。

どんどん投げられる投剣を風が流れるようにセリー又は避ける。  
避けつつも弓を構えて矢を射る。

ヒューゴの投剣はどうやら魔法で実体化されたものらしく、地面  
やら壁やらに当たっては消滅している。

「長期戦になったら矢がなくなつて私不利じゃーん」

セリー又自らが避けつつ言う。

余裕なのかよ。

「のんきに解説してないで倒せっ」

「野次はいけません」

「ごめんなさい。」

「さすが美しいだけあって、戦いも可憐だ」

「違っわよ！超可憐よっ！」

いよいよ調子に乗りはじめやがった。

セリー又が投剣を打ち落とそうと矢を放つ。

投剣と矢は見事に交差し、そのままセリー又わき腹に一直線。  
確かに矢と投剣は交差し、打ち落とせたはずだった。

そもそも投げられた剣にむかつて正確に矢を射ること自体至難の  
技なんだけどね。

でも当たらずにすれ違った。

セリー又は冷静に弓を振り打ち落とそうとする。

「あれ？」

しかし投剣はそのまま一直線に、なんにも触れずにセリー又のわ



き腹に刺さった。

直前にセリーヌが身体を捻ったことで、深い傷にはならなかったようだけど……。

痛そうー。

「君の虚像に触れるようにする魔法リアルナイトメアと、僕の実体を触れさせなくする魔法ドリームオアイリユージョンか、どっちが強いかな？」

「イタタタ……あら、おもしろい魔法を使うんじゃない」

今まで実体だったものが急に幻になって、敵の身体に触れる瞬間に実体に戻してるってことだね。

最初から幻じゃないから油断できない魔法だね……。

あ、くしゃみ出そうなの止まったわ。

「私のリアルナイトメアの方が高性能ってことをスーパー可憐に教えてあげるわっ！」

## 67・なにこれ、さわれるの？（後書き）

今思ったんですけど、勇者とセリ<sup>シエル</sup>又ってタイプ似てる気がしますw  
っていうかこの物語りに登場する大半のキャラは人の話を聞かない  
傾向にあるようですね・・・。

え、作者はちゃんと人の話を聞くタイプですよ！

・・・会話<sup>が</sup>頭に入ってるかは内緒ですがw

68 - なにこれ、超美少女・・・だれ？

セリーヌの体が消えた。

いや、消えたように見えた。

一瞬にして加速し、ヒューゴの背後を捉える。

セリーヌが俺に教えてくれた身体能力を上げる魔法だ。  
しかも俺よりも高いレベルで加速してるよ。

「なっ・・・」

ヒューゴは背後をとられたことに気付いたのだが、一瞬遅かった。

「へへん」

得意げな顔と共に矢を放つ。

っていうか、リルナトメアイトだっけ？使っていないじゃん。

矢はヒューゴを貫通し、そのまま壁に突き立つ。

「驚きました」

いや、むしろこっちが驚くわ。

だって、貫かれたはずのお腹が無傷なんだもん。

「自分自身も虚像になれる・・・ってことかしら？」

「ご名答」

「イケメンってどうしていやらしい魔法ばかり使うのかしら」

「美女には特別ですよ」

「ん？もう一回言って？」

「美女には特別なんです」

「違っわよ！超美少女には特別って言うのよ！」

褒めてもダメなのかよ。

もうヒューゴが可愛いそうだよ。

「ふふ、おもしろい方だ」

違います。変な人の間違いです。

ヒューゴは変わらずに、手の中に投剣を一本ずつ生み出しセリー  
又にもかって投げる。

「うおっ」

セリー又が避けたひとつが俺のすぐ横で消滅した。  
飛んで来た風が俺の鼻をくすぐる。

「なーるほっどー」

セリー又はにやりと笑い、矢を二本構えた。  
投げつけられるナイフに向かって矢を放つ。

二本の内、一本はナイフを叩き落とし、もう一本はそのまますり抜  
けて直接ヒューゴの元へ飛んでいった。

一方でナイフはセリー又にむかって飛んで来ている。

お互い、自分たちの攻撃を華麗にかわした。

そして間髪入れず、セリー又は矢を再びヒューゴが用意した投剣  
の数よりも二本多く構えた。

ヒューゴは躊躇ためらわずに剣を投げつける。

「ぶうわつくしよにやー！ー！！！！！！」

うはっ、くしゃみでた。

「くっ、どうして・・・」

なにこれ、勝負ついたの？

くしゃみで全然わかんなかったし。

鼻をずっと吸ってから目を開けると、地面に這いつくばって苦しそうにしているヒューゴの姿があった。体中に矢が刺さって、見るからに痛そう。なにが起きたの？

「もっとうまく隠さないとダメよん」

「・・・」

「あんたの魔法は一度にひとつの対象にしか魔法を掛けられないんだから」

這いつくばるヒューゴの背中から、一本だけ突き抜けた矢が見えている。

ちょうど胸のあたりに刺さったやつだ。

「よく・・・核のことをご存知でしたね・・・」

「魔物ハンターの私を見くびらないでよね」

もうちょっと俺にもわかるように話をしてほしんだけど。

「ねえミフリス。核ってなに？」

「それよりも口口様、他人の戦闘中にくしゃみなどの集中力を乱す行為はいけません」

はい、ごめんなさい。

68 - なにこれ、超美少女・・・だれ？（後書き）

あえて空気を読まないこと

それは笑いの原則である。

昔の偉い人が言っていましたね。

このことを「AKY」と呼ぶようになってから何十年経ったのか・・・。

ええ、造語ですがなにか？

## 69・なにこれ、心臓＝マタタビ

「核とは、人間で言う心臓のことです」

「猫で言えば？」

「マタタビのことです」

「なるほど」

すげえわかりやすかった。

つまり、ものすっごい大事なモノってことだね。

「核を失った魔物は、新たに魔力を生成することができなくなるのです」

「へえ、死なないの？」

「魔物は基本的に人間と同じで、魔力で生きているわけではありません。それに、魔法自体も魔力の貯蔵庫的なところに貯まっているため、そこが空になるまで使うことができます」

「ふーん」

ミフリスは物知りだなあ。

「僕も・・・最後の抵抗くらい・・・させてください」

ヒューゴはよろめきながら立ち上がり、小さな投剣ではなく大きな槍を具現化させた。

「大きなものの具現化は大変なんですよ」

「あらら、これじゃあ矢で打ち落とせないわね」

相変わらずのん気なセリヌ。

おいおい、大丈夫なのかよ。

「せつかなので、喰らってください!!」

思いつきり投げられた槍は、途中で急加速をした。  
人間の避けられる速さじゃない。

「リアルナイトメア!!」

セリーヌは今まで呪文を口にしていたことがない。  
少なくとも俺は聞いたことがない・・・と思う。  
言葉にし、両手を前に付き立てた瞬間、なにかにぶつかる音を立  
てて槍がセリーヌの目の前で止まった。

「なにがっ!？」

「さて、なんででしょう?」

なんだろう?

まあ考えるつもりは毛頭ないけど。

「ヒントは、触れないものを触れるようにすること」

「まさか・・・!」

「本当にわかってる? まさかって言えば解答もらえるとと思ってない  
?」

あ、俺はそれ思ってる。  
バレたか!。

「空気を実体化したのですか・・・」  
「大正解! よくわかったわねえ」



なるほどね、空気を実体化ね、考えたね。

・・・で、なにそれ？

「あんたの虚像にする魔法の方がひとつの物体に対しては私のリアルナイトメアを上回ってたようだけど、あんたのは対象がひとつだし、再度使う場合にほんの少しだけタイムラグがあるようね」

「お見通しってことですか」

「私は美人な上に頭もいいのよ」

「さすがですよ・・・」

「でも、最後にその魔法から逃げた、それがあなたの敗因よ」

うお、かっけえ！

そのセリフ俺のパクリっぽいし！

「まさか何もないところから具現化させる魔法を使えるなんて思わなかったわ。両方の魔法を使えることにびっくりしたもん」

「はは・・・あなたには完敗です。先に進んでください・・・」

「私のことを褒めてくれたのは・・・うれしかったわよ」

「当然です、セリーヌ」

「今度はもっともつと褒め上手になりなさいね」

セリーヌは滅多に見せないような照れた表情をしてヒューゴに背を向けた。

セリーヌって実は褒められることにあんまり耐性ないのかもね。

「ほ、ほらっ！次の部屋行くわよ！もう！刺されたわき腹が痛いんだから！」

「あーい」

「はい」

ミフリスは少し羨ましそうな顔をしてセリーヌの後についていた。

人間ってよくわかんないね。

俺はミフリスの羨ましそうな表情が何に対してなのかさっぱりわからなかった。

70・なにこれ、覚え・・・てるよ

「あら、3人いるってことはヒューゴは負けちゃったのね」

次の部屋で待ち受けてたのは・・・子供？  
っていつかこの声、聞き覚えが・・・？

「覚えてないの？猫さん」

えっと・・・あ！

「リュック！！！」

「いや、リュカだよ・・・」

セリーヌとミフリスは誰こいつって顔してる。  
きっと俺も誰こいつって顔してたんだと思う。

「商人の娘のリュカだよ！」

「う、うん。もちろん覚えてたし」

「ほんとう？」

「モチロン」

っていつかなんでこんなとこにこいついるわけ？

「もしかしてさ、まだロロちゃんは気付いてないの？」

「ん？」

「私、魔物なんだよ？」

うつそー！？

だって最初に拾ってケージに閉じ込めた親子の娘の方でしょ？

「一番最初、召喚されてまもなくに捕獲したのは私だよ」  
「初耳です」

ミフリスが口を開く。

「寝てたって猫を捕まえるのが容易なわけじゃないじゃん。ミフリスのお姉ちゃん元から引き離すために魔法を使って捕まえたんだよ」  
「聞き捨てならないですね」

「あれあれ怒っちゃった？私悪いことしてないもんっ」

まるで挑発するように、リユカはにんまりと笑ってみせた。  
そこでもうひとつ聞いてみた。

「湖の港町で会ったのも偶然じゃないってこと？」

「もちろん。山賊の事件も私が企んだ作戦だよ。タコのお馬鹿さんが想定外だったけどね」

それって勇者の方？魔物の方？

まあどっちもどっちだけど・・・。

「なんのために？」

「それは・・・言えないよ」

「なんで？」

「乙女の秘・め・ゴ・ト」

可愛らしく言えばなんでも許されるとでも思ってたのかクソガキが。

っていう顔を隣のミフリスがしてます。怖いです。コワイです。

「ココは私が行きます」

ミフリスが一步前へ踏み出した。

「この魔物がいなければ、もっと早くに魔王を討伐できていたかもしれないのに・・・」

「リユカって名前があるよっ!」

「魔物は魔物!私はある人たちを認めません!」

「やだー、おばさんが怒ったー」

うわあ、言うよこの娘。

さっきまでお姉さん扱いしてたのに急におばさん扱いとかあんまりすぎでしょ。

別にミフリスだってまだおばさんだなんて言われる歳じゃないだろうに・・・。

髪の色は変な色だけど。

「じゃあおばさん。勝負しよっ」

「おばさんじゃありませんし、負けません!!」

こんな殺気めいたミフリス見るのは初めてだわ・・・。  
マジで怖い・・・。

70・なにこれ、覚え・・・てるよ（後書き）

リュカちゃん登場！！！！

まさかの四天魔でした！。

だって、出番があれだけだとかわいそうだったし・・・w

71 - なにこれ、俺の質問に答えてくれる人がいない

「私がおばさんごときに負けるわけないしー」

ミフリスの顔がピクピクつと動く。

よくわかってないけど、ミフリスってなんか筆頭まじゅちゅしとかいうやつで強いんでしょ。

ならそうそう負けないでしょー。

「私は魔物に負けないために強くなったので、負けるわけにはいきません」

両親を魔物に殺されたから恨んでるんだっけ？

俺には、気付いた時から親なんていないからよくわかんないけどなあ。

でも、ミラとかが目の前で殺されるのは見たくないかも。

野良猫時代にはよくあることだったけど・・・。

「ブルームーン！」

ミフリスが魔法を唱える。

人の頭くらいの大きさの青い球体が静かに現れた。

「アンチマジック！」

青い球体に変化が起こる前に、リュカが魔法を放った。  
って何も起きないけど？

「なるほど・・・」

なにが？

すると、青い球体は一瞬にして消滅した。

魔法が碎けてなくなることか初めて見たし。

「相殺ではなく・・・反魔法秘術ですね」

なにそれ。

また難しいの出てきたよ。

「よく知ってるのね」

「魔物の分際で秘術なんて使わないでほしいです」

「何が魔物で何が人間かなんて、決めてるのはいつも人間なのよね」

「なにが言いたいのですか？」

「べつつにー」

ミフリスの体の周りに球体状の魔方陣が描かれる。

「ダークファンシー！」

闇に包まれ、すーっとミフリスの体の中への消えていく。

「前にも使ってなかったっけ？」

俺の質問に答えてくれる人はいませんでした。

セリー又は前の戦いで刺されたお腹をさすりながら座り込んでる。

「インディグネーション！！」

急に雷のような電撃がリュカに降り注ぐ。



「アンチマジック！」

それも消滅する。

どうやらあの魔法は魔法を消すことができる対魔法使い用の魔法らしい。

今魔法って何回言った？

「困りましたね・・・」

「私からも仕掛けちゃうよん」

リュカは思いっきり跳躍し、一気にミフリスの懐までもぐりこんだ。

そして一閃。

「くっ・・・！」

拳を振り上げる。

ミフリスはなんとか身を反らして避け、距離をあげようとバックステップするが、それをさせまいとリュカが距離を詰めてきた。

「魔道士は遠近両用で戦えるモノが多いなんて言うけどさ」

リュカがにんまり笑う。

「結局は魔法頼みなヤツが多いのよ、ね！」

左フックがミフリスの頬を捉え、ミフリスは大きく飛ばされる。

「痛いです・・・」

立ち上がるミフリスの右頬は・・・無傷だった。  
確かに殴られてたよね？

「ちょっとー！どどういうことなの！？」

リュカの右頬が赤く腫れあがっている。

どゆこと？

自分のダメージを相手に移せるのか、与えてきた当人に対して反  
射してるのか・・・。

なんか、最強の防衛魔術保持者同士の戦いって感じだね。  
長引きそうで眠くなってきた・・・。

71 - なにこれ、俺の質問に答えてくれる人がいない（後書き）

小説を書く時間と気力をください！w

リユカとミフリスの戦いは色々な意味を含めています。

正直、ギャグ小説には不似合いなほど深いので、考えなくて結構ですw

72 - なにこれ、死んじゃダメ！

女同士の醜い拳と拳の戦いが始まってるよ！

醜いとか口に出したら俺が醜い姿になる可能性があるから絶対に言えないけどね。

「てあつ！」

リュカの下段蹴りをその場で飛び上がってかわすミフリス。  
その流れのままに上段回し蹴りを放ち、リュカを吹っ飛ばす。

「なんか私の方が不利な気がしてむかつく」

リュカが頬を膨らませた。

確かに、リュカが与えたダメージはなぜだかリュカに帰ってくる。  
一方のミフリスが与える物理ダメージはそのままリュカにいく。  
なんかこんがらがってよくわかんないけど、ミフリスがなんらかの魔法で優位に立ってるってことだよな。

「ロットウォーターアロー！」

複数の細かい水の矢が出現し、リュカを襲う。

俺がよく使う水の矢と似ている。

ミフリスにパクられた！。

「アンチマジック！」

瞬間、全ての水の矢が崩れて消滅した。

「やはり、ダメですか・・・」

「うん、ダメだよ」

「では・・・」

ミフリスがなにかを言うと、ものすごい速さでリュカとの距離を縮める。

たぶん身体能力を上げる魔法を使ったんだと思う。

またパクられたー！

「アンチマジック！」

一瞬で速度が落ち、近付ききる前にミフリスはブレーキをかけた。そこを見逃さず、リュカの方から距離を詰めてミフリスにボディブローを食らわせた。

「うつ・・・なるほど・・・」

「あれ、特に私にはダメージないし。もしかして見破れたってこと？」

「どうでしょうかね・・・」

この時点で俺なら戦い方のレパートリー少ないからギブアップするね。

でもミフリスは迷わず懐から短剣を取り出し、渾身の力でリュカにむかって投げた。

「ミラージュアイテム！」

短剣が複数に分裂する。

「アンチマジック！」

だが、分裂している途中で偽者の短剣は消滅し、結局投げた一本のみがリユカにむかっていた。

それをリユカは片手でキャッチする。

投げられた剣をキャッチするとか異常でしょ。

っていうか魔法がどれも効かないことに加えて、相手の体術が半端ないとか弱点なくね？

「武器くれてありがとー」

「いいえ、どういたしまして」

あくまでミフリスは冷静だ。

でも武器持ったリユカとか絶対危険だと思うんだけど・・・。

「ていつ！」

今度はその短剣をミフリスにむかって投げた。

「うそっ!？」

思わず俺も声が出た。

だって、ミフリスがなにもせずに胸の位置で短剣を受けたから・・・。

もう諦めちゃったの？

っていうか死んじやうのミフリス？

なんか・・・ソレは見たくないなあ・・・。

変な髪の色だけど、色々と説明してくれていい人だったし。

俺の目の前で仲間が死ぬなんて・・・許せない！

## 72 - なにこれ、死んじゃダメ！（後書き）

ちょっと、ハードな戦いすぎてギャグを盛り込むことができませんでした・・・。

次回はさらにシリアスな笑いなしーな展開になってしまいそうです。

### 73 - なにこれ、策士

「これだからおばさんて・・・嫌いなのよ!」

その場で崩れ落ちたのはリュカだった。  
どゆこと?

ミフリスの胸にはまだ短剣が刺さったままだ。

「ぐっ・・・!」

ゆっくりと自分で短剣を抜く。

「私の核・・・壊れちゃったじゃない!」

リュカが怒りの目でミフリスを見るが、ミフリスは辛そうな顔をしている。

っていうか本来死んでもおかしくないんだけどね。

「もう怒ったよ!粉々の塵になっちゃえばいいのよ!!」

そう言っただきな魔方陣を展開する。

発動にこれだけ時間掛けるのに、ミフリスはそれを止める動作すらできないでいた。

「ミフリス!ムリしちゃダメだぞ!」

「大丈夫です・・・私は絶対に負けません・・・!」

「あの子・・・すごいね」

今まで黙ってたセリーヌが口を開いた。



結構セリーヌもさっきのダメージが辛いのか、変に汗をかいている。

なんか、満身創痍な奴らばかりだ……。

俺だけ超元気なんだけど。

「メテオゼロ!!!」

核が壊れたって言ってたから、最後の魔力を振り絞って使う大技なんだと思う。

ものすごい大きな火の玉が頭上から降り注いでる。  
ここからでも熱いし。

「くっ……」

ミフリスはその火の玉を辛そうな顔で見ているしかできない。  
やばいよこれは！

「ミフリス！」

俺が魔法を使おうとして、

「ダメです口口様!!」

今までで一番大きな声で怒られた。  
なにがダメなんだし。

死んじゃうじゃんミフリスが！

「私は……必ず勝ちます……!」

でも何かをする気配はない。

「もう死んじゃえ！」

リュカが満面の笑みでミフリスを見下す。

「ぐう・・・！」

火の玉はそのままミフリスにぶつかった。  
ウソだろ・・・。

あれじゃあさすがに生きてるなんてムリだよ。

「あつ、あ、あ？ああああ！！！」

リュカの声が響く。

え？なんで？

「私の・・・体が・・・焼ける！？」

ちりちりとリュカの肌が焼けていく。

「ハッ！？そ、そうなのね・・・？あんたが使った魔法・・・」

ほぼ同時だった。

「バブルウォーター！」

「アンチマジック！」

水の泡によって火は一瞬で消え去り、出てきた水の泡も一瞬で消えた。

「私の・・・かわいい顔が少し焼けちゃったじゃない・・・!」  
「・・・・・・・・・・ダークファンシー」

ミフリスがボソッと呟く。

「あああああああ!!!!」  
「ううううううう!!!!」

同時にミフリスとリュカの声が木霊する。  
なにが起きてるのか全然わかんないし。  
そこに立っていたのは・・・ミフリスだった。

「私は・・・負けません!」

リュカは気絶し、その場で倒れている。

「なにが起きたの?」

素直にミフリスに聞いた。

「ダークファンシーという魔法が鍵だったのです」  
「うん?」

一番最初に自分に掛けてた魔法だよね。ものすごい魔方阵が出てたけど。

「あの魔法は、外傷のみを相手に返す魔法なのです」  
「リュカの攻撃でリュカの頬が赤く腫れたアレ?」  
「そうです。骨折や、出血など、外傷のみを返すのです。自分では気付かぬままにダメージを負うことになります。しかし、この魔法

は痛覚自体は相手に返されません」

「ミフリスは散々痛い思いをしたってこと？」

「・・・はい。これは精神との勝負リリンでした」

「俺なら絶対にすぐギブアップするわ。そういえばリュカの核が壊れたのって外傷を返せるからなのかぁ」

「そうです。そして、リュカの魔法アンチマジックは、術者が認識する魔法を全て消滅させる魔法です。なので、気付かれないように動く必要がありました」

「ふむふむ、敵の攻撃避けたりしてたのはそのためね」

「はい。最後に、ダークファンシーのもうひとつの効果は、自分の受けた一ダメージ（痛み）をそのまま相手に返すこともできるというものです」

「だから、最後その痛みでリュカが気絶したってこと？」

「ただし、そのまんまのダメージが術者にも施されます」

「え！？ミフリスはリュカの二倍のダメージを受けて、まだ立ってられるだけ余裕があるわけ？」

「・・・余裕はありません。これほどの痛みを伴ったのは初めてです・・・」

「復讐・・・？」

「いえ、復讐もそうですが・・・口口様のために・・・魔王を撃ち滅ぼすために・・・」

きつと、仲間のためにつて言いたかったんだろうね。

そのままミフリスはその場に倒れてしまった。無傷の体で・・・。

「口口君！..」

うわっ、どつかで聞いたことのある声が急にしてきた。

幻聴だよな！？

気にしないでいいよね！？

っというか幻聴であってください！

「やっと見つけた！！！」

あの勇者が走って俺の元へ来る。

カンベンしてよ・・・もう。

### 73・なにこれ、策士（後書き）

今回はいつもより文字数が多くなってしまいました^^;

説明しながらの戦いにしたいのですが、今回は敵にバレてしまうと全く意味をなさなくなってしまうような戦法だったので・・・  
まあ、いつも通り無理やりな戦いつてやつですねw

## 74・なにこれ、封印

「ここにいると思ったんだ！ミラ君が！」

なんだようっさいなあ。

「・・・□□？」

って、え？

なにこれ、ミラも死にそうじゃん。  
どうしたの？なんで？

「お前・・・一緒にいたのに守ってやらなかったのかよ！？」

思わず勇者に当たってしまっ。

「・・・すまない。僕が不甲斐なかったせいだ」

「・・・□□・・・お願い・・・私の近くにきて」

勇者がしゃがみ、ミラの乗った手のひらを俺の目の前に置く。  
なんで？死ぬの？

なんかさ、ずっとこんなばっかりじゃん。

どうしてなの？

なんでみんな笑ってないの？

俺が・・・悪いのか？

キュイーン！

「うおっ！」

瞬間、俺の首から提げている赤いお財布が光った。  
っていうかお財布を首に提げてたのとか忘れてたし。

「ロロ、ありがとう」

あれ？

どちら様？

「ミラだよ！あからさまにあんた誰？って顔しないでくれる？」

目の前には普通サイズの妖精族の少女が座っている。

ミラ？

うん、確かに容姿はミラだ。

どう見ても妖精族の子供なんだよね。

「大きくなっても小さいね」

「うるっさい！」

いてっ、頭叩かれたし。

勇者は呆然としている。

「みんな辛そうね……。少しだけなら楽にさせてあげられるよ」

ミラは自分の手のひらを広げ、なにやら呪文を唱え始めた。  
柔らかな風が通った気がした。

「あれ、痛くない？」

セリーヌの傷から血が出なくなっただけらしい。



「うつ」

ミフリスが目を覚ました。辛そうな表情はしてない。

「ミラ君・・・なのか」

相変わらず勇者は呆然としている。

さっきまで大怪我をしていたミラは、すでに元気だ。

「俺のお財布の中って何が入ってたの？」

「自分で見たことないわけ？」

「自分の首元のことを自分で取れるほど器用な生き物じゃないので」

「いーい、ロロ？頭を使えば猫だって取れるはずよ」

「そゆのいいから教えてよ」

「もう。えっとね、赤い魔石を入れてたのよ」

赤い・・・？

「闘技大会の賞品だね？」

勇者が答える。

あーあー、あつたあつた。

「あれには、まだ魔力がちゃんと充填されてなかったのよ。元々私とプリシアを封印した石だったんだけどね」

「それで？」

「ロロからは魔力が滲み出てるの。だから、ロロの首元で石に魔力を充填させてもらったってわけ」

「なんか・・・俺っていいように使われたわけ？」

「そうよ」

納得いかねえ。

「なんだよソレ！俺は封印されたままのミラを守ってあげたのに！」  
「だから・・・こんどは・・・」  
「ん？」

ぜんっぜん聞き取れないし。

「だから！今度は私が守ってあげる！って言ったの！」  
「・・・誰を？」  
「・・・口口を」  
「・・・」  
「・・・」  
「断る」  
「なんでよっ！」

だってたぶん俺の方が強いし！。

「封印を解いた私は妖精族で一番の魔法使いよ」  
「知らないよ」

「もう！口口のバカ！」  
「あれ、そういえばプリシアはどうなっちゃうの？封印解いたんでしょ？」

「プリシアはもう口口が倒したじゃない？」  
「ああ、そっか。この世界に来て初めての恋の相手だったなあ・・・」  
「なっ・・・！」

ミラの表情が歪んだ。

なんで？

って、ミラが俺を持ち上げる。

「ほ、ほら！次行くわよ！」

#### 74 - なにこれ、封印（後書き）

小さな妖精だったミラが子供サイズくらいの妖精になりました。  
ミラは小さな子なんです！！でもいちおう大人だと思っていますw

## 75・なにこれ、ミラ無双？

「よく来ましたね」

次の部屋に入ると、すごいオーラを放ったお姉さんがいた。  
なんか見たことある気がする。

「女王様・・・やっぱり」

ああ！妖精族の女王だ！

「ミラにはバレてしまっていましたか」

「私はもう、全てわかっていているつもりですよ」

「ならば、私の相手をしてくださるのは、ミラなのですね？」

「・・・はい！」

あれ、そういえばさ、なんで勇者たちはココに来れたわけ？

「ねえ、結構迷ったでしょ？ココまで」

「いや、一本道で驚いたくらいだよ？」

「どゆこと？」

「先ほども言いましたが、この魔王の城は生きているのです」

さすがミフリス先生！

それで？それでー？

「私たちが通った後、道が変わって一本道になったのでしょう」

「おかげで追いつくことができたんだよ」

「ふーん。ずいぶんうまくいくんだねえ」

「・・・そうですね」

ミフリスはなにかを考え始めてしまった。  
まあ、俺にはどうでもいいことだね。

「ミラー、がんばれー」

「言われなくてもがんばるわよっ」

「ふふっ、とても良い仲間に恵まれたようですねによりです」

「会ったことない人が二人ほどもいますけどね」

「大地の精霊よ、木の精霊よ、緑の精霊よ、我の元に集い、我の力となれ」

なんか難しい呪文みたいなのを女王が唱え始めた。

「グリーンウッドファーム！」

なにもない質素な石造りの部屋が、木々に覆われ始める。  
なにこれ、急にいきによきしたし。

「さあ、木々よ、敵を殲滅しないさい」

「私の相手は木ばかりだなあ」

木々が奇妙に動き、ミラを襲う。

ミラは動かずに両手を広げた。

「ねえ、女王様」

「なにでしょうか？」

「私、封印が解けてから間もないので、力の操作が曖昧なんです」

「そうですか」

「だから、もしかしたら一瞬で勝負がついちゃうかもしれませんがよ

「？」

言うなり、木々の動きが止まる。

その場よりも先に行けないというような動作になる。

たぶん結界が張ってあっていけないんだと思う。

「さすがミラですね。でも、私も魔王より授かった力があります」

「そう？じゃあ先に使ってください」

うわ、ミラが挑発的だ。

女王の眉間がピクンと動く。

「ならば・・・グランドバースト!!」

ミラの結界の中の地面がうねうねする。

そして、地面がミラを埋めようと襲う。

「ミラ・・・終わりです・・・」

地面がミラを囲み、そして

ボオオオオン!!!!!!!!!!

爆発した。

反則でしょアレ。

「それだけですか？」

ミラの声。

埃の煙の中にミラのシルエットが見える。

埃が晴れ、傷ひとつないミラが、女王を睨んで立っていた。  
あれで無傷って・・・ミラ強すぎ。



75・なにこれ、ミラ無双？（後書き）

ミラ強いよミラ。

ロリ＝最強は素晴らしいですよね！

## 76 - なにこれ、青い炎

「なんと・・・」

女王は動揺を隠し切れないでいた。  
いや、ふつーは死ぬでしょ。

「女王様、私は妖精族です」  
わたくし

「私もそうです」

「妖精族としての誇りがあります」

「私にだってあります」

「魔王の手先になることのどこに、誇りがあるというのですか!？」

さすがに怒ってるなあ。

「何もわかっていないようですねミラ。妖精族だって、魔王が生み  
し種族なのですよ？」

「ちがうつ!」

「違います」

「それでも、私は口口を討つことなんてできない!」

ミラの口調が荒くなる。

確かに、妖精族ってどういう立ち位置なのか微妙だよね。  
人間を襲うわけじゃないけど、人間じゃないし。

「ならば、私を倒してみなさい!」

「言われなくても・・・そうするわよっ!」

ミラが手を振りかざし、魔力を込める。

「ブルーフレア!!!!!!」

なにこれ、青い炎？

女王が召喚した全ての木々が焼き払われる。

そして、その青い炎は女王を焼こうと意思を持ったように動き回る。

「火・・・ですか。忌々しい!!」

「私は火に負けない! 負けないって決めたの!」

突然地面からツタが生え、ミラの体中に巻き付く。

「うっ!」

ツタは枝となり、みるみるうちにミラを取り込んで木になろうとしている。

同時に、青い炎は女王の身体を蝕み、その身を焦がしていった。

「ミラっ!!」

「口口っ!」

俺の名前を叫ぶと、ミラは自身を発火させた。

ミラを縛る木も一緒に勢いよく燃える。

熱そうとかそういう問題じゃないし。

大火事もいいところ。火傷で済んだら猫もびっくりだね。

だんだんと炎は弱まり、ミラが膝をつけてその場に座り込んだ。なんか見た目は傷がない。

「お・・・おのれ・・・!」

青い炎はすごく苦しそうにうめく女王を、跡形もなく焼き尽くした。

なんでミラは無事なの？

「結界のプロをなめないでほしいわね」

「ミラ・・・すごいじゃん！」

なんとなく褒めてみた。

「えへへ」

へえ、ミラって素直に笑うこともあるんだねえ。

にやにや俺がミラを見ていると、

「これくらい当然でしょ！」

なんか怒り始めたし。

よくわかんないね！。

結局妖精族とかもよくわかんなかったし。

あの女王から魔王倒せとか言われてたのにさ、一体なんだったわけ？

あーもう。

いろいろ考えるのがほんとにめんどくさくなってきたわ。

ってことで、次の部屋へ行っちゃおう！。

## 76 - なにこれ、青い炎（後書き）

ラストへむけて、いよいよ最後の四天魔ですね！  
もちろん戦うのはあの・・・。

77 - なにこれ、スルー

「次は、僕の番だね」

勇者がいきなりしゃしゃり出てきた。

「どうぞ」

俺は素直に譲る。

「ぐふえふえふえふえ！お前が相手かー！」

なんかすごくバカそうなヤツのいる部屋にきちゃったし。

勇者もバカだから、ちょうどいい対決になりそうだね。

図体がものすごい大きな魔物。

「俺は四天魔最後の大ボス、キングオークのジョルジュだー！」

「僕はシエルヴィ。君を倒す者さ」

さつてと、俺は次の部屋にでもいこつかな。

勇者の戦闘とか興味ないしねー。

剣と剣のぶつかり合う音が木霊する中、俺はふつーに横切る。

「ロロ君！先に行くんだ！！」

「え？うん」

わかってんじゃなか！

めずらしく空気の読める発言をした勇者に感動しつつ、俺は次の部屋へ向かう。

死んだら俺が火葬してやるからな・・・。

適当に思いつつ、ミラ、セリーヌ、ミフリスに気づかれないうちにこっそりと次の部屋へ入った。

「やあ、よく来たね勇者ロロ」

「久しぶりだな！魔王ハゲル！！」

かつこよくキメた。

「いや、ベネルだから」

冷静につっこまれたし。

覚えてたけどあえてボケてみた俺ってかつこいいよね。

「ロロ。少しは強くなったかい？」

「まあ・・・ぼちぼちね」

「僕の用意した道を通ってきてくれたみたいだね」

「は？」

「妖精の森の巨人、闘技場のゲート、盗賊の一件、渓谷のレベッカ」

「なんで知ってんの？」

「全部僕が部下に命令して実行したことだからだよ」

「リユカとかに？」

「そうだよ」

「なんで？」

「ロロに強くなってもらうために」

「どゆこと？」

「僕を倒してもらったためだよ」

「DMなの？キモいんですけど」

「・・・君は勇者だね？」

「さあ？」

「以前、勇者のシステムについて話したことがあったね。覚えてるかな？」

「……………う、うん」

「すみません、ほとんど寝てました。」

「この世界の魔物は勇者の出来損ないさ。動物から培養したもの、植物から培養したもの、人体実験の結果生み出されたもの……様々なさ」

「それで？」

「バカバカしいけどね、勇者は魔王と魔物を倒して初めて勇者、英雄なんだよ」

「だから？」

「君は勇者にならないといけない。だから、僕を倒さなければならぬんだ」

「ちよつと理屈がよくわかんないんだけど」

「ようは、戦おうっていう話だよ」

「ようはそういうことね。」

「俺は体勢を低くし、身体能力を上げる魔法を自分に掛けた。」

「魔王の言ってる意味はよくわかんないけど、とにかく戦うしかないっぽい。」



## 77 - なにこれ、スルー（後書き）

うざったい勇者シエルヴィの戦闘は割愛しますw

だって口口の興味がなかったんですからしょうがありませんよね。

ついに魔王との戦いですが、戦いながら歴史の話を盛り込めたらいいなと思います。

## 78 - なにこれ、魔王強すぎ

相変わらず子供の姿の魔王は、片手を振り下ろしたただけで俺のいたところに穴をあけるほどえげつない。

「君はイレギュラーな部分が多すぎるみたいだね！」

言いつつ魔法攻撃を絶やさない。

「僕は目覚めてからすぐに状況を把握せざるを得なかった。なぜなら、魔王には魔王という役割を担うための知識を頭に植え付けられるからさ」

俺はミラの結界を真似しつつ、極力避けるように上下左右に飛び跳ねる。

「六大賢者というのを聞いたことがあるかい？その六人の魔法科学者が僕たちのシステムを作り出したんだよ」

なんか聞いたことのあるようなないような単語がでたし。時折光の矢で反撃するも、全て相殺されてしまう。

「君のイレギュラーな要素のひとつ、まずは猫ということ」

「うっさいわ！存在否定すんなし！」

「そして二つ目、弱い」

うえ、俺って弱いのか？

結構ショックだし……。

「弱いが故に、強くしなければならなかったんだよ」

「さっき言ってた道ってやつ？」

「そうさ、全て僕が用意した道だよ」

「ミラたちに会うことも？」

「そうだね、ほとんどはシナリオ通りだね」

そんなわけあるかつ！

「最後に、魔王に勝てないこと・・・だよ」

「は？さっき自分を倒せのこと言ってたじゃん」

「君が元の世界に戻りたいのなら、ってことだよ」

「意味わかんないし。別に俺は戻りたいわけじゃないけど・・・」

瞬間、魔王が両手を自身の上にかざして闇の魔法を凝縮する。

「でも俺が負けるわけじゃないじゃん！」

俺も光の魔法を凝縮する。相殺狙いじゃない。

お互いが魔法を放った瞬間、俺は後ろに飛び退いた。

「ほら、自分でもわかってるじゃないか口口」

うん。今のはさすがにわかったわ。

とてもじゃないけど勝てない。

俺のいたところの床は綺麗にえぐれている。  
完全に力負けをした。

「僕が強すぎるのかな」

「言ってるよ」

でも・・・ムリっぽそうだし。  
やっぱり帰ろうかなあ。

「特別に教えてあげるよ。勇者の役割はね、魔王を倒してココの研究施設にある勇者システムをリセットすることなんだよ」

「リセット？」

「そう、そうすることでまた百年後に一定の魔力を糧としてシステムが発動するようになる」

「召喚の儀式ってやつ？」

「そうさ。勇者ならわかるはずなんだよ本来はね」

「俺はわかんないけどね」

「イレギュラーの塊だからね」

イレギュラーイレギュラーうるさいなあ。

そもそもイレギュラーってどういう意味なんだよ！

よくわかってないけどわかってるフリして会話しちゃったじゃないか！

た、食べ物じゃ・・・ないよね？

78 - なにこれ、魔王強すぎ(後書き)

やっぱり魔王強い!!!

## 79 - なにこれ、イレギュラー？

とりあえず、俺が勝てない現状にあることはわかったわ。

「さあ、結着をつけよう？ 僕が勝ち、僕が勇者を名乗り出てあげるよ」

「なんでさ」

ふと、疑問が浮かぶ。

「なんで、システムのすぐ近くにいるお前はすぐにシステムをリセットしなかったわけ？」

「簡単なことだよ」

「なに？」

「システムをリセットすると勇者は元の世界に戻るのさ」

「じゃあなんで・・・？」

「ただひとつ問題なのが、それはひとりだけってこと」

「つまり、勇者か魔王かひとりしか帰れないってこと？」

「そう」

「じゃあさっさと帰ればよかったじゃん」

「この世界にいる勇者と魔王が共存している状態だね、強制的に二人とも送ろうとシステムが働くらしい」

「そうするとどうなるん？」

「ふたりとも時空の狭間で永遠をすごすことになるだろうね」  
「なるほどね」

つまり、魔王ベネルは自分の家に帰りたいってことか。

「やっぱ子供なんだね？」

「僕がかい？」

「うん、家に帰ってお母さんに会いたいんでしょ？」

「ははは、そうだね。そうだよ。元の世界に帰りたいに決まってるじゃないか」

そうなんだね・・・。

「だから！だから僕たち魔王は勇者を倒そうとがんばるんだ！」

「じゃあどうして最初に会った時に俺を殺さなかったの？」

「元の世界に戻るシステムの魔力は、倒れた方の勇者か魔王から搾取されるからだよ」

「ああ、あの時点じゃ俺の魔力だとシステム発動には足りなかったってことね」

それもシヨックだなあ。

「今なら大丈夫だ。だから・・・死んでくれ口口！」

軽く千本くらいの闇の槍が出現し、四方から俺を射貫こうと向かってきた。

うはっ、これは避けられないわ。

思わず目を瞑った。

「ダークシールド！！」

あれ？生きてるっぽい？

肉球を開いたり閉じたりしてみる。

生きてるよ俺。

「もう！口口のバカ！！！」

あれ？ミラの声？

「こっそり行っちゃうとかどついう神経してるのよ！」

「ほらほら、お姉さんが華麗に綺麗に助けてあげるよ？」

「魔王討伐のサポート、お任せください」

ああ、三人とも来てくれたんだ。

せつかく、巻き込まないようにこっそり来たのにさ。

「あれ、クソ勇者は？」

「まだ戦ってるよ」

見捨ててきたんだね。

「君たちも僕にとっては十分イレギュラーなんだよね」

ベネルがくくくと笑う。

「よくこんな強くて良い仲間を手に入れたよね」

「シナリオ通りじゃないの？」

「彼女たちは、ロロの影響を受けてさらなる強さを手に入れているってことに気付いた方がいいと思うよ」

俺の影響？

「そうか、おもしろいねロロ。やっぱり君はイレギュラーだよ」

イレギュラーはおもしろいものなの？



## 79・なにこれ、イレギュラー？（後書き）

□□のわかる単語とわからない単語の差ははっきり言ってありません！

なんとなくわかる単語とわからない単語があります。

## 80 - なにこれ、黄色い光

力が湧く。  
なんで？

「私の美しい魔法で口口をスーパーな猫にしてあげるよん」

セリーヌの強化魔法らしい。これはすごいね。

「私は後方支援をつ！」

言うなり、ミフリスがベネルにも負けられないような無数の魔法の玉をベネルにむかって放つ。

「口口っ!!」

俺がその魔法に乗じてベネルに近付き、ミラの魔法で髭を伸ばす。そしてそのまま、ベネルの横を通り過ぎた。

「どうだ!？」

「なにかな？」

あれ？今確かに攻撃できたよね？

「その程度の魔法で勝とうっていうのかい？魔王を舐めすぎだね」

まじっすか。

確かに伸びた髭がベネルを貫通したはず……。感触もあったし。

「もう一回!」

「リアルナイトメア!」

セリーヌの魔法で絶対に当たるハズ・・・!

「だから、遊びならもうやめにしよう」

うそでしょ。

ここまで実力差があるとか反則でしょ。

「ふんっ!」

ベネルは魔法の剣を作り、一瞬で俺の目の前へ現れ、そして俺を薙ぎ払った。

「うにゃ!!!」

広い部屋の壁まで飛ばされる。

「私の結界で防げない・・・?」

ミラが瞬時に結界を張ってくれていたらしい。  
おかげで死なずにすんだ。

「こんなもんか」

ダメだね・・・。

ベネルが強いのはわかってたけどさ、ここまでつてのはいないよ。  
ハア、奇跡でも起きないかなあ。

「口口諦めちゃだめだよ！」

ミラが俺に駆け寄る。

回復魔法で俺の傷を癒し、青い炎でベネルに牽制する。

「私は負けたくないよ！」

俺だって負けるのは嫌だし。

でもさ、でもさ、どうやって挽回するの？  
圧倒的すぎるじゃん。

『せ……を………せよ』

ん？

なに？

『世界を……変革……せよ』

頭の中に響く声。

『勇者よ、世界を変革せよ！』

突如、黄色い光が俺を包み込んだ。

「なんだ？」

ベネルが目を細める。

俺だってなんなのかわかんないし。

『自分の道を信じる。勇者の道がいつも一本道とは限らない』

あ、思い出した。

あの盗賊の時の黄色いドラゴンの声だ。

「まさか、黄竜の力!？」

え、なにそれ。

「最初の勇者、ヤスオが作り出したと言われている最大のイレギュラー的な存在」

「作り出した？」

「以降の勇者には力も貸さず、静かにしていると聞いていたんだけどね・・・」

よくわかんないけど、わかんないままでもよくなってきたし。

『魔王を倒すことが全てではない。お前のやり方を示してみせろ』

ものすっごい力が湧いてきたんですけど。

「にゃ!?!」

さっきの一発の何倍にも魔力が凝縮された光の玉を百個以上つくり出す。

「おやおや、これはいい勝負になりそうだね」

笑ってられるのも今のうちかもね、ベネル!!

80 - なにこれ、黄色い光（後書き）

最初の勇者の名前をヤスオにしたことに本当に後悔してます・・・。  
外人の名前つければよかった・・・w

力を入れた口口がどういう答えを見つけるのか、次回必見ですよっ！！

## 81・なにこれ、三毛猫の口

ものすごい爆発が起こる。

城の壁が崩れ、隣の部屋が見える。

「にゃ！」

まばたきをする間にベネルに近付く。

早すぎて頭がついていけなさそうだし。

強化した爪でベネルを切り裂くが、ベネルもタダでは受けてくれない。

おもいつきりお腹にグーパン喰らった。

「おもしろいじゃないか。どこまでもイレギュラーを貫くなんて」

「でしょ？おもしろいことは取り柄のひとつなんだよ」

「勇者が魔王に倒されるというイレギュラーが起きてもおかしくなさそうで嬉しい限りだよっ！」

嬉しそうに笑いながら、強烈な魔法を放ってくる。

「フォースシールド！！！！」

「にゃ！」

ミラの結界で弱まった魔法を相殺する。

続けざまにベネルが俺の懐に入り、魔法を放った。

「うにゅ！！！！」

俺は崩れた壁を飛び越え、隣の部屋に入ってしまった。

いつてえーし。

あれ？なにここに、研究室みたい？

足元には魔方阵があり、その周りには魔法科学の研究施設が並んでいる。

「リ・・・セツト？」

あ、リセットボタンあったし。

すつげえわかりやすいところにある。

これを押すと、俺と魔王は時空の狭間に閉じ込められちゃうんだっけ？

っていうか文字読める猫とか本格的にすごくない？

「えーつと」

壊しちゃおう。

うん、壊しちゃおう。

「にゃ！」

ベネルに向けてではなく、研究室のようなこの部屋を破壊するよ  
うに魔法を放つ。

ボンッ！！

「な、なんてことをっ！！！！」

ベネルが血相を変えて俺に近付く。

「だって、壊しちゃえばいいじゃん。勇者システム？なにこれおい



しいの？つて話だもん」

「システムの破壊なんて、なにが起きるかわからないんだぞ！？」  
「知ったことじゃないよ。俺は自分勝手に生きる猫だもん」

揺れる。

城が揺れている。

同時に、地面にある魔方陣が光っていた。

「ああ、元の世界に戻る道が・・・」

「この魔方陣が？」

光ってる。発動してるってことかな？

「この世界の魔力がこの魔方陣に集まっている・・・？」

よくわかんないけど、今がチャンスだわ。

「にゃ！！！」

魔方陣に夢中になっているベネルに向けて、特大な魔法を放った。  
もちろん、ベネルは反応に遅れ直撃する。

「くっ・・・！」

死んでない。まあ、死ぬほどやばい魔法は撃ってないんだけどね。  
それでも気を失わせるには十分だったっぽい。

「ばいばい、元気でね」

ベネルに言う。

魔方陣の上で倒れている少年は、静かに魔方陣と共に消えていった。

「ロロ！大丈夫！？」

「ミラ……」

ミラが傍に来る。

「ねえ、もしかしてさ……もうロロは自分の世界に帰れないんじゃないの？」

「うん」

「なんで、魔王を元の世界へ帰したのよ」

「偶然システムが壊れて、偶然ひとりだけ帰れそうな感じになったんだもん。いいじゃんそれで」

「なんでそんなに優しいのよ……猫のくせに」

「どうせ帰っても、帰る場所のない野良猫だよ」

「……もう」

「ねえミラ知ってる？」

「え……」

「三毛猫の雄はさ……」

三毛猫の雄はさ

長生きしないんだよ。

「なによ?」

「いんや、なんでもなーい」

「いーい? ロロ! 隠し事なんてダメなんだからね!」

「ほらミラ、行こう? さつきも言ったけど、帰るとこなんてないんだもん。だから一緒にどこか行こう?」

「ロロ・・・」

小さく頷いて、ミラはまた小さな妖精に戻り俺の頭に乗った。

あ、小さくなれるんだね。なんか懐かしい感触。

道はひとつじゃない。自分で作ればいい。

こういうことなんでしょ? 黄色いドラゴン。

勇者システムを破壊して、全ての魔物を勇者という呪縛から開放する。

こうして世界にはなんにもなくなったわけだけどさ、勇者なんていなくなっただけいいじゃんか。

だって、この世界の事情なんて俺の知ったことじゃないし。

自分勝手? 褒め言葉だよ。

自己中心? 当たり前だろ。

傍若無人?・・・えっと、どゆ意味?

まあ、なんでもいいけどさ、俺はとにかく自由なんだよ。

なぜなら俺は三毛猫のロロなんだから。

なにこれ、俺かっこいいし。

## 81・なにこれ、三毛猫の口口（後書き）

ほぼ最終回っす!!

今回はエピソード的ななにかです。

作品的に、ここで読み終えるのもひとつかもしれません。  
次回は作者的にはおまけな気持ちです。  
気になる方はぜひ読んでみてください。

## 82・なにこれ、エピソード的な

こっそりと、こっそりと、ミラを頭に乗せた俺は魔王の城の外に出る。

「ロロー？ミラー？おーいおーい！綺麗なお姉さんの元へ帰っておいでー」

「ロロ様！？まさか・・・これが勇者システム・・・？破壊・・・されてるのですか？」

セリーヌとミフリスが探してるっばいけど無視無視ー。

だって、俺はもう勇者じゃないんだもん。

あ、勇者といえば、あのアホ勇者はどうし・・・

「おやおや、こんなところにいたのかい？」

余計なこと考えたから本物が現れたし。  
ずいぶんボロボロじゃなか。

「これから新婚旅行かな？それなら南のリゾート、アスパルチームがオススメだよ」

言うなり俺の首から下がっている赤い財布に旅行券を無理やり押し込んだ。

「し、新婚旅行ってなによっ！ば、ば、バカ勇者！」

頭の上にいるミラは顔が見えないけど声が焦ってる感じだった。

「んじゃ、行ってくるわー」

シエルヴィ

勇者って結局なんだかわかんない奴だったなあ。

アホでバカでどうしようもないってことだけはわかってるけどね。

「ロロも否定しなさいよっ！」

え？なにを？新婚旅行って意味がちょっとわかんなかったし。  
旅行っていうか旅じゃん？じゃあ合ってるんじゃないの？

「もう！ロロのバカ！！」

頭をつねられた。

でも、なんでだか痛くない。

ようやく、勇者というしがらみから開放された。

俺は猫だ。猫は自由だ。だから俺は自由だ。

これからの勇者システムのこととかギルドのこととかはミフリス  
とセリーヌに任せちゃえばいいよね。

頭使うところは仲間にパスするわ。

勇者システムから開放されたのはなにも俺たちだけじゃない。

この世界そのものだ。

自由ってものすごく難しいものだけど、まあなんとかなるっしょ。  
この世界がなんとかならなくても俺には関係ないしねー。

力って使うためだけにあるんじゃないんだと思うんだ。

時には使わないということもひとつの選択肢なんじゃないかな。

魔王を倒せるだけの力を黄色いドラゴンはくれたけど、俺の可能性を  
広げてくれたんだと思う。

もちろん、俺の勝手な解釈だけどね。

猫ってさ、死に際に姿を消すって言われてるじゃんか。

一説には、病気の痛みとかからの恐怖から身を隠すって言われてる。

一説には、飼い主に迷惑にならないようにって言われている。

一説には、死体を晒したくないって言われている。

一説には、安全なところへ行って生きようとするって言われている。

俺はどれだろうね。

どれでもないのかな。

旅に出て、いろんなところに行って、いろんなことしたいじゃん？  
残り短い命でもさ、笑って笑って笑わせて死にたいじゃん？  
きつとそんな感じ。

ベネルはお母さんに会えたかな？

なにこれ、ハッピーエンド。ばいばいー！

## 82・なにこれ、エピソード的な（後書き）

ここまで読んでくださった読者の皆様、本当にありがとうございました。

ロロの旅はまだまだ続くようですが、このお話はここで終わりとなります。

作者自身この作品には思い入れが強く、とても勉強になった作品でした。

ギャグファンタジーというジャンル、初めて書かせて頂きまして、とても難しいと実感しました。

なんかマジメでつまらない話もここまでにしようと思います。

感想やら評価やらアドバイスやらお待ちしております！

余談ですが、三毛猫の雄の寿命が短いというのは相対的に雌と比べた時の話です。希少価値の高い猫なので、幸運を呼ぶと言われているらしいのですがロロはどうだったでしょうかね。

それではまた次回作でも・・・。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3072h/>

---

勇者 = 三毛猫??

2010年10月10日12時31分発行